
Muv-Luvもう一度この手に

黒闇鳳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v もう一度この手に

【Nコード】

N 0 8 2 3 R

【作者名】

黒闇鳳

【あらすじ】

オリジナルハイヴを攻略した武は元の世界へと戻るはずであった。

しかし、その魂を同じくする異世界の存在との邂逅を果たすことで、もう一度戦火に包まれた世界へと向かう。

今度こそ、ハッピーエンドを迎えるために・・・

かなり独自設定を含んでおりますので悪しからず？プラス結構ご都合主義が入るかな？無理矢理感が否めないorz

自分には文才と呼べるものがなく駄文とは思われますが、どうか海のように広い心で本作にお付き合いください（笑）

P r o l o g u e 修 正 版 (前 書 き)

訂正箇所

青年 少年に変更

一部の文章を書き直し

Prologue 修正版

かつての戦いでその命を賭した英霊達が眠る桜の木の下。一帯の重力異常により付近で草木が育つことはないが、この桜だけは例外的に花を咲かす。一度も桜が花を咲かす所を見てないなと苦笑するも時既に遅し。夕呼先生と霞に見送られる中、この世界での役割を果たした白銀武の体は白い光に包まれ死に満ちた世界から姿を消した。

今まで得た情報を総括した夕呼先生曰く、因果導体から解放されたのでようやく武は元の世界へと戻れるとのことだ。

初めてループを経験した時から、元の世界に帰れるこの時を一体どれほど待ち望んだのだろうか？

（でも、納得なんて出来るわけねえだろ！まりもちゃん・・・委員長・・・彩峰・・・たま・・・美琴・・・冥夜・・・・・・純夏。伊隅大尉、速瀬中尉、涼宮中尉、柏木もみんな死んじまったんだ・・・これで終わりだなんて・・・俺は嫌だ！）

この世界を救わなければ。最初は義務感にも似た気持ちだったのだろう。唯一滅びを知っている人間としての責務だと。だが現実はその甘くはなかった。

BETAとの初陣で取り乱した武は何も出来ず、世界を救えると粹

がっていたと知らしめられ、ただ自分の弱さを嘆く。そんな自分を見かねて、恩師は自身の体験談を踏まえて教えを説いてくれた。

やっとのことで前を向いて進もうと思った矢先、その恩師が目の前で殺された。一度は恩師の死の重みに耐えきれず、この世界から逃げ出してしまったのだった。

だが、逃げ出した先でも世界は白銀武に対して非情だった。因果が流れ込んでしまったことで恩師が再び死に、みんなの記憶から「白銀武という存在」が消えていく中、さらには幼馴染までもが重傷を負ってしまった。

元の世界の夕呼先生に叱責され、今度こそ因果を断ち切るためもう一度戦場に戻り、人類史上最大ともいえる戦いを続けた。

戦い続けていく中で沢山の命が消えて逝くのと引き替えに、見事オリジナルハイヴの中枢「あ号標的」を撃破。

未だ絶滅の一途を辿る世界ではあるが、僅かばかりの猶予と希望を与えることに成功したのだった。

しかし、救世主ともいえるであろう武はこんな結末しか出せなかった自分に腹が立つ。いや、本来ならこんなことを想うのは、この結果を出す為に散っていった命を鑑みるに不謹慎であろう。それでも自分になら・・・二度目のループで覚悟と力があつたならもっと最良の結果を引き寄せられたのではないか？心の奥底ではずっとそんな考えがこびりついていた。

（出来るならもう一度だけ・・・もう一度だけでも俺に今度こそみんなを護れるチャンスをくれよ！）

世界から薄れゆく意識の中で必死に叫び、誰かが居る訳でもないのに掴もうと手を伸ばす。

深海へ引きずりこまれるのに対し、あくまでもがこうとする武。ただ無駄なあがきだった。頭では分かっているつもりなのにそれでも、と武はifを望むのだ。

（ちくしょう・・・ちくしょう！こんな形で、あいつらを喪ったまま終われるかよ！）

足の先が境界線に触れたかと感じると同時に、消えかかっていた意識の片隅で強烈な存在感を放つ何かを捉えた。そしてそれは、自分に近づいてくるようだった。

「なら、僕が君に力を貸すよ」

そんな声が聞こえてきて、何だと思う間も無く手を掴まれ意識每表層まで引き上げられていく。ほどなく視界がクリアになって、武の目に映った相手の姿は少年だった。

「お前は一体・・・？」

「初めまして、白銀武。簡単に言うと僕は君なんだ。異世界のね」

「ハア！？でも、そういう割には俺に似てなくね？」

目の前の少年といえば日本人の容姿というより、欧米人といった方

がいい容姿をしていた。

武の疑問にきょとんとしていた少年だったが、あははと笑って答えてくれた。

「うーん、肉体に宿る魂の性質が似ているって言った方が良いのかな？『シロガネタケル』が『白銀武』の姿をしている世界以外に、僕や犬といった姿をしている世界があるんだよ。あつ、別に重要じゃないから話だけ知ってたらいいよ。」

「ふーん。それで、力を貸すってのはどういうことなんだ？」

要は元の世界で築地が猫になったようなことだろうと当たりをつける。武自身因果についてなんとなくは理解出来ているので、少年の話の先を促す。

「僕が出来るのは君がもう一度、あの世界に戻る手伝いをするってことだよ。そして未来を掴む力を託すこと。」

口より発せられたのは武が待ち望む答えだった。

「・・・本当に？本当に、もう一度俺にチャンスがあるんだな？」

念を押すように何度も確認するのに対し、目の前の少年はただ黙って頷くだけであった。

武はガッツポーズを決め、叫びそうになるのを必死に堪える。心情を鑑みるにそうするのも無理からぬことだろう。

「ただし」

そんな武を引き戻すかのように、今までとは異なり冷たい少年の声が武の耳に入る。

「君がこれから向かうことになる世界は、今まで経験したものとは異なってくると思う。厳しいものになるかもしれないよ?」

「そんなこと言われなくても決まってる。今までだって決して楽な世界じゃなかったんだ」

例え何を言われようと決心が変わるつもりはなかった。今なら覚悟も力もある。もう一度、今度こそみんなを護れるのなら・・・

「俺は今度こそ絶対に、みんなと望む勝利を掴みとるんだ!」

目の前の少年に宣言する。対する少年も真剣な面持ちで頷いた。どこか満足そうな感情を感じられる。

「なら、これを持って行って欲しい。」

少年が指し示す先にあったのは

「なつ、こいつは戦術機なのか・・・?」

そこにあっただのは白銀の機体だった。そして、その機体は今まで見たことがあるどの戦術機とも異なっていた。そして、どちらかとい

えば元の世界でハマっていたバルジャーノンというゲームに出てくる機体に似ていた。

少年に言われるがままに腹部のコックピットハッチに座る。中身からしてやはり、今までの戦術機とはまた異なるようだった。

機体を立ち上げ、周囲の状況がスクリーンに映し出される。なんと
いうか、戦術機よりもさらに機体との一体感を感じる武であった。

（こいつは・・・すげえ）

「武、時間がないから手短に話すよ。その機体は戦術機なんかじゃない。全く別の次元の機体だから、向こうの世界でスペックを確認しておいてくれ。それとそれは『君に』しかうごかせないから。」

「おう、分かったぜ。」

「あとこれから君が向かう世界には、さまざまな平行世界を歪ませる原因がある。それが間接的にはあるけど、君を因果導体に仕立てあげたんだ。」

少年の口から発せられたのは、最後の間際に聞いた話を覆すものであった。驚いてしまうのも無理はないだろう。

「なっ！純夏じゃなかったのか!？」

「詳しいことは僕にも分からない。形があるのかすら定かではないし、何よりそれが何を目的としてるのかも分からないはまだ。」

そして、それが君を因果導体になるように純夏さんの周りに影響を与えたといった方がいいのかな。で話を戻すけど、それがある限り平行世界の歪みは消えないんだ。

だから白銀武。君が世界を救ってくれ。僕には出来なかったけど、戦う意味を理解した今の君になら、ううん君達になら出来るはずだよ。」

「ああ、今度こそみんなで世界を救ってやる。」

少年はありがとう、と穏やかな笑みを浮かべる。が、少年の体が突如ぼやけ始めた。

「もう・・・時間みたいだ。これから僕の最後の力で君を跳ばすよ。」

「ああ・・・ありがとうな、『オレ』」

礼には何も答えず、ただ黙して目を閉じ集中する。すると、武の機体ごと白い光に包まれる。

「『シロガネタケル』達の想いを・・・世界を・・・頼むよ。」

その言葉を最後に武は白い光の中に消えた。時を同じくして、最後

の力を振り絞った少年もその魂の存在ごとく消え失せたのだった。

Episode?

2001年1月横浜基地

横浜基地の副司令でもある香月夕呼は自身の研究に勤しんでいた。

デスクには資料とおぼしき紙束が散乱し、飲みかけのコーヒーを一気に飲み干しせわしなく手を動かす。

（理論は出来ている、それなのに・・・）

思考と手、どちらも止めない。険しいその表情には疲労が見えてとれる。

（あたしの理論は間違っていない！なら、今の技術が追い付いてないの？）

そこまで考えて、椅子にもたれる。天を仰ぎ頭に手をやり、一つ大きなため息をつく。

カップに手を伸ばしコーヒーを飲もうとするが、既に飲み干した後なのに気づき部下に新しいものをもってこさせようと通信のスイッチを入れた。

「あー、ピアティフ。新しいコーヒー持って・・・」

ゾクッ

（何？何なのよ今は・・・）

頭の中に異物が入り込んでくる感覚に、夕呼は戸惑いを隠せないでいた。

「香月副司令？」

「えっ、ああ。新しいコーヒー持ってきてちょうだい。」

不思議に思ったピアティフだったが、すぐさまお持ちしますと言って通信が切れたのだった。

「あー、あたしってば疲れてるのかしら？だいたい誰よ、白銀って・・・」

口ではそう言ったものの、何故か白銀という人物を知っているのだった。一度たりとも会ったことがないのに、その容姿や性格までもきちんと覚えている。

それどころか自分と白銀が肉体関係を持つシーンに至る、隅から隅々までもが記憶としてあった。

これには流石の夕呼も顔が赤くなる。全く覚えのない男と関係を持ち、さらにはそいつが明らかに年下だからだ。常日頃年下は性別認識外だと豪語してきた自分故に信じられないでいた。

「まったく……一体どんな冗談だっていうのよ。なんであたしがあんなやつなんかと……」

「……冗談なんかじゃありません。」

そこにちよこんと居たのは、オルタネイティヴ？の重要人物社霞であつた。

「社、それどういうことよ？」

「白銀さんが今この世界に来ました。」

その一言を言われた途端、夕呼の頭の中で今までの全てが繋がった。平行世界から来たガキ臭い救世主のことを思い出したのだった。思い出すと夕呼の表情が柔らくなり、なつかしむようなものとなる。理解を得られたと確信した霞は部屋から出ていこうとしていた。それに気づいた夕呼は慌てて霞を呼ぶ。

「ちょっと霞。どこ行くのよ？」

「白銀さんを迎えに行きます。」

「ああ、もう！待ちなさいってば！」

そそくさと出ていく霞を夕呼も追いかけてる。数分後、コーヒーを持ってきたピアティフが来た時には誰も居なかったのだった。

夕呼と霞は二人で武を迎えに行くところであつた。今まで二度の経験からして、武はいつも自分の家で気づくと言っていた。

強いて挙げるとするなら武がこの世界に現れる日付が変わっているのが気になるが、霞が武のイメージを捉えることが出来るため、迎えに行つてすれ違ふなんてことは無いだろう。

何よりまさか自分の事を覚えているとは思つてないだろう。其故、今から武の驚いた表情を見るのが楽しみな夕呼だった。

（フッフ、あいつの驚く顔が目には浮かぶわ）

「（ピクッ）・・・博士あんまり白銀さんをいじめないでください。」

「

ウサギの耳飾りが動き、リーディングによって夕呼の感情を読み取った霞がすかさずツツコンだ。

「いやよ、あいつをからかってやるのが楽しみなんだから。」

玩具を与えられ、悪魔な表情で笑みを浮かべる夕呼。これに先程よりも大きな反応を見せるウサギの耳飾りであった。

(・・・白銀さん、すみません)

止められないと分かった霞は心の中で謝っておいたのだった。

そんなことすら気にせず夕呼は上機嫌な様子で足を運ぶ。

それから二人が正門から出ようとした所で、後ろから駆けてきた神宮司まりもに声をかけられた。

「夕・・・香月副司令！どちらへ行かれるんですか!？」

振り向けばそこには、まりも以下207B訓練生の全員が揃っていた。

「やゝね、まりも。ただの散歩よ、散歩。」

「せめて護衛をつけてください。」

「護衛なんかいたら息抜きにならないじゃない。」

続く夕呼とまりもの会話は徐々にいつもの夕呼がからかう展開になつていく。

「博士、皆さんも白銀さんの記憶を持っています。」

今にも泣きそうになっているまりもを見かねて、霞が口を挟んだのだった。

「……あなたたちも白銀の記憶を？」

「はい、香月副司令。つい先程思い出したのです。」

全員を代表して榊千鶴が答える。他の者も同じように頷いていた。

（因果が流れ込んできている？いえ、白銀は既に因果導体から解放されたはず）

「……まあ、いいわ。とりあえず白銀を迎えに行くわよ。」

そう言つて夕呼はスタスタ先を進んでいった。霞以外は不思議に思つていたが後を追うのであつた。

しばらく無言のまま歩き、ようやく白銀が居るであろう家までたどり着いた。

「なっ！？何なのだあれは・・・？」

御剣冥夜がそう口にするのも無理はなかった。武がいるであろう家の前には見たことがない白銀の戦術機があつたのだから。

「・・・ピカピカ」

「はわわわわ・・・」

「すごいねえ、あれも戦術機なのかな？」

彩峰慧、珠瀬王姫、鎧衣美琴がそう口々にする。夕呼やまりも、霞は口にすることはなかったが、表情から察するに驚いているようではあつた。

白銀と蒼をベースカラーとし、両腕には楕円を引き延ばしたような盾、さらに両手に大型のライフルを装備。背中に大型のスラスタらしきものが、腰にはスカートアーマーらしきもの。さらにさらに、肩や脚部とあらゆるところに推進装置が見られる。

皆がみな呆然として見上げてる中、腹部のハッチが開いた。そこから現れたのは、見間違うことなく白銀武本人であった。ただし、その右目のみが変わっており従来の黒から白銀へとなっていた。

Episode?

武が目を覚ますとそこはコックピットの中であった。

（ここは・・・戻ってきたのか？）

まばたきを数度繰り返し現状を把握しようとする。が、その時右目に急な激痛が走る。

「ぐあっ」

目を開けていられないほどの痛みに武は手で押さえようとする。が、痛みはすぐさま何もなかったかのように引いていった。

「なんだっただんだ今は・・・？」

訳も分からず呆然とする武であった。しかし今やるべきことを思いだすと、スクリーンに映し出された光景に目をやる。そこは廃墟となつた柊町だった。

「ははは・・・戻ってきた。戻ってきたぞ！」

武はつい笑いがこぼれてしまう。望んだとはいえ、まさか本当にやり直せるなんて夢にも思わなかったのだ。

あまりに都合が良すぎるといつていいだろう。これは「あの自分」に感謝しなくては・・・

「さて、まずは夕呼先生と接触しないとな。ん？」

ついさっきは気づかなかったが、機体の足下に人が居る。そしてそこにいた人物を見て、武は自然と涙が溢れてくる。

「みんな・・・」

そこに居たのは、もう二度と会えないと思っていた人達。桜花作戦で武を生き残らせようとし、自らの命を糧としたのだ。その皆がポカーンとしてこちらを見上げている。

無理もない、と武は苦笑する。今乗っているのは明らかに戦術機とは異なるのだ。しかし、これで夕呼との関係を上手く結べるかどうかは分からなくなった。別の世界云々を信じさせる手間は省けたのだが。

けれども、今は感傷に浸るべきではない。いざとなれば霞にリーディングしてもらい、真偽を確かめてもらえばいい。

もう一度この世界でやらなければいけないことを思い出し、気を取り直して機体から降りるのだった。

機体から降りると武は歩み寄っていき、みんなと無言で対峙する。生きている姿を見てまたもや涙が溢れそうになるが、ぐっと堪える。向こうもこちらを見てきているが、まりもがいるにも関わらず銃を向けてこないのが気になった。自分で言うのも何なのだろうが、今の武は怪しいというレベルを越えている。

対峙したまま静寂が場を支配しており、このまま無言が続くかと思われた状況を変えたのは、やはり夕呼であった。何か霞と言葉を交わし、こちらを見つ直す。

「・・・で、あんたは桜花作戦を成功させた白銀でいいのかしら？」

「えっ！？夕呼先生今なんて・・・？」

「だ・か・ら、あんたは三回目のループをして、桜花作戦を成功させて消えてしまった白銀武でいいのかってことよ。」

「はい、それで間違いありませんけど。それより先生も記憶があるんですか！？」

驚くべきことであつた。今まではこんなことなかったのだ、予想しろと言うのが馬鹿らしい。

「概ねそうだと言えるでしょう。あつ、ちなみにここにいる全員が覚えているわよ。」

「白銀さん！」

「タケル！」

「白銀っ！」

「・・・白銀」

「たけるさーん」

「タケルうー」

「白銀！」

夕呼がそう言つと、皆が一斉に駆け寄つてきた。そして次々と飛びかかってきたのだった。

「うわっ！ちよつとみんな！」

「ハイハイ、感動の再会は後にしてまずは基地に戻るわよ。・・・
つと、白銀あの戦術機は何？」

それにあんた、右目の色が変わってるわよ。一体どうしたの？」

「何と言われてもちよつと分かんないんですけど、それに話せば長くなりますよ？あと、右目が変わってるんですか！？・・・それは全然分らないです。」

「・・・ふーん、ならいいわ。とりあえず基地に戻りましょう。白銀、あの機体は後で回収させるわ。」

そう言つて、白衣を翻して戻っていく。武もしがみついて嬉しさを表すみんなを立たせてから急いで後を追うのだった。

横浜基地夕呼執務室

「・・・魂を同じくする存在に平行世界を乱す原因、ね・・・にわかには信じられないけど、あんたのことなんだから事実なんでしょうね。全く・・・なんて馬鹿げた妄想と頭を抱えなくなるようなことばかり持ち込むのかしらね、あんたは」

夕呼は呆れ果てて武を見つめる。対する武は、今回が何時もの2001年10月22日じゃないことに驚いていた。

「アハハハ・・・すみません。付け加えるなら、あいつは原因を取り除くことが自分には出来なかったと言っていました。」

「なるほどね・・・まあいいわ。今は考えても仕方がないことだね。BETAと戦ってれば嫌でも分かりそうだしね。」

ま、積もる話はあるけどとりあえずあんたは機体を回収して、スペックデータを纏めなさい。余裕がある訳じゃないけど前回よりは時間があるんだから、やれることはやっていくわよ。」

「分かりました。90番ハンガーでいいんですよね？」

夕呼が頷いたのを確認すると、武は部屋を出ていった。

話を聞いていたまりもは90番ハンガー？といったように首を傾げていた。一方の残りの207B訓練生といえば、あそこか・・・というように納得していた。佐渡島ハイヴ攻略が淒乃皇の自爆で消滅により、ハイヴ攻略という意味では限りなく失敗に近い成功を納めた。その際、残存していたBETAが横浜基地に侵攻してきたのだ。ここでBETAは陽動という戦術を用いてきた。

横浜基地侵攻の目的は基地の地下深くにある反応炉であった。多大な犠牲を払いつつこれを破壊。なんとかBETAの侵攻を退けた。

この時90番ハンガーが戦場となった。90番ハンガーは、所謂秘密格納庫で淒乃皇があり、そこへBETAを誘引して戦ったのだ。次々に押し寄せるBETAを相手に、戦いを強いられた彼女達には苦い記憶がある。

武を送り夕呼はさて、と言って残りのメンバーに顔を向ける。

「聞きたいことはあるだろうけど、まずは覚えてることを全部話してもらえないかしら、と・く・に白銀に関して。」

全員に話を促し、順番に聞いていったのだ。一人一人の話がなかなか長くなり全てが終わったのは話し始めてから約四時間もの時間が経っていた。

「・・・みんなそれぞれ白銀と結ばれた記憶があるみたいね。それと、オルタネイティヴ？が成功した世界のも。」

結果、各々の話を纏めてみると個人差があるものの二つの世界の記憶を持っていることが判明した。

一つはオルタネイティヴ？が失敗し、その後各自が白銀武と結ばれた記憶。もう一つはオルタネイティヴ？が成功し、犠牲を払いつつもオリジナルハイヴを攻略出来た記憶。

話を聞き終えた207B訓練生メンバーは桜花作戦を成功させたとはいえ悔いていた。いや、前の世界で死ぬ直前には悔いはあるまいと思っていたが、いざこうして生きているとそう思ってしまう。

まりもに関しては、自分が死んでしまった後自分が教えた訓練生達が桜花作戦を完遂させたことに誇りを持つ一方、思慮が足りず武を追い詰めてしまった不甲斐ない自分を責めていた。

「はいはい、今さら考えても仕方の無いことでしょう。それよりもこれからの事の方が大切よ。」

パンパンと手を叩き、皆の注意を引き付ける。そして、武が元々はこの世界の住人ではなく、BETAの居ない比較的平和な世界から来たこと、恐らく死ぬ度にループをしていたことを簡単に説明したのだった。

「なるほど。其故タケルは特別だったのか。」

「・・・ズル？」

「ま、でも一回目の白銀はお荷物だった訳だしね。」

「はわわ、たけるさんは頑張っていましたよ。」

「そうだよータケルは出来ないなりに頑張ってたよー」

「・・・道理で最初手間がかかる訳だ。」

と、皆各々の反応を示した。

「それでここからが本題なんだけど、いい？・・・」

「なっ！？・・・？」

「それで、・・・」

この女性達の秘密話は武が機体を回収し終えたとの連絡が入るまで続いた。

一方、90番ハンガー

武は約一日かけて機体のスペックを確認し、また夕呼に報告するた

めにデータをまとめていた。

（すごいな・・・これが量産出来たら、マジでBETAを一掃出来るんじゃない？ってもなかなか上手くはいかないんだろうけど）

簡単に説明を加えると、戦術機が扱う小型の光学兵器に、光線級のレーザーを防ぐことが可能な対レーザー装備。後は流用可能な各装備群についてのデータがある。

本機にはまだまだ特徴はあるが、先に述べた以外にはワンオフと思われるので割愛。先の二つに関しても量産の見通しが立つとはいえ難しいようであった。残りの物については改良みたいなものだったので、すぐにでも取りかかれるだろう。

また、その桁外れなスペックに感心し、この機体が引き起こすBETAとの戦いにおける変化を期待出来る。

だが、この機体をもってしてもあの青年は出来なかったと言ったことに対しての不安もあったのだった。

（いや、今はそんなことよりも帝国軍や斯衛との連携を強化して戦力を上げるべきか？この辺は先生と相談しないとな）

考えとデータの両方を纏め上げ、夕呼に報告すべく執務室へと足を運ぶ。

コンコン

「先生、白銀ですが機体のデータを持つてきました。」

「どうぞー」

入室の許可を得て部屋へと入ると、そこには意外な人物が居たのだ。
った。

「つ、月詠中尉!？」

「・・・久しぶり、というべきだろうな白銀。」

そこに居たのは冥夜の護衛役でもある、斯衛の月詠真那中尉だった。

「・・・もしかして月詠中尉も、記憶があるんですか？」

「ああ。私もだが、殿下も記憶があるとのことだ。其故、香月副司令に事情を聞かため私が此处に参ったという訳だ。」

これまた予想外な展開ではあった。いくらなんでも都合が良すぎる状況に、武の頭は混乱していた。

「白銀、殿下からの言伝を預かっている。勿論私からも同じことだがそなたに一つ言いたいことがある・・・桜花作戦遂行誠に大義であつた。」

「・・・オレは冥夜をこの手で撃つたんですよ？罵倒や殴られはしても、オレにそんなことを言われる資格なんてありません。」

武は一発二発殴られる覚悟を決め、月詠から視線をそらさずに歯をくいしばる。

「・・・そなたは死に様を選ばれた冥夜様の意志を尊重した。礼は言いこそすれど、そなたを貶すことは冥夜様を貶すと同義。」

そなたが其れでも納得出来ないのであれば、今度こそは冥夜様を御守りして欲しい。」

「・・・はい。オレは、今度こそ護ってみせます。」

泣きそうになる武を、柔らかな表情で一瞬見つめる月詠。そして、夕呼に一言入ってから部屋を後にした。

「・・・白銀、敢えて言うわ。強い意志を持ってこれから起こる事に臨みなさい。恐らくあんたは今回、自分の意志の力で世界を移動した。なら、あんたの意志の強さが世界を変えられるはずよ。」

「・・・はい、夕呼先生。」

「期待させてもらっわよ、白銀。」

夕呼が優しく微笑む。一瞬それに見とれてしまった武だったが、直ぐ様切り替える。

「夕呼先生が優しいなんて、何か企んでるんですか？」

「失礼ね。仮にも世界を救った救世主を労ってあげたっていうのに。」

いつも通りのやりとりに二人ともが笑ってしまうのだった。

あれから落ち着いた武は纏めたデータを渡し、それを夕呼が驚きながら確認していた。勿論、秘匿情報なので外部に漏洩しないよう紙の資料に纏めたものを、である。

そうして全てに目を通すと、夕呼は資料を燃やした。これで恐らく今は外部に情報が漏れることはないだろう。

燃えたのを確認した夕呼の手がプルプルと震えていた。

（あつ、ヤバいぞこれは）

「あーっはっはっは、白銀くあんた最っ高よ。」

何度か見たことがある様子に危機感を覚えた武ではあったが、結局夕呼の豊満な胸に顔を埋めるように抱きつかれた。

武は軍人として訓練している筈なのに、飛び付いてくる夕呼を避けることが出来なかったのだった。

引き剥がすのを諦め、さっさと退いてもらうべく夕呼に声をかける。

「離してくださいよ先生。年下は性別認識外でしょう?」

これで以前なら、年下なんかに手を出して悪かったわね、で終わる筈だった。しかし、今回はそうはいかなかったのだった。

「ま、実際そうなんだけど・・・あんなだけは特別よ。」

「ちょっと・・・冗談ですよ、先生?」

恐る恐るといったように聞き返し、冗談に決まってるじゃないなんて、からかいの言葉が返ってくると思っていた。が、それは覆ることがなかった。

「あんたはかつて因果導体だった存在で、この世界に二人と存在しない貴重なサンプルよ?このあたしがそんなあんたを手放す訳無いじゃない。」

「ひでえ！扱いが人間じゃねえよ！」

「それにあんたって下手したら精神年齢だけならあたしより年上なんじゃない？ま、若い肉体に引つ張られているようではあるけどね。」

そんなことを言われ、否定出来ないところに怖さがある武だった。そうして、一体どうなんだろうと自分自身についての考察を深めていく。

「ハイハイ、今はそんなこと後回しにしなさい。これから真面目な話なんだから、さっさと頭を切り替える。」

夕呼にそう言われ、ハツとした武は即座に頭を切り替えて話に集中する。

「それで、まずあんたは一回目や二回目の世界で誰と結ばれたの？」
いきなり何を言い出すんだ？と思いながらも、夕呼の目つきには冗談のようなものが見て取れなかった。武も真面目な表情で言われたことを思い出していく。

（えーっと確か一回目は冥夜だったよな？二回目は純夏で・・・あれ、でも委員長や彩峰、たまや美琴、まりもちゃん。挙げ句の果てにはや夕呼先生まで記憶がある！？オレってそんなに節操無かったのか？）

思い出していく内に顔が青くなる。自分は純夏を愛すると決めていたのに、これでは会わせる顔がない。

「それで誰と結ばれたの？いいから正直に答えなさい。」

いい加減答えない武に対して、痺れを切らしかかっていた夕呼は催促する。促された武は戦々恐々とした態度で応えるのだった。

「えーっと・・・怒らないで聞いて欲しいんですけど、あいつらやまりもちゃんも含めた全員です。で、でも何でか経験したことがないはずの記憶まで有るんですよ!？」

慌てて訂正しようとする武だったが、いつもならここで冷やかすのに今の夕呼は真剣な表情であった。

「・・・やっぱりね。今のあんたには経験したことのない記憶までもがある。ちなみに昨日まりも達に聞くと、皆が白銀と結ばれたって言ってたわ。」

それにあたしとも記憶があるはずよね？これが何を意味するか分かる?。」

敢えて言わなかったのにどうして知ってるんだ!？と思いながらも、必死に頭を働かせて考えた。

「・・・色んな世界の因果の流出ですか？」

「正解。今のあなたには他の世界の白銀武としての記憶が混ざっているのよ。だから、身に覚えの無い記憶まであるの。それがなんであたしやまりも達にもあるのかは分からないんだけど・・・恐らく白銀と結ばれたからなんじゃないかしら？」

付け加えると、今この場に存在している白銀武は不安定なのよ。本来なら存在し得ない矛盾もあるし、既に因果導体からは解放されているはずだしね。それで、元々は居ないあんたを世界に繋ぎ止めるのが必要となる。

これには生半可な繋がりじゃ到底不可能よ。そこで、白銀。あんたはまりも達でハーレムを作りなさい。」

ババーンと夕呼は指差して打ち出した。呆氣にとられる武。

「・・・はあっ！？何言ってるんですか、先生。」

「これはマジもマジよ。おっと・・・あたしも毒されてきたわね。

あんたを世界に繋ぎ止めるのに一番良い方法なのよ。既にまりも達には承諾を得たし、さっき月詠中尉には、殿下に一夫多妻の法律改正をしてくださいつて要請してみたわ。そしたら殿下も同じようなことを言っていたらしいわよ。

あんた殿下にまで覚えが良いなんて流石にあたしでも予想も出来なかったわ・・・ま、潔く諦めなさいよ、白銀。」

止めを刺され落ち込む武。その脳裏には幼馴染みによって電離層まで吹っ飛ぶ自分が見えたとか。

「それでこれからのことなんだけど、とりあえず00ユニットのこととはあたしが何とかするわ。」

あんたには帝国軍と斯衛軍に一度顔出ししてもらうことになるわね。既にX M 3を組みつつあるから今日は確認のためバグ取りよろしく。あと、御剣達は一応訓練生として訓練させてるわ。まあ、問題が解決すれば直ぐに任官させるけどね。それまでは体力作りとシュミレーターを主にさせる。

ちなみに何かあった時には出てもらうわよ。実戦経験のある衛士を遊ばせてせるほど人手は無いしね。他のことで何か聞きたいことはある？」

「先生、00ユニットはやっぱり・・・」

「・・・そうよ、あんたの幼馴染みの鏡純夏。」

覚悟はしていたとはいえ、改めて聞くとやっぱり気持ちちが沈んでしまふ。例え00ユニットだとしても、純夏を愛する気持ちに偽りは無いのだけれど。

「白銀、あんたは今やるべきことをしなさい。あんたはあの結末に

納得出来なかったんでしょ？なら、今ここで立ち止まっではいけない。」

「・・・先生。オレは皆を助けた上でBETAを倒します。甘いなんて言われるのは百も承知ですけど、それでもこの世界に『オレ』という存在がいる以上、諦めたらいけないんだと思うんです。」

「フフン、甘つちよろいけどそれでこそ白銀よ。殿下との謁見も既に予定してあるからそれまでによろしくね。」

「はい！・・・先生、純夏のこと宜しく願います。」

武は返事をして、部屋を出ていったのだった。

「期待してるわよ、白銀。」

Episode?

BETA

それはBeings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race（人類に敵対的な地球外起源種）の略称である。

1973年に地球に襲来して来て以来、圧倒的な物量、高度な学習能力、厳しい環境にも耐えうるBETAは地球上の総人口を六分の一にまで減らした。

ただ、人類も手をこまねいてきた訳ではない。コミュニケーションを図ろうとこれまで多くの試みが為されてきた。

しかし、それらは全て失敗に終わってきた。何故ならBETAは人類を生命体だと認識してないためであった。

故に人類は何ら有効な手段を得られないまま、果ての無いBETAとの戦いを強いられてきたのだった。

一機の戦術機が光線をかわずように空を舞い、反転しながら要撃級に劣化ウランの銃弾の嵐をぶちこむ。更には降下の噴射の勢いに乗

せて、別の個体を縦真つ二つにした。

足場を確保して着地と同時に、すかさず光線級を護ろうとしてる要塞級目掛け突撃。その巨体を上手く壁に使いつつ、光線級を殲滅していく。

光線級を殲滅し終わると、後は早い。制限無く繰り広げられる武の三次元機動をもって、残りのBETA群も殲滅したのだった。

「お疲れさまでした、白銀さん。」

シミュレーターから降りてきた武に対し、霞は労いの言葉をかける。その傍ら、心無しか疲れてそうに見えるのが少し心配だ。

「流石は霞だな！ほとんどバグがなかったぜ。」

「いえ、二回目ですから。」

謙虚な態度を示す霞。彼女はオルタネイティヴ？計画のESP能力者である。

オルタネイティヴ？はESP能力者によるBETAとの意思疎通を図ろうとするものであった。

多くのESP能力者が人口子宮から産み出され、またBETAとの戦いでその命を散らしていった。

また、霞はオルタネイティヴ？でも重要な役割を果たしている。

「どうぞ。」

「ああ、悪いな霞。」

霞はシミュレーターから降りた武に飲み物を手渡す。武はゴクゴクと一気に飲み干し、傍にあった椅子に座った。

「ありがとうな霞。お前のおかげでX M 3も完成だ。少しは休めよ？」

わしゃわしゃと霞の頭を撫でてやる。すると、顔を赤くして感情に呼応するようにピコピコとウサギの耳飾りが動く。

「休んでから、最後の仕上げをします。・・・またね。」

「ああ、またな。」

そう言つて顔を赤くしたまま霞は部屋を後にする。見送った武はぐつと背伸びをし立ち上がった。

「さて、オレもP Xで昼飯でも食いに行くか。」

朝からずっとシミュレーターに居たので、ぐうぐうと腹の虫が鳴くのは致し方ないだろう。苦笑しつつもPXに向けて歩き出したのだった。

PXに向かう途中、曲がり角からまりもが姿を現した。

「まりもちゃん！」

呼ばれて気づいた本人は、はあっとため息をつき頭に手をやる。けれども、仕方ないなとばかりに駆け寄ってきた武を見る。

「まったく・・・お前は何度注意すればいいんだ？」

「す、すみません神宮司軍曹。」

呆れたようだが、まりもに教官としての威厳をもって注意され、ペコペコと頭を下げる武。そんな武を最初はきつく見ていたまりもだったが、すぐに表情が和らいだ。

「フフ、人目のない所ではまりもちゃんで構わないわよ、白銀。」

武を慈愛に満ちた瞳で見つめる。元の世界のようなまりもに武も苦笑いを浮かべる。

「・・・夕呼から話は聞いたけどあなたは本当によく頑張ったわ、白銀。」

「・・・でも、オレのせいでまりもちゃんは！」

今でも鮮明に思い出される最期の瞬間。振り返ったところにあつたのは、兵士級に頭を喰われているまりもの姿。

どうしても目の前で見てしまったあの光景が頭から離れない。抑えきれない感情を吐露する武の唇に、まりもはそつと人差し指を添える。

「あれは私の不注意でもあるわ。冷静に考えれば、まだBETAが居るかもしれない戦場で説教するなんて・・・教官失格ね。だからそんなに自分を、夕呼を責めないで。」

「まりもちゃん・・・」

まりもは昨日夕呼からトライアルについての詳しい話を二人きりで聞いていた。普段はふてぶてしいあの香月夕呼とは思えないような表情で話すのに、まりもはそんな苦しんでいた親友の力になれない自分を逆に責めるのだった。

「それに今はこうして立派になった教え子と触れ合える。それだけで私は嬉しい。」

「まりもちゃん・・・!」

まりもの優しさに感極まった武は涙が溢れる。そんな武をまりもは抱き抱えるようにして包み込むのだった。

「落ち着いた?」

「・・・はい、すみませんまりもちゃん。」

頃合いを見計らいまりもは武に声をかける。まりもに包まれ、だいぶ冷静さを取り戻せた武は今さらながらこの状況に恥ずかしくなり、慌てて離れたのだった。

いきなりの行動に驚いたまりもであったが、武の表情から別に問題があった訳ではないと察すると安心したように笑みを浮かべる。が、さっきまで自分がしていたことに気づくと恥じらいを見せるのだった。

お互いがお互いに気を遣ってしまい無言のままであったが、このままではいけないとまりもは話を切り出す。付け加えるなら、自分がやるべきことを思い出したからでもある。

「白銀、動かないでね。」

そう断って武に階級章をつける。武に与えられた階級は大尉であった。

「これで白銀が上官になってしまったわね。」

「でも、まりもちゃんには今まで通りにして欲しいな。」

今まで通りを要求する武にまりもは仕方ないと承諾した。その後、まりもが用事があるとかで別れていったのだった。

まりもと別れた後、武は少し遅くはなったもののPXに来ていた。

「おや？あんな見かけない顔だね。」

「今日から配属になりました白銀武大尉です。よろしく願いします。」

（またお世話になります、おばちゃん。）

「そうかいそうかい。これからもよろしく頼むよ、タケル。」

いつもと変わらない京塚のおばちゃんを嬉しく思い、定番となっていた鯖味噌煮定食を受け取ると、空いた席を探す。

「タケル、此処が空いてる故一緒に食事をしようぞ。」

「たけるさーん、こっちですー」

すると、奥の方から冥夜と王姫が武を呼んできた。そこには、207B訓練生が全員居たのだった。

時間が合わなかったのだろうか、207A訓練生達の姿は見えなかった。

「・・・遅い。白銀何してた？」

「ああ、シミュレーターで朝からバグ取りやってたんだよ。」

「あーっ！タケルが大尉になってるう！」

階級章に気づいた美琴が声を上げる。他の者も気づくと驚きを見せる。

「まさか白銀が上官になるなんてね。」

「・・・嫉妬？」

「誰が嫉妬するのよ！」

いつもながらのやりとりを繰り返す千鶴と慧。

「だが、タケルの力を考えるとこれは妥当なところであろうな。」

「すごいよ、たけるさん！」

「ありがとうな、冥夜、たま。ま、大尉といってもいつも通り接してくれよな。」

「うん、それでこそタケルだよ。」

「そうね、白銀に対して敬意を表す必要なんてないものね。」

「・・・そうそう。」

一度は失ったはずの仲間との触れ合いは武の心をなごませるのだっ

た。

昼食を終え、皆と別れた武は階級章と一緒にIDを受け取っていたので純夏のところに行こうかと考えながら歩いていると、後ろから声をかけられた。

「タケル、少し良いか？」

「冥夜？・・・ああ、いいぜ。」

そこに居たのは冥夜だった。こうして二人で対峙すると、否応なしにオリジナルハイヴでの出来事が思い出されてしまう。冥夜がア号標的に捕らえられ、紫の武御雷ごと荷電粒子砲で撃ったあの時を。

「話というのはな、その・・・そなたには己のが弱さ故に嫌な役目を押しつけてしまった。」

「待った、冥夜。その話はしなくていい・・・弱気な冥夜なんてらしくないぞ？」

からかうように冗談染みた態度をする武。

「しかし！・・・いやそうだな、そなたの言う通りだ。」

気を遣わせていることに思い至った冥夜は心の中で感謝する。

「だが、これだけは言わせてくれ。あの時そなたを愛していると言ったのは誠だ。」

例えそなたが鑑を愛していようと、私はそなたを愛し続ける。そしてもう二度と、そなたにあのような形で引き金を引かせはせん。

「

「冥夜・・・」

「今は返事はよい。ただ、其れだけはきちんと伝えたかったのだ。無論副司令の話も承知しておる上でな。」

「あつ、いやその話なんだが・・・」

夕呼にありとあらゆる方法で押しきられたのだろう、無理がある話に流石に一言告げようとする武ではあったが、それより先に冥夜が続ける。

「今更そなたが居ない生活など想像もつかぬ。其れほどそなたを愛しているのだ。」

そうして伝えたいことは伝え、訓練に遅れるからと言って冥夜は笑顔で去っていった。残された武は何も言えず、ただ呆然と立ち尽く

すのみであつた。

冥夜に告白され混乱していた武ではあつたが、ピアティフ中尉に夕呼から呼ばれていることを聞くと、急いで向かうのだった。

「先生、何の用ですか？」

「いらつしゃい、白銀。悪いんだけど、ちょっと肩揉んでくれない？」

そこに居たのは机に張り付いてだらしない夕呼であつた。これに予想外な武はずっこけてしまう。

「先生、何してるんですか？」

「いやーね、暇なのよ。〇〇ユニットに関してはやろうと思えばすぐ出来るけど、今すぐは不味いでしょう？ODLの浄化をどうにかする方法は一応出来ただけど・・・」

「本当ですか！？なら、どうしてやらな・・・いや、何か不味いこ

とがあるんですか？」

一時は舞い上がった武だが、夕呼の含みがある言い方に気づき冷静になった。

これが今までなら気づくことすら出来なかったのだから、大きな進歩だと言えるだろう。そんな武を見て夕呼も不敵に笑う。

「フフン、あれからあの機体を調べただけど、その中に巧妙に隠されていたのよ、ODL浄化の解決策が。それにね、あの機体に搭載されているのは00ユニット並みの並列処理が可能なCPUよ。これで全ての問題は解決ってわけ。」

告げられたのは驚きの事実。昨日あれだけ調べたはずなのに、そんな情報なんて欠片も見つけられなかったのだ。

「あんたが見つけられないのは無理ないわ。あれはあたしにしか分からない仕掛けになってたからね。問題は調律よ。」

「調律ですか？でも、その点ならオレは問題ないですよ。」

確かに調律は大変であったが、過去に実際しているのだ。それが問題になるとは思えない。

「確かに調律自体は問題無いわ。けど、今すぐとなるとあんたは動けなくなる。戦力を整える為には、あんたが実際にX M 3を見せな

「けやならないし、教えないといけないでしょ？」

これを聞き武はなるほど納得する。根本的な三次元機動は元の世界でゲームの経験がある武にしか理解出来てない。

A - 01 隊（伊隅戦乙女隊）達もある程度まで理解することが出来れば、あとは自分達で慣熟させられる。

それに今回は A - 01 隊だけじゃなく、斯衛や帝国軍にも教えなければならぬ。一刻も早く戦力を増強しなければならない状況で、時間的に調律しながらというのは無理だろう。

「分かりました、先生。けど、X M 3 を搭載するにしても戦術機自体の強化はどうするんですか？」

X M 3 に変われば確かに従来よりも性能を引き出すことは出来る。けれども、それには所詮限界がある。

更なる向上のためには X M 3 を踏まえての新しい戦術機が必要になる。

「それに関しては問題無いわよ。桜花作戦の後に採用された戦術機のデータをちよつと弄ってから作ったから。」

付け加えるなら白銀の機体も参考にさせてもらったわよ。中には既存の戦術機の改良型のもあったから、それも実行させてるわ。」

という訳で、やることをやり終えた夕呼は暇なのだった。数日の内にやり終えたその能力には引きつった笑いを浮かべるしかない武だった。

「白銀、明日殿下との謁見予定だからね。・・・そうだわ、將軍専用機があるんだから、まりもの専用機を作ってみましょうかしら。」
いいことを思いついたらしい夕呼は早速PCに向かって何やら考え始めた。邪魔するのも気が引けるので早々に部屋を出ていくことにしたのだった。

夕呼の部屋を後にした武は、当初考えていたように純夏の所へ足を運んでいた。

「純夏・・・」

青く輝く脳が入ったシリンドーを見る。初めて見た時は不気味に感じたのだが、今ではこれが純夏のものと分かると、どうしても愛しく感じてしまう。

「理由は分からないけど、オレはまたこの世界に来ちまったよ。お

前は怒るか、こんなオレを？だけど、今度こそは必ずお前やみんなを護ってみせるからな、純夏。だから、もう少しだけ待っていてくれよな。お前のこと殺しちゃうけど、それでもオレはお前と一緒に居たいんだ。例えどんな形をしようとな・・・」

白銀武と鑑純夏は二人で一人。お互いがお互いに半身であり、片方でも欠けたらいけない存在なのだ。

シリンダーに触れ、身を寄せるようにして少しでも気持ちが伝わるようにするのだった。

とりあえず今日やることを終え、武は自室でこれからすべき行動を考えていた。

（今までは全部タ呼先生に頼りきりだったから、これくらいは自分でも考えないとな）

そうして考えついたことを一つ一つノートに纏めていく。

（まずは帝国との関係の強化。これは殿下との繋がりを持って、そこから広げていくべきだろうな。X M 3をネタにするのも良いし、なんなら合同での新型開発もありだな。最終的には、なんとかクーデターを起こさず日本を一つにまとめあげたいな。その場合憂いは

完全に取り除かないと、また別の形で何かが起こされるんだろうな）
前回の世界では天元山の救出作戦がきっかけで、米国の暗躍もあり
沙霧尚哉大尉を中心としたクーデターが発生。

クーデターが鎮圧された結果、傀儡となっていた政威大將軍殿下煌
武院夕陽が国政の実権を握ることに成功し、国内の親米派を排除す
ることができた。

だが、武としてはBETAと戦っている時に内紛を起こすなんてふ
ざけていると言えないのが本音だ。とはいえ、前回のループを
経て、彼らの気持ちは分からなくともない。BETAが進攻してく
ることはなかったものの、それはあくまで結果論に過ぎない。

（これも明日殿下と相談すべきだろうな。下手に国連軍が動けば、
沙霧大尉達を刺激することになる。今の状況でそれは避けたい。）

個人的な感情を除けば、沙霧大尉は非常に優秀な衛士だ。そんな彼
を失うようなことは避けなければならない。と、そこまで考えて一
度ペンを置く。

（もし戦うことになって、今のオレに沙霧大尉を止めることが出来
るのか？）

そう考えてしまうのだった。米国最新鋭のラプターを不知火で倒し
たあの腕前。武自身当時より操縦技能は上達しているはずだが、不
安に思うのも無理はない。

（いやいや、今はそんなことよりもやらないといけない事が沢山あるんだ。いざという時の覚悟だけ決めておけばいい。）

頭を振りかぶり、思考を別の事柄に向ける。

（次は米国だな。クーデターとも関わりが出てくるけど、要は凄乃皇を手に入れるのが大事なんだ。その為にも副次的な成果であるX M3の価値を引き上げないとな）

凄乃皇・・・XG-70と呼ばれる戦略航空機動要塞。ムアコック・レヒテ型抗重力機関（ML機関）を搭載した決戦兵器。ラザフォード場で光線級のレーザーを無効にすることも可能。

一見強力な兵器に見えるが、重力制御の関係でコックピットに人が搭乗することが不可能となり、また米国がG弾を開発したためお蔵入りされていた。

（こればかりは夕呼先生と鎧依課長に聞いてみないとな。とすると、オレが今すべきなのは必然的に日本国内となる。）

そう結論付けて一息入れようとする。普段は余り考えないことに頭を使ったことで、武の脳はオーバーヒート気味になっていた。こんなことをずっと続けてきた夕呼が、いかに大変だったのかがよく分かる。

コンコン

休んでいるとノック音が聞こえた。ドアを開くと、そこに居たのは霞だった。

「白銀さん、博士がシミュレーター室に呼んでいます。強化装備に着替えてくるように、だそうです。」

「ありがとうな、霞。よし、行くか。」

霞を伴いシミュレーター室に向かうのだった。

シミュレーター室にて待っていたのは、夕呼と強化装備姿のまりもだった。

（まりもちゃんの強化装備姿ってクーデターの時以来だな・・・相変わらずスタイル良いし）

と、大人なまりもに目を奪われているとすぐ横にいた霞に服を引っ張られる。

「・・・白銀さん、不潔です。神宮司さんばかり見たらダメです。」

「んがっ！いやな、霞・・・」

「へへえ、白銀はまりも見とれてたんだ。よかつたわね、まりも。あんたのその格好で興奮したらしいわよ。今日これからイクところまでいっちゃんいなさいよ。」

「ちょ、ちよつと夕呼！イクところまでつて・・・それに白銀も！」

ニヤニヤとする夕呼に、若干顔を赤くするまりも。このままでは流されてしまふと感じた武は本題に入る。

「それで夕呼先生、一体何の用ですか？」

「何よ、もう少しからかわせなさいよ」

「夕呼？」

最近の研究に充てる時間が減ってきたので、まりもがからかわれる場面が増えてきた。

少しばかりは自重して欲しいと思う二人は間違っていないだろう。

「はいはい、白銀はシミュレーターに入ってなさい。軽く模擬戦をしてもらってから。」

「いいですけど、相手はまりもちゃんですか？」

「そうね・・・まずはまりもしてもらいましょうか。」

「はあ、分かったわよ。」

諦めたように用意するまりも。二人が準備を終えると夕呼から通信が入る。

『それじゃあ二人とも本気でやりなさいよ。』

かくして時空を越えての恩師との対決が始まったのだった。

二人が熱戦を繰り広げる中、シミュレーター室に入ってきた一団があった。オルタネイティヴ？の直属部隊A-01のメンバーであった。

「副司令、召集に応じA-01隊全員集合いたしました。」

隊長である伊隅みちるが代表して夕呼に挨拶をする。

「ちょうどいい時に来たわね。あんたたちも見ておきなさい。」

「ハッ。」

そうしてモニターに映し出されている映像へと目を向ける。そこには今まで見たことないような機動をする二体の吹雪が戦闘を行っていた。

「なっ！？なんであんな動きが出来るのよ！？」

速瀬水月中尉が信じれないような声をあげる。

「副司令、あの衛士は誰なんですか？」

皆が驚く中、管制担当の涼宮遥中尉は興味半分で聞いてみる。

「一人は勿論まりもよ。」

「やはり教官ですか・・・」

「ですが、私達が教えを受けた時はあのような動きをなさってませんでしたよ？」

宗像美冴中尉、風間禰子少尉がそれぞれ思うことを口にする。

「あの二体の吹雪には新概念のOSを積んであるの。機体の即応性がざっと30%上がってるわ。」

「・・・ほぼ別物の機体というわけ・・・ですか。」

「有り体に言えば伊隅の言う通りよ。でも、この新OS名称XM3の目玉はそこじゃないの。」

と、そこで一機の吹雪が撃破された。しかしながら、もう片方の吹雪も中破判定をくらっており、あやうく大破だったことからもぎりぎりの戦いであったことを証明している。

「神宮司機大破。状況終了です。お二方ともお疲れさまでした。」

「まりもは降りてきて、白銀はまだ乗ってなさい。」

管制の報告にA-01部隊のメンバーは、おかしい機動を見たときよりも驚いていた。まりもの強さは身に染みて知っており、今でも彼女には敵わないであろうことを理解している。そんな尊敬すべき教官が負けるなんて、一体どんな手品を使ったというのだろうか？

「お疲れ、まりも。どうだったかしら？」

「そうね・・・やっぱりまだXM3を理解しきれていないんでしょね。白銀の機動には模擬戦中も驚かされたわ。」

苦笑いでそう答えるまりも。そこには負けて悔しいというのもあるようだ、なにより子供の成長を実感出来たのが嬉しいという複雑な気持ちだった。例えるなら教官としては喜ぶべきことで、衛士としては悔やむべきといったところか。

「白銀、続けて単機でハイヴ突入やつてくれない？」

『ちよつ！流石に単機では無理ですよ！！』

「いいからさつさとやんなさい。白銀のことはほつといて始めて頂戴。」

夕呼の指示により再び始まるシミュレーター。そこでまたA - 01部隊は驚愕することになった。

従来のハイヴ攻略は地下茎のBETAを殲滅しながら進むものであった。だが、今行われているシミュレーターでは、吹雪が壁等を利用しBETAを避けながら進んでいる。銃弾もそのほとんどを足場確保に使うだけであった。

支援レベルが低い状態での最高難易度の結果は、中層を突破するに留まったが、単機でA - 01部隊の最高記録を塗り替えてしまったのだった。

「……………」

哑然として声も出ないA - 01部隊の隊員達。そこに夕呼からの捕捉説明が入る。

「今までなら着地した瞬間自動制御シーケンスが存在していて、機体が硬直していたわ。だけど、このX M 3ではそれを衛士が任意でキャンセルすることが出来るようになり、一連の動作をスムーズに行えるようになった。」

あと、コンボと呼ばれる一連の動作の簡略化も可能よ。これは個人に合わせて使用頻度の高いパターンを簡単に使えるように出来る。加えて、データリンクを用いることで即部隊の練度をあげることが出来る画期的なOSよ。」

おおっ、という声上がる。あれだけのものを見せられたら衛士としては納得しない訳にはいかないだろう。

（これではとは白銀の機動を模倣しつつ、伊隅達が自分のものに出来たらね・・・）

と、そこまで考えているとシミュレーターから降りてきた武が近くまで来た。

（伊隅大尉・・・速瀬中尉・・・涼宮中尉・・・皆生きてる）

先程からの会話で居るのは分かっていたが、こうして改めて見ると涙が溢れてきそうだった。けれども、必死に堪えようとする。

「こいつがX M 3の発案者の白銀よ。これから顔合わせる機会があ

るだろうから覚えときなさい。」

「・・・白銀武大尉です。これから何度が皆さんの教導をすることがあると思いますが、よろしくお願いいたします。」

やはりというか皆一様に驚いていた。歴戦の戦士であろう人が下手したら自分よりも年下なのだ。それでも、先に実力を見せたのがよかったのだろう。武の指導を受けるのに反抗的な態度を示す者はいなかった。

・・・約一名程は獲物を狙う目つきをしていたが。

「白銀は明日の用意をしてきなさい。霞も連れて行ってね。」

はい、と返事し今にも眠りそうな霞をおんぶして部屋へと戻る武。出ていくのを見計らって再び夕呼が口を開く。

「伊隅はあとで白銀の操縦記録を取りに来なさい。明日からの訓練で、さっき見た白銀の機動をものにする。ずっとではないけど、教官にはまりもをつけるわ。」

これにはA・01のメンバーが喜んだ。何故なら彼女らはまりもの教え子であり、A・01にとって母のような存在なのだ。

「ちょっと、副司令！私聞いてませんよ！それに訓練生のこともあります。」

「だから今言ったじゃない。それにいずれはあんたも戦線に復帰してもらうんだから、今の内に勘を取り戻しておきなさい。はい、解散」

呆れたまりも見送る中、言うだけ言って夕呼は部屋を出ていったのだった。

Episode?

ゆさゆさ・・・ゆさゆさ

「・・・白銀さん、朝です。」

「・・・ん・・・ああ、霞おはよう。」

「おはようございます。」

以前の世界でも霞に起こされたように、今日もいつも通り起床ラッパ五分前の朝を迎えた。

霞を部屋の外で待たせて、その間に武は身支度を整えた。それから二人で朝食を摂るためにPXへと向かうのだった。

ちょうど冥夜達と時間がかぶったようなので、一緒に朝食を食べる事になった。

「それで今日オレは帝都に行くことになってる。お前らは今何してんだ？」

「我らは主に基礎体力作りだな。座学等は既に知識としてある故復習みたいなものだが、体力に限ってはそうゆう訳にはいかんからな。日々精進あるのみだ。」

「今焦っても仕方ないとはいえ、やっぱり歯痒いわね。」

「・・・それには同感。」

「はうあう、でもでももう少ししたら私達の戦術機も来るみたいですから、それまでは頑張ります。」

「ボク達は総合戦闘技術評価演習を実質一回パスしてるもんだしね」
「」

致し方ないとはいえ、衛士は体を張るものだ。例外的に鍛え上げた肉体を受け継いでいる武とは違い、冥夜達はまだ未熟な状態だ。彼女達もそれを理解しているがため、今の状況に甘んじている。

とはいっても、おそらく一週間もしたら戦術機が届くだろうからそれまでの辛抱だ。ちなみに総合戦闘技術評価演習は、夕呼の独断とまりもの判断（半ば強制されて）により必要無しとされたのだった。無論書類上は行ったものとされる。

「・・・白銀さん。」

「ん・・・どうした、霞？」

冥夜達と話していると横に座っていた霞から声をかけられた。

「・・・どうぞ。」

ピシッ！

その瞬間、本来なら聞こえないはずの音が武には聞こえていた。そして、何やら不穏な空気が漂っていた。

（こ・・・これは！）

「タケル・・・そなた、もしや既に社に手を出したのか・・・？」

「白銀・・・あんたってやっぱりそんな趣味があつたの・・・？」

「・・・変態。」

「はわわ、たけるさんが霞ちゃんと・・・！」

「タケルうゝいくらなんでもそれは犯罪だよ」

一部例外のような台詞もあるが、それとは裏腹に武を見る目は本気

なものだった。霞は霞で、今にも泣きそうな表情をしており、食べてくれと言わんばかりだった。その異様な雰囲気に関わり、いた他の人達はびびって後ずさっていったのだった。そんな雰囲気を変えたのは、京塚のおばちゃんの一言だった。

「情けないね、それなら皆でタケルにしたらどうだい？」

その一言を皮切りに武は、皆からの圧力を受けながら食べさせられたのだった。

「作戦成功です。（ぴーす）」

「はうあうあ。霞、お願いだから霞だけは純粋なまままでいてくれ」

時は過ぎ、武は帝都へと向かう車の中であつた。出発前に交わされた夕呼との会話が思い出される。

『あつ、白銀。これ持っていきなさい。』

『何ですか、これ？』

『フッフ、中身は秘密よ。必ず殿下に渡すこと。いいわね?』

と、嫌な予感がしまくりな武であったが、中身を確かめる訳にもいかず帝都までの道のりを生きた心地がしない状態で過ごすのだった。

そんな状態でようやく辿り着いた武は、流石に不憫に思ったのだから月詠に心配されながらも悠陽との謁見をしていた。

「・・・・・・・・。」

「まあ!そうですか・・・」

「ふむ、なかなか興味深いですな・・・」

武が手渡した資料を読みながら悠陽と帝国陸軍のトップである紅蓮大將は、最初は険しい表情だったが今では何やら不吉な笑みを浮かべていた。

(白銀、あれは一体何なのだ?)

(分かりませんよ、夕呼先生が用意したものですし・・・とりあえず録なものではないと思います。)

(むう・・・)

この場には事情を知っている者だけが居り、誰も武と月詠の態度を咎めることはなかった。というより、四人の他に人が居ないのだ。

生きた心地がしない武は、その時を怯えながら待っていた。

「お待たせ致しました、武様。それでは今後の対策についての話し合いを始めたいと思います。」

悠陽の台詞の中で一つ気になったことがあったので、不躰ながらも訊ねた。

「殿下、どうして武様なのでしょう？」

そう・・・「武様」なのだ。これにはさしもの月詠も驚いていたのだ。

「いやですわ武様。将来夫となるのですから、そう呼びするのは当たり前でしょう。武様も是非悠陽と呼び下さい。」

あっさりとそんなことを言い出したのだった。

「な・・・何でいきなりそんな話になってるんですか!？」

「無論幼き頃にわたくしと武様が将来の契りを交わしたからですわ。」

「ちょっと待ってください。その記憶って・・・」

「恐らく武様のご想像通り、BETAの居らぬ世界のことかと思われます。とはいえ、あまり鮮明ではないのですが・・・」

詳細を聞いてさらに驚く。確かに幾多の記憶にはそのようなものもあるが、何故悠陽にその記憶があるのだろうか？結局答えは出ないままである。

それから呼び方を巡って議論が交わされたが、結局武様は変わらず、二人の時だけ悠陽と呼ぶことになった。

「では、取り直して・・・」

表情が一転、先程の悪巧みを考えているような顔から將軍としてのものへ変わったのだった。武も自分の役目を果たすべく気を引き締める。

「まずはX M 3の導入についてですが、これは私自らが教導をするべく一時的に国連軍から出向という形でよいと思います。」

それとX M 3の導入につきまして、横浜基地と帝国での共同開発をしたいと思います。これにより、国内の横浜基地に対するイメージアップを計ります。

最後に大事なのは殿下の復権についてでしょう。殿下が復権なさって冥夜のことを正式に縁者だと公表すれば、国連軍に護衛という名目で斯衛を派遣させることが出来ます。同時にクーデターを未然に防ぐことが出来、帝都守備隊の戦力も落とさずに済みます。」

「先の二つについては手を回しておきましょう。」

「むう・・・話には聞いておったが、やはり突拍子もないものじゃない。」

渋い顔をする紅蓮大将に悠陽が困ったように笑いかける。

「それが当たり前なのでしょう。他の世界の記憶を持つ等と、実際に記憶があるわたくしでさえ未だに信じられないのですから。」

「いえ、殿下の御言葉を疑っておる訳では御座いませぬ。」

「よい。それよりも復権の件に関しては目処が立っております。冥夜のことも大丈夫でしょう。問題はクーデターですね。」

「はっ。現在城内省を搜索しておりますが、やはり何人かが米国と通じているようです。ですが、中には家族を引き換えに強制されている者も居るようです。」

「そのような者達は可能な限り救出してあげてください。彼らも我が臣下なのですから。」

「勿論で御座います。問題は帝都守備隊です。」

今現在彼らはクーデターを画策しているかもしれないし、していないかもしれない。確固たる証拠がない故に、月詠は下手な動きは取れないのだった。

「殿下、一つよろしいですか？」

「何でしょう、武様？」

「先ずは沙霧大尉と接触を計ってみてはどうでしょうか？利用するようで心苦しいですが、幸い彩峰も居ることですし接触だけなら難しいことではないはずです。・・・あいつだってクーデターは止めたいと思っていますから。」

沙霧がクーデターを画策している理由には、大陸でのBETAとの戦いの際に彼の恩師でもある慧の父親が命令違反で住民を避難させようとし、その結果国連軍の本部が壊滅、軍法会議にて死罪となつたことが原因でもある。慧の父親は尊敬の念を集めていたので、その判決に納得出来ない者達が多かった。

それが殿下を蔑ろにして意のままに国政を操っていると不満が高まり、米国の干渉もあってクーデターへと発展するのだった。

「・・・沙霧大尉なら事情を知れば、恐らく協力を惜しむことはないでしょう。鎧依課長にも動いて貰えば万全でしょうしね。」

鎧依左近、美琴の父親でもあり簡単に言えば帝国城内省で働く密偵。

「そうですね・・・ですが、彩峰中将の娘を巻き込む必要はないでしょう。左近には既に動いてもらってますし、沙霧にはわたくし自ら出向きます。」

「殿下自らですかっ!？」

「この国を背負おうというのです、これくらいの気迫は見せなければなりません。」

その後も話は続けられたのだが、一向に悠陽が折れることはなく紅蓮大將も賛同したために、その案を採用することになったのだった。

「・・・で、どうしてこうなったのでしょうか?」

「お似合いですよ、武様。」

今現在武と悠陽、月詠の三人は紅蓮大将に後を任せ、帝都守備隊の衛士が居る所へと向かっていた。

国連の制服を着ていた武であつたが、悠陽の護衛ということで斯衛の白服を着せられることになる。それで、妙にご機嫌な悠陽に諦めきつた武は渋々従つたのだった。

武達三人が帝都守備隊の衛士兵舎に姿を現すと、その場に居た彼らは驚き直ぐ様一斉に膝をついた。

「よい、今日は非公式の訪問たる故、將軍たる煌武院悠陽は此処には居らぬ。それより沙霧大尉は何処ぞ？ 噂高き彼の衛士と一度話してみたい。」

「はっ、お呼びに預り沙霧尚哉参上致しました。殿下におきましてはご尊顔を拝謁出来、この沙霧恐悦至極に御座います。」

「面を上げなさい。日夜任を全うする本土防衛軍帝都守備連隊に積もる話がある故、何処ぞ落ち着いて話せる場所へ案内してほしい。」

悠陽に頼まれ沙霧は立ち上がり、案内すべく先頭を切る。周囲の者が道を空ける中、武達についていくのだった。

（ 沙霧・・・！ ）

後ろ姿を見ながら、武は自身の手に入力するのを止められずにいた。前回のクーデターでは、千鶴の父親である榊首相を殺害した張本人なのだ。今日の前に居る人物は違ふと分かっているけれども、やりようのない怒りが胸の内にあつた。が、それを決して表情には出さなかつたのだつた。

「それで、殿下自ら御出になつてまで私めに何の話でしょうか？」
「率直に聞きたい。そなたは今、この国をどう思っているのかを。」

単刀直入で悠陽は本題へと切り込んだ。同時に何かの資料を月詠に手渡させた。

それを見た瞬間、沙霧の表情が一変した。すぐに元通りのものへとなつたが、あからさまであつたので見逃すような真似はしない。そして、悠陽が言い逃れや誤魔化しを許さないという空気を作り出していた。

「沙霧、この者達は信頼なる者故安心してくれ。」

「はっ では、恐れながら。今の政府は殿下を蔑ろにしております

す。奴らはあるうことにも米国に尻尾を振るばかりで、帝国に害をもたらす者供です。」

「・・・そなたの言いたいことは分かる。それは一重に我が不徳の致すところ、許すがよい。」

沙霧の考えを聞いた悠陽は頭を下げた。これには沙霧の方が驚いてしまい、うろたえる。

「わたくしはこれをなんとかしようと思います。若輩の身ではありますが、そなたの力を貸してくれませんか？」

「この沙霧尚哉、命ある限り殿下に捧げる所存であります！」

「そなたに感謝を。早速ですが、そなたは誰かに謀反を持ちかけられましたか？そなたを咎めるつもりは無い故、出来れば正直に答えてほしい。」

一転して悠陽は口調を変え、問い詰めるように追い込む。躊躇いを見せる沙霧。そうしてようやく口を開く。

「はい、殿下の仰る通りに御座います。」

「・・・そなたの国を想う気持ちは伝わりました。けれど、今しばらく堪え忍んで欲しい。」

と、ここで月詠が悠陽に許可を貰って発言する。

「現在殿下は御自身の復権に向けて行動をなさっている。だが、米国からの干渉があるためそう上手くはいかない。そして、大尉達の中にも米国の手が及んでいる。」

それを聞いた沙霧は憤慨して、反論を行う。

「我らにそのような輩はおらん！皆、日本のために」

「だけど、事実です。」

武が口を挟んだ。沙霧は武を睨むが、気にすることなく話を続ける。

「大尉がどう思おうと米国がクーデターを利用して、極東での立場を取り戻そうとしているのは明らかなんだ。そんな奴らがいる限り、殿下が復権することはない。」

それにもし大尉達がクーデターを起こしたとしても、その後どうするつもりだったんだ？逆賊だと言って血を流し、自分達はお膳立てして全てを殿下に押しつけるのか？そんなことを殿下が望むと思うか！？

衛士は力無き者達の為にあるんだろう。衛士の本分はBETAから民を護ることであって、国家に弓引くのは違うだろう。それに大尉達が計画していたことは、また民を苦しめるに他ならないと思う。

・・・大陸で彩峰中将がしたのは軍人としては誉められた行為じゃないが、それが分かっているとおかつ全ての責を負った。大尉はそれを誇りに思い、受け継がないといけない。それに大尉達がしようとしていたのは、彩峰中将の言いたかった事とは違うんじゃないか！？」

「落ち着け、白銀。」

言いたいことは概ね合ってるけど、今までの「シロガネタケル」達の想いがあってどうしても支離滅裂になってしまう。

オルタナティブ？が失敗すれば、そこに待ってるのは確実な敗北。一部の特権階級の者のみが逃げることとなる。

熱くなった武を月詠が諫める。冷静さを取り戻した武は、一言謝りを入れて続ける。

「未熟なオレが他人のことは言えないけど、大尉は感情に引きずられ過ぎて物事に対する視野が狭まっていると思う。大尉は自分の尺度でしか物事を見てないから、それに情報が無いから自分達の都合が良いようにしか捉えられないんだ。でも、これは仕方が無いことだとは思うよ。軍つてのはそんなところだからな。」
『need to know』

それに米国にしたって全部が大尉の思っているようなやつらばかりじゃなく、純粹に祖国を想って戦う人もいる。けれど、中にはG弾を落とす奴だつて居る。今の帝国の政府にしろ同じだよ。

大尉、この国を変えたいのならもつと違うやり方があるはずだ。少なくともオレはそう信じてる。だから、あなたの力を貸して欲しい。

「

「沙霧、そなたが言うことも正しいのかもしれませんが。けれど、白銀が言うこともまた正しいと思うのです。」

それでも、わたくしはこの国の臣下の血が流れるのを望みません。もう一度聞きますが、どうかそなたの力を貸してくださいませんか？」

（我らは外道を進むと決めてきた。其れが殿下の御心を傷つけようとも・・・しかし、この男が言うこともまた国を、殿下を想つてのことなのか。私は・・・）

「人は国のためにできることを成すべきである。そして国は・・・人のためにできることを成すべきである」

かつての恩師の教えをポツリと沙霧は呟いた。目を伏せ数秒、次に開いた時には瞳に強い力を秘めていた。

結果は沙霧の協力を得ることが出来た。クーデターに賛同する振りをしていた連中を片っ端から排除するのに力を貸してくれたのだった。

そこからはあっさりと物事が進んでいき、国内に潜む不安分子を一掃する手筈が整っていった。

クーデターを企んでいた沙霧は処分を望んだが、悠陽は「そなたのより一層の献身を期待する。また、この国からBETAを追いついてすらいけないのに、罪を受けようなどと、この悠陽決して赦しはせぬ。」と言い渡し、罰を与えることはしなかった。代わりにBETAとの戦いの先鋒を務めることを伝えたのだった。

「それで夕呼先生。あの資料は一体何だったんですか？」

横浜基地へと戻ってきた武は、聞きたいことを夕呼に訊ねるのであった。あの後悠陽に訊こうとしていたのだが忘れてたのだ。

「あゝ、あれね。帝国に入り込んでた鼠の名前と顔の一覧表よ。」
あっさりと夕呼はそう答えたのだった。

「って、先生いつ調べてたんですか!？」

「そりゃあ結構前からよ。脅・・・何かの交渉に使えると思ってね。それに前の世界で覚えてたのもあったし、あたしからしたら結構分かりやすい奴もいたからね。」

連中馬鹿みたいにあたしのことを邪魔しようとしたりするんのよ？
『私は米国と繋がってます』って公言してるようなもんよ。

ま、純粹に国を想っていてなおかつあたしが許せない奴もいたんだけど、そいつらとはまた違うからね。」

ニヤニヤと笑う夕呼のそれを聞いて呆れてしまった武だった。もしかしたらこの人は前の世界でも最初から分かってて、全てを隠していたのかもしれない。結局この人はどこまでいっても夕呼先生なんだと思い知らされた。

Episode?

国内に潜む反乱分子を一掃出来る手筈が整い、帝国はその実権を將軍である悠陽の下に戻そうというところまでできていた。後は時期を見計らい実際に行動を起こすだけである。

これまでのスムーズな動きは、情報省の鎧依課長と夕呼の働きがあればこそであった。総力を上げての搜索で面白いほど間者が芋づる式にどんどん見つかった。いった。

だが、事情を知る一部の者達は夕呼の行動に疑念を抱いていた。夕呼は「極東の魔女」や「横浜の女狐」と呼ばれ、国内における評判はすこぶる悪いと言っても過言ではないだろう。

將軍である悠陽は、御前での謁見で今回の働きに応じ褒美をとらせようとした。その場にいた官僚どもはまた何か企んでいるのかと冷たい視線を向けていたが、夕呼はそんな連中の度肝を抜いた。

「そうですね・・・特には何もありません。」

これを聞いた者達は我が耳を疑ったそうだ。まさかあの「極東の魔女」が何の見返りもなく協力したのか、と。しかし、それで終わらないのが夕呼だ。

「ですが、強いて挙げるとするなら・・・」

自分で持ち上げておいて落としかかった。周りの連中は、そら来

たとばかりに夕呼を注視する。

「横浜基地で開発された新OS、XM3の導入を考慮して戴くのと、共同での新兵器開発・・・といったところでしょうか。」

我が物顔をする夕呼に、魂を抜かれてしまったようにぼかんとする官僚達。この提案には悠陽に是非も無く許可を下すのだった。

謁見を終えて狐に包まれたかのような表情で出ていく官僚達を見て、夕呼は笑いを必死に堪えていた。が、それも残ったのが事情を知る者達だけになると、遂に爆発してしまう。

「見た？白銀。あいつらのあの驚いた顔！おかしくて涙が出てくるわ〜」

この場に居る者も大半が夕呼程ではないにしろ笑いを堪えていたのだ。今では悠陽は上品に手で口を隠して、紅蓮大將は豪快に笑っていた。

そんな中で、若干おいてけぼりにされているのが武と月詠であり、お互いに視線をかわしつつ止められないのが分かっているので、放置していたのだった。

幾分か落ち着いてきたところで、肝心の本題に入る。

「それでX M 3の導入についてなのですが、やはり斯衛から進めるべきではないかと。恐らく白銀の三次元機動の概念さえ伝えることが出来れば、紅蓮大将も居られることですし何とでもなりましょう。さらに今現在、横浜基地では専属部隊に慣熟をさせております。彼女達がある程度まで扱えるようになれば、各地の帝国軍にも教導という形で派遣したいと考えております。」

いつになく真面目な表情で話を進める夕呼。悠陽や紅蓮大将も異論はないのだろう黙ってしきりに頷いていた。

「それでX M 3の導入と同時に、横浜基地で帝国と共同で不知火の改造と新兵器の開発も行いたいと思います。」

第三世代型国産戦術機不知火。高性能ではあるが、余りに性能を重視し切り詰めたために拡張性が無く、現場における改善の声に答えられないのが現実であった。

「ゴホン！それにつきましては、帝国陸軍技術廠の巖谷中佐にお願いしております。また、実際に見てみたいとのことで、この後実機での演習を予定しております。」

紅蓮がそう付け加える。それを聞き、大物が出てきたので夕呼と月詠は驚く。巖谷中佐といえば、伝説的なテストパイロットとして名高く、国産戦術機開発の礎を築いた人物である。

一方の武はそんなことを知る由もないので、二人の反応からして凄
い人なんだなぐらいの認識であった。

その後は詳しい内容を詰めていき、解散となった。

悠陽との謁見を終え、武と夕呼、紅蓮大將は演習場へと向かった。

途中で武は強化装備に着替え、試作段階の不知火改に搭乗して模擬
戦の開始を待っていた。

プロトタイプ
不知火改

XM3運用を前提として不知火を発展させた戦術機。各パーツには、
武が受け取った白銀の機体から得られたものと、夕呼が覚えてた桜
花作戦後に開発された戦術機のデータも組み込んである。

即応性が上がるということで、高機動を重視した設計となっている。
試作品ではあるが、肩部と脚部に新機軸の推進装置を。機体にかか
るダメージを減らすべく関節面の強化が施されている。

武は待っている間暇なので、もう一度機体の確認を行う。一つ一つ
確認をしながら、相手は誰なんだろうと予想をする。

そんな風にリラックス出来ていたのも、相手が紅蓮大將ではないこ

とが分かっていたためだ。流石に世界でも最強と名高い紅蓮大将には勝てる気がしないのだった。

（やっぱり巖谷中佐って人なのか・・・？）

話にも出てた名前を思い浮かべる。所属が技術廠っていうから衛士じゃないかもしれないと考える。

（ま・・・誰が相手でもしつかりと不知火改とXM3を認めさせる戦いをするだけだ！）

こんなことを考えてるなんて自分らしくないと気持ちを引き締める。

『ホワイトフング01、エリアル01両機の配置完了。只今よりJIVESでの演習を行います。カウントダウン10・・・9・・・』

『

CPからの通信を聞き、ようやく始まると戦闘モードに移行する。
ちなみにエリアル01は武である。（仮）

（ホワイトフング01か・・・どんな奴なんだろな）

カウントダウンが進む度に気持ちが昂ってくる。操縦桿を握る手に汗をかいてくる。

『・・・1・・・0！演習開始！』

カウントが0を刻むと同時に武は不知火改を素早く駆る。今回は光線級が居ない戦場なので、余り気を使わないで済む。

（さて・・・どこに居るのやら？）

そんなことを考えながらゆっくりと進めようしていたのだが、急に警戒音が鳴り響く。

（うそおっ！）

後方の曲がり角に反応。出てきたのは山吹の武御雷。こちらを向くと、すかさず武御雷が突撃砲でペイント弾をばらまいてくる。

X M 3 のこともあつてなんとか避けることが出来、一度ビルの陰に隠れる。すると、銃弾がばらまかれるのが止まった。

いつまで経っても変化が無いのを不思議に思つて、少しだけ武御雷を確認したところ先程の場所で長刀を構えていた。

（斯衛なら真つ向勝負だ！って言いそうだからな。それにいい機会だ、X M 3 の力を見せるにはもってこいだな！）

近接最強との呼び声高い武御雷。それを敢えて近接で下すことによつて、X M 3 の有用性を示す。そう決めた武はこちらも長刀を構え

て躍り出る。

着地の硬直を無くした機動で攪乱しつつ、武御雷に迫る。そして、間合いに入ろうかというところで更に変化をつけた。

相手が振りかぶろうとした瞬間、上空に飛び上がる。背後をとり、これで決めようとしたところで武御雷も反転。

はたまた衛士の腕が良いのかギリギリのタイミングで神速の如き短刀の抜刀をみせる。

（やべっ・・・！）

そう思った瞬間には武はキャンセルを入力していた。あはや相打ちかと思われた交錯は、不知火が再び飛び上がることで回避された。

そして空中で逆噴射を行い反転しつつ、急降下して幹竹割りを武御雷に。攻撃を振り切った武御雷がそれをかわせるはずもなく、この模擬戦は武の勝ちで幕を閉じた。

（ふう、ヤバかった・・・旧OSであんなに早いなんて・・・）

最後の最後にヒヤッとした武であった。

模擬戦を終え、武御雷の衛士は先程の不知火の動きについて考える。

（まさかあのタイミングで上に跳ぶとは想像もつかなかったな。着地の硬直時間がほぼ無いことといい、あれが新OSの力なのかあるいはあの衛士の力なのか・・・どちらにせよ素晴らしいものだった。）

先程の模擬戦をそう評価し、一刻も早く不知火の衛士の顔を見たいと急いで向かうのであった。

「で、不知火改はどうだったの、白銀？」

「良い感じだと思います。XM3との相性もいいんで、あとは機体の耐久度と関節面をどうにかすべきでしょうね。」

武御雷の衛士より早く戻ってきた武は、不知火改の様子を夕呼と話し合っていた。機体の順応性自体は良好で、あとは帰ってからばらして損耗度を調べてからの問題だ。

と、話していると紅蓮がやって来た。あと二人ほどその後を着いてきた。

「巖谷中佐、これが例の白銀だ。」

「ハッ、国連軍白銀武大尉です。」

「帝国陸軍技術廠の巖谷榮二中佐だ。それでこつちが・・・」

顔に大きな傷をつけた強面の男が答える。

「帝国斯衛軍、篁唯依中尉です。」

武と同じ年くらいだろう、長い黒髪の女性。強化装備であることから彼女が武御雷の衛士だろう。

「白銀よ、先程の模擬戦見事であった。」

「そうだな、まさか唯依ちゃんが負けるとは思わなかったぞ。」

「ゆ、唯依ちゃんはおやめ下さい中佐！」

「ふはははは、気にするな唯依ちゃんよ。見たところ年も変わらんようだし、仲良くすべきだろう。」

武は笑う巖谷を見て、自分の考えがはずれたのが分かった。
霞が見ただけで怯えてしまいそんな面構えをしていることもあり、

それがあんなに笑うのは予想外であつた。

だが、武は別の意味で既視感を覚えていた。それも嫌々感じのする方のだ。

（まさか・・・たまパパ二号なのか！？）

以前のループで壬姫の父親、国連事務次官が基地の視察に来たことがあつた。その際、武に対して「孫の顔が見たい」等と言われてしまい、冥夜達から制裁を受けたのだ。

巖谷中佐にもそんなフラグがピンピン立っているように感じられ、武は戦々恐々としていたのであつた。

「巖谷よ、そろそろ本題に入らねば白銀が呆れてしまうぞ。」

「おお、すまんな白銀君。では、早速本題に入るとしようか。実際に戦つて唯依ちゃんはどうだった？」

「機体の硬直時間の無さ、それに最後の反応の速さ。白銀大尉の腕もさることながら、新OSも見事であつたと思います。」

「唯依ちゃんのお墨付きも貰えたことだ。こちらとしても是非不知火の改良に協力させてもらおう。というよりは、本来なら此方がそちらに協力をお願いすべきなのだろうが。」

「こちらとしても帝国の力が強くになるにこしたことはありません。以前提供した電磁投射砲を含めての共同開発、宜しく願います。」

それを聞いて一安心した。武も敬礼して礼を述べ、いつ孫フラグを立てられるかという恐怖から解放されたかに見えた。しかし、フラグの神様というのは余程武を好いているらしかった。

「話が纏まったところで白銀君よ、是非唯依ちゃんを嫁に貰ってくれんかね？見た目良し、料理も上手で良いとは思わんか？」

「何でいきなりそうなるんだーっ!？」

気づいた時には既にツッコんでいたのだった。案の定唯依はびっくりしていたが、巖谷は笑って続ける。

「今の帝国には君のように才能溢れる若者は、なかなかおらんからな。加えて容姿も整っておる。どうだ、唯依ちゃん？」

「お、叔父様！私はまだ結婚する気などありません！」

「いかんぞ、唯依ちゃん。俺は早く孫の顔が見たいんでな、ほら名前だつてこの通り考えてたんだぞ？」

懐から取り出したメモ帳にはびっしりと名前の候補が書き連ねられていた。慌てて奪おうとする唯依。それを見て笑う紅蓮大将。混沌とした空気となっていたのだった。

そしてここにも一人、そんな面白いことを見逃さない人物が居た。

「白銀く良かったじゃない、またあんたのハーレムが一人増えたわね。でも気をつけなさいよ」流石にあれもこれもじゃ、その内背中から刺されるわよ？」

「先生っ！オレは別にハーレムなんか作ろうという気は無いんですよ！？」

「今さら何言ってるのよ。あんたは恋愛原子核なんだから諦めなさい。あ、ついでにまりものこともよろしくね。あの子このままじゃ結婚出来ないんだから。」

止めを刺された武は、膝を抱えて地面に「の」の字を書いて落ち込む。

「違うんだ・・・オレは別にハーレムを作りたいんじゃないやい・・・」

その様子を見て流石に不憫に思った唯依であった。けれども、先程とは違って変わって武本来の性格が見られたようなので、興味を若干惹かれることとなるのだった。そして、そのことに気づかないまま今日の別れを迎えた。

「想像以上のものだったな。白銀君の腕もだが、XM3というのは・・・」

「そうですね・・・何故今までOSの改良に目を向けなかったのか不思議に思うほどです。」

模擬戦を終え、唯依と巖谷はシュミレーターではあるが実際にXM3の効果を体験した。最初は動かしにくかったものの、少し慣れればそれも感じなくなった。一度あれを体験してしまえば、もう既存のOSでは満足できないだろう。そう、唯依は感じていた。

「白銀武という男・・・あのような若者が国連軍とはいえ日本に居ると思うと、帝国の未来もまだまだ捨てたものではないな・・・」

巖谷自身、今の上層部が国産戦術機にしがみついていることに対して思うことがあった。

外国製のパーツを使えば、より性能を向上させることが可能となり、微々たるものだろうがBETAとの戦いで戦死者は減るだろう。

そんな中、白銀武という男が現れた。既に今までのOSの概念をぶち壊したこともあり、先の見えなかったBETAとの戦いに光が差し込んできたように感じられたのだった。

一方の唯依は最初国連ということもあり、余り武に良い印象を持っていなかった。それは夕呼の悪名を知っているので、致し方無いことではある。

が、唯依は決して横浜基地を米国同様に嫌っている訳ではない。確かに夕呼がやり過ぎな所もあるけれど、それは一重に人類を想ってのことだと理解できるためだ。そこまで形振り構わずやらなければBETAには勝てない、そう確信があつたのだった。

「しかし、あの三次元機動・・・光線級が居るのにどうして思いついたのでしょ？」

XM3の説明を受けた際、この三次元機動を生かすために作られたOSだと聞かされた。シュミレーターとはいえ、目の前で実際にレーザーをかわしたのにはびっくりした。

唯依の疑問はもつともなことである。実戦を経験した衛士なら、誰もが正確無比なレーザーを放つ光線級の恐ろしさを知っているのだ。そんな中、空を舞うなどと正気か？と問いたくなる。

「なんだ・・・やっぱり唯依ちゃんは白銀君に興味があるのかね？」

「ち、違います！あくまで衛士としての興味です！」

それに顔を真っ赤にして唯依は怒るが、どこ吹く風とばかりに、わははと笑う巖谷。

ひとしきり笑い、唯依がこれ以上拗ねてはいけないので、巖谷はここから真面目な表情をする。

「篁中尉。」

「ハッ！」

「貴様には国連軍横浜基地との共同開発に帝国軍として出向してもらつ。詳細は後日伝える。」

「篁中尉、国連軍との共同開発任務承りました。」

「ついでに結婚まで話を決めてこい！」

「お、叔父様！」

「・・・最後にそう付け足すのを忘れなかったのだった。」

E p i s o d e ?

巖谷や唯依の協力を得られることとなった武は、一先ず斯衛軍にX M 3を紹介するべく訪れていた。

初めは国連軍ということで敵意をもって見られていたが、紅蓮大将が武を絶賛すると武を見つめる目が興味を含んだものへと変わった。

自分達が尊敬する紅蓮大将が認めた男なのだ。心の内にはまだ納得し切れない者達も居たのかもしれないが、あからさまに態度で示す者はいなくなった。

そんな連中も武自身の腕前を披露したら、心象が変わったことだろう。奇抜な動きで斯衛を軒並み倒していくのを見せられれば、誰だって納得せざるを得なかった。

加えて、武自身の友好的な悪く言えば馴れ馴れしい性格もプラス面に働いた。お堅いことで有名な斯衛だが、武の人となりを知ることですぐ積極的にコミュニケーションを計ろうとした。

結果、X M 3は斯衛に好印象で受け入れられた。初めは旧O Sとの違いに苦労していたみたいだが、流石は斯衛というところか。直ぐ様X M 3の特性に対応してゆき、自分のものとしていったのだった。

こうして、斯衛軍への出向は大成功で幕を閉じたのだった。

時を同じくする頃

悠陽が將軍への復権を内外に公式な形で発表を行った。新しいOSSの開発や帝国と国連軍横浜基地での共同開発を公表し、国内における国連軍への嫌悪の感情を軽減しようとする。

未だに反米感情と同じような扱いが強いが、それでも改善の兆しは見られ出したのだった。

斯衛での教導をなんとか終えて、武と月詠は横浜基地に戻ろうと帰り支度をしていた時だった。

「白銀大尉。少し良いか・・・？」

そこに居たのは沙霧大尉だった。まさかあちらから声をかけられるとは思ってなかった武は困惑する。が、落ち着いて月詠に目配せをする。

「分かった、車の用意をしておこう・・・あまり遅くなるなよ。」

そう言つて、月詠は離れていった。武は軽く頭を下げ、沙霧と向き合う。

「・・・国連軍の所属だったのだな。てっきり斯衛とばかり思っていた。」

「あの時は、まあ事情がありまして。本来は国連軍です。それで・・・お話とは何でしょうか？」

「人は国のためにできることを成すべきである。そして国は人のためにできることを成すべきである。」

君はこの言葉を知っていたのか？」

口にされたのは慧の父親の教え。悠陽と一緒に来た時にそれらしいことをほのめかしたから、沙霧は気になっていたらしい。

「ええ。彩峰から教わりましたよ。教えてくれた彼女もまた、この言葉を胸に頑張っています。」

「そうか・・・元気でやっているのか・・・」

それきり沙霧は声を出さない。両手を組んで額を押し付ける。再び顔を上げたのはしばらくしてからだった。

「白銀大尉は、あの言葉をどついう風に捉えているのだ？」

沙霧の問いかけに武は難しい表情をして答える。

「どう、って言われても言葉にしにくいのですが、オレ自身は個人が役割になる事を為し遂げていくことだと思います。」

「む・・・それだと国の件はくだりどうなるのだ？」

武が言ったのはあくまで人として出来ることであり、そこには国としての事が入ってなかった。

「国は政府とかじゃなくって、なんていうか・・・一人一人の国を想う魂を指していると思うんです。日本人が殿下を慕う気持ちみたいなものですかね。だからといって、殿下を神聖視して国と同じように視てる訳じゃないんですけど。」

個人が成す事は人として出来る事であり、また時としては国として出来る事にもなる。例になるか分からないんですけど、BETAを駆逐するのは個人が国に出来る事なのは当たり前ですね。防がないと国の滅亡が待っているんですから。

同時にBETAと戦うことは、国が個人の為に出来る事でもあるはずなんです。戦う力を持たない人を護るという形で、です。まあ、これは極論ですけどね。」

立場や視点が異なれば、それは変わってくる。政治家にだってそう。かつての沙霧は日本人であること、さらには殿下が神聖なもの

であるという考えに引き摺られ過ぎていた。その結果、クーデターに行き着いたのだった。

「オレは大した学もない若造ですから、そんな意見もあるって聞いていると聞いてください。」

「・・・いや、礼を言わせてくれ白銀大尉。君のお陰で私も成長出来たように思う。」

沙霧は武に対して頭を下げた。説教染みたことをしてこそばゆく思っていた武だったが、沙霧からは真つ当なものを感じたしまったので礼をきちんと受け取った。

「ところで・・・慧と君はどんな間柄なんだ？」

しばらく沈黙が続いたが、沙霧が口を開いた。それは沙霧の本心から零れ出たものだった。恐らく本当はこれが聞きたかったのだろう。

沙霧は手紙を幾通か送ってはいるけれど慧からの返事はなく、どのような環境に居るのが分からなかったためだ。

「オレは背中を預け合う大切な仲間だと思っています。 あいつも・・・きつとそう思ってくれていると、個人的には考えているんですけどね。」

彼女達を護りたい。それが、武が戦う一番の動機となっている。だけど、慧に限らず他の皆も護られているだけではない。彼女達自身もまた何かを護りたいと思い、衛士になろうとしているのだ。だからこそ、武は沙霧にそう言ったのだった。

「慧は良き仲間と巡り会えたのだな。」

武の心情を読み取った沙霧は感慨深そうに呟く。そこにあるのは寂しさだったと武は思う。

「顔を突き合わせる度に喧嘩する相手が居ますけどね。戦闘の事となると息がぴったり合うのに、どうしてああ毎日同じことを繰り返せるのか不思議なくらいですよ。」

苦笑混じりに伝える武。それからも基地での日常を面白可笑しく話していった。沙霧も武に倣い笑顔で聞いていたのだった。

暫くそうしていると真那が車を回してきた。帰るぞ、と呼ばれた武は車へと歩を進めるのだが、途中で沙霧に呼び止められる。

「すまないが、これを慧に渡して欲しい。」

差し出しだされたのは一通の手紙。

「あいつなら後悔の綴られた手紙なんか要らないって言いますよ？」
前回のループを思いだし、武はそう応える。すると沙霧も苦笑いを浮かべる。

「・・・慧は返事を一度たりとも返してこないから、そうなのだろうな。」

苦笑いでそう言って懷に仕舞いこんだのだった。

話を終え、武は真那とともに横浜基地に戻ろうとしている。

「X M 3の教導は上手くいきましたね。」

「そうだな・・・あれだけの性能^{もの}を見せつけられたのだ。導入に反対する方が稀だろう。それに殿下を御守りするため、斯衛は新しい力を得て更なる技術の飛躍を目指し励むことだろう。無論、私もだ
がな。」

嬉しそうな微笑みを僅かばかりにみせる。こちらの世界に来てからはあまり見られることが無かったが、元の世界のような表情が幾らか見られるようになった。それだけ信頼してくれていると思うと嬉しくなる。

（やっぱり月詠さんは月詠さんだな・・・）

斯衛らの本分は守護。そこに賭ける信条の姿、彼らが斯衛たる強さを垣間見た気がしたのだった。

それからも教導についての話し合いを続け、一段落したところでふと気になっていたことを武は訊ねる。

「そういえば月詠さん。この世界のオレって、なんで城内省のデーターベースに記録があったんですか？」

記憶にあるいずれの世界でもそのようなことは全く分からなかったので、丁度いい機会だということもあり訊いてみるのだった。

「この世界の自分だから気にはなるか・・・」

少しばかり気難しい顔をして考えこむ真那。しばらくして真相が明かされることになった。

「この世界の『白銀武』は一般人だが、さる赤を賜る武家の血筋に列なる。母方がそうなのだが彼女は家を出たそうだ。それで、万が一の際養子に迎えるため密かに動向を調べていたらしい。貴様の親戚には子が居らぬから、生きていれば今頃は当主となって私と肩を並べていたのかもしれない。」

「あはは・・・赤の武家ですか。確かにそんな奴の名前の死人が出てくれば、普通怪しみますよね。」

ある程度のことは予想していたとはいえ真相を知ってしまい乾いた笑いで答える武に、全くだと真那は返すのだった。

「以上が、今回斯衛への教導に関する報告です。」

「ご苦勞様。とりあえずここまでは順調にいった、というところね。」

目を通した資料をばさりと投げつつ、夕呼は難しい顔をして考える。

「殿下が復権なさった今クーデターが起きる可能性は低くまったわ。けれど、あんたも知ってる通り未来を変えれば、その分だけ代用を寄越してくることもある。」

「分かってますよ。それでも、オルタネイティヴ？のため帝国が揺るがないようにこうするしかないでしょう。」

意地の悪い言い方で揺さぶりをかけようとしたが、あっさりと武は返した。武がやったのは全て覚悟の上で決めたことだ。

「あんたのことだから犠牲がどうか言いそうだったんだけどね。」

「確かに犠牲は少ない方が良いですよ。けど、オレは傍に居る皆を優先しますよ。全部を護れる訳じゃない、それは良く解っているつもりです。」

苦しそうな表情で言葉を口にする武を見て、ゆっくり夕呼はこれ以上は必要無いと判断。

「そ・・・ならあたしから言うことは無いわ。あんたの思うようにやんなさい。」

数々の記憶を受け継いでいる今の武は、恐らく相応の地獄と欲にまみれた人間の裏を見てきたことだろう。それでも尚、未来を見据えて前に進める姿が少しだけ羨ましくもあり、頼もしく見える。

（ま・・・そんなことを口にしたら白銀が増長してしまうから言わないんだけどね。）

そんなことを考え、まだまだ青臭いけれども立派になりつつある目の前のパートナーを見据える。

「ところで先生。米国の方はどうなったんですか？肝心のXG-70の引き渡しは上手くいきそうですか？」

予断は許さないが、国内のことはこれでなんとかなるだろう。それも一重に將軍たる悠陽が復権し軍事的、政治的にも有能なついているためだ。問題は横槍を入れていた米国に移る。

「今回のことで米国の内政干渉が明らかになり、さらにCIAの関与の証拠も大統領に送りつけてやったわ。CIAの上層部はG弾信者ばかりだから、今までやりにくかったのよ。大統領つたら慌てふためいていたわよ。ム力つく奴だけなんだかん дайって大統領は政治家としては有能だから、今回のことはCIAの独断みたいなものでしょ。」

「ま、今回の件でそれも大分マシになるでしょうし、近々XG-70と一緒にYF-23ブラックウイドウ？一機も搬入される予定よ。流石にラプター一個中隊は無理だったけど。」

「YF-23ブラックウイドウ？ 世界一高価な鉄屑と呼ばれ、まず間違いなく世界最強の戦術機。米国の戦術ドクトリンに合わないがために採用されなかった。」

「充分だといえる戦果に武は驚いていたが、目の前の人物に色々とやられたであろう大統領にある意味同情するのだった。」

「それはすごいですね・・・あのYF-23ですか。実物が来たら速瀬中尉あたりがうるさいでしょうね。」

「血気盛んな突撃前衛の姿を思い起こし、ひきつった笑いを浮かべる。恐らく自分を乗せる、乗せるとうるさく喰いかかってくることだろう。」

「あんたにはあれがあるから良いでしょう。速瀬に任せようかと思

ってるんだけど、どうかしら？」

「中尉なら問題無いと思いますよ。」

これに関してはその通りだと思う。彼女の腕なら任せられると信じてる。中隊長のみちるでもいいかもしれないが、水月が突撃前衛長であり真っ先に敵に食らいつく役である以上、高性能な機体であることが望ましい。

「それにしてもあんたの機体にも早く名前つけないとね。今はまだ流石に使う時に制限つけさせてもらうけど、実戦で使っておきたいでしょう？」

あれには今の技術では到底不可能な代物があるので、光学兵器といったような物はオリジナルハイヴまで使うなということだ。それに万が一、対策を取られてしまえば人類はさらなる劣勢に立たされるだろう。

「そうですね……飛鳥あすかつてのはどうですか？」

「あんたがいいならそれでいいでしょう。念のために言っとくけど、壊さないでよ。」

最後の部分のところだけ脅され、おのきながらも肯定した武だった。

「話はこれでおしまいね。さ、行くわよ。」

「行くってどこにですか？」

戸惑う武に先を進もうとしていた夕呼が振り返って真剣な表情でこう言った。

「鑑純夏を起こしによ・・・」

夕呼の執務室を出た二人は今、純夏の体となる00ユニットの素体が置かれてある部屋に来ていた。

「始めるわよ。」

夕呼の言葉をきっかけに装置が作動し始める。その様子を元々部屋に居た霞と一緒に眺める。

（純夏・・・）

そんな武の様子を心配した霞がそつと手を添えてきた。自分でも顔が強張っているのに気いていたが、霞のおかげでそれも和らいだ。

（ありがとうな、霞・・・）

彼女の心遣いに感謝し、その小さな手を優しく握って作業を見つめるのだった。

程なくして、純夏の人格を移す作業が終わる。

「これで終わりよ・・・」

その言葉を聞いた武は純夏の傍まで歩み寄る。虚ろな表情をしてこちらを向いているのか、向いていないのかよく分からない状態である。そんな彼女に武は気持ちを込めて声をかける。

「純夏・・・」

「・・・やる・・・」

「ほら、お前が会いたがっていたタケルちゃんだぞ？」

「・・・殺してやる・・・」

「こっちを向けよ。ほら、目の前に居るオレが分からないのか？」

「BETA殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる・・・！！」

見たことがあるとはいえ純夏の錯乱した姿に、武は彼女の体を抱きしめてなんとか目の前の「タケルちゃん」を分かせようとする。

「純夏・・・！」

抱きしめた瞬間、二人の周りに光が出現した。

（えっ・・・！）

「パラボジトロニウム光！？どうして・・・！？」

そんな驚愕を露にする夕呼の声を最後に武の意識は途切れた。

夢を・・・夢を見ている。それは、平和で、安らかで、大切な物。当たり前のように仲間が周りに居て、当たり前のように隣の幼馴染みと馬鹿をやって、そして・・・当たり前のように生きている。

（ああ・・・そうか。そうなんだ・・・『オレ』はあの世界に戻れたんだ・・・）

そこは・・・仲間が理不尽に命を落とすことの無い世界。そこは・・・恩師が自分を殺してまで研究を続けなくていい世界。そこは・・・皆が笑ってられる世界。

（ありがとう・・・）

届くとは思えないけれど、そう言わなければいけないと思った。彼女が・・・自分が望んだ世界で、望んだように生きている姿を見るとそうしなければならぬと・・・

（だから、ありがとう・・・全てに・・・ありがとう）

「・・・ちゃん・・・」

段々とあの世界から遠のいてゆく。懐かしい・・・望んだ・・・平和な世界が。

「・・・ルちゃん・・・」

（さようなら・・・『みんな』・・・）

「タケルちゃん！」

振り替えばそこに居たのは幼馴染み。

「・・・行こうよ、タケルちゃん!!」

「ああ、そうだな・・・純夏。一緒に行こうぜ・・・」

そして、二人で光を目指して歩き始めた・・・

パラボジトロニウム光が急に現れてから約一、二秒。光は薄れゆくように消えていった。その中心に居た二人の男女。

「純夏・・・おかえり。」

「・・・ただいま、タケルちゃん。」

しっかりと抱き合い、お互いがお互いを二度と離さないように・・・

「純夏さん・・・」

「また会えたね、霞ちゃん。」

純夏から発せられた言葉に、霞は涙を浮かべて抱きついてきた。そんな霞をあやすように受け止める純夏。霞が落ち着くの見計らった頃に夕呼が傍に寄ってきた。

「鑑、あんたは前の世界の？」

「そうだと思います。この世界の私と融合して、曖昧なんですけどね。」

「ってことは、ハイヴのマップとかのデータもあるのね？」

そわそわした態度で訊ねる夕呼。労せずして純夏が人格を取り戻せたことといい、もしかしてと思ったのだ。

「うん・・・はい、送りました！」

「よくやったわ！鑑も大丈夫そうだし、あんたたち今日はもういいわよ。明日からは手伝ってもらうからね！」

そう言つて夕呼は飛び出していった。

「相変わらずだなあ、先生も」

「タケルちゃん。」

笑っていた武に対して、名前を呼ぶ純夏。目線を合わせて、唇を重ね合う。

「それじゃ、皆に会いに行こうぜ。純夏、霞。」

「ぷしゅ」

「す、純夏」

幸せそうな顔をして気絶、もとい自閉モードに入ってしまったのだ。そこで霞と協力して、反応炉を介さない浄化装置に純夏を寝

かせた。霞はここにいるというので、武は一人で皆の元へと向かうのだった。

PXにて207B分隊は207A分隊とともに訓練後の自由時間を過ごしていた。

「それにしてもさ・・・」

「どうしたの、茜？」

「最近千鶴達って変わったよね？もしかして新しい訓練カリキュラムのお陰？」

はあっ、と溜め息をつきながらA分隊分隊長の涼宮茜が話しかける。以前からB分隊は飛び抜けていたが、個々に色々と問題がありチームとしてはあまりよろしくなかった。が、最近になつて急にそれらも改善されたく、もはや同じ訓練生達には見えないのだった。

「新しいカリキュラムっていったって、一応は訓練過程なんだしそこまで変わったことやってるわけじゃないんだけどね。」

ここで言われてる新しいカリキュラムとは、記憶を所持している彼

女らに今更の訓練、特に机上関連は必要無いがための措置である。
この時、特別教官とされているのが武だったりする。

「すまぬな、これも軍規故そなたらに話すことは出来ぬのだ。許す
が良い。」

「まあ、それなら仕方ないよね。」

軽いノリで返すのが柏木晴子。

「んののっ！あ、あだしは茜ちゃんど一緒ならなんだって・・・」

「ちょっと多恵！」

そう言ってさりげなく茜にくつつこうとしているのが築地多恵。

「相変わらずだなあ多恵は。」

「自重しようよ、多恵ちゃん・・・」

そんないつもの様子を呆れたように見る麻倉真依、高原美咲。

そんな様子を程度差はあれ懐かしむように見ていた207Bメンバ
ーだった。一度は失ってしまった光景に想いを馳せる。

（タケルもこのような気持ちであったのだろうか・・・）

「おーい、みんな」

感傷に浸る冥夜は背後からの耳馴れた声を捉える。
すると先程までの表情が一変して、穏やかなものとなっていた。

（全く、そなたという男は・・・どうしてこうも見計らったタイミングで出てくるのだ）

「あつ、タケルうゝおかえり。」

「おかえりなさい、たけるさん。」

真っ先に気づいた美琴と壬姫が武に声をかけた。

「予定より遅かったじゃない。何かあったの？」

「ああ、それはだな・・・」

「白銀・・・今度は誰とよろしくやってたの？」

予定では昨日の内に帰ってきていたので、疑問に思った千鶴が訊ねる。武もそれに答えようとしていたのだが、その矢先に慧が茶々を入れる。後日武が言うには、その言葉を聞いた途端に周りの気温が下がったらしい。プラスして戦場に立つよりも怖かったそうだとも・

「何言つてんだよ、彩峰。そんな訳あるかつ！」

「そ、そうよ、彩峰！いくらなんでも・・・」

「だって白銀だよ・・・？ポツ。」

「擬音を口にするなっ！」

（いや・・・まさかタケルがそのような破廉恥なことを・・・しかし、姉上なら možい・・・）

悩む冥夜を除いた四人が絶対零度の視線を浴びせる。

（くっ、これは何とかしないと・・・ッ！そうだ！）

打開策を見つけようと必死に考える武の視界の端に207A分隊が目丸くしているのが入った。あの柏木でさえからかおうとせずにいたのだ、余程驚いているらしい。

「207A分隊の皆とは初対面だったな。オレは白銀武、階級は大尉だ。時と場合を考えてくれりゃあ、こいつらみたいに接してほしい。呼び方は白銀でもタケルでもどっちでも呼んでくれ。」

「で、ですが・・・」

茜が困惑したように返答しようとする。当たり前といえば当たり前なのだが。

「あはは、面白い人だね、気に入ったよ。柏木晴子だよ、よろしくね白銀君。」

「あたしは築地多恵です。あ、ああ茜ちゃんはわださないっぺ。」

「麻倉真依よ。よろしくね、白銀君。」

「高原美咲です。こちらこそよろしくね。」

と、残りのメンバーは晴子につられて早速順応していった。晴子の性格はある程度分かってたため、直ぐ様ノってくれるだろうという考えが的中した。

「茜、白銀のことだからその内呼び方まで指定されるわよ。私なんか委員長だしね・・・」

と、珍しく千鶴からの援護射撃が入った。援護射撃を行った本人は呆れていたのだが、葛藤していた茜だったが、千鶴からの言葉もあったという訳で・・・

「涼宮茜よ、よろしく白銀。」

「ああ、よろしくな皆。」

とりあえず武は茜達との距離を縮めようという第一段階をクリアし

たのだった。それから武も交えての会話を続け、少しずつ打ち解けていった。

PXを後にした武は、ヴァルキリーズが訓練しているであろうシミュレーター室に足を運んだ。

『宗像、風間、それに美南！貴様らはもっと動かないかっ！狙撃したら直ぐ様移動だ！』

（おっ、やってるやってる。しかし、まりもちゃん気合い入ってんなあ）

まりもも同じようにシミュレーターに入ってるらしく、中から怒声が聞こえてくる。鬼教官の面目躍如といったところか。

「あつ、白銀大尉。お疲れ様です。」

「涼宮中尉、みんなの調子はどうですか？」

「教官にしごかれて頑張ってますよ。なんだかんだいって嬉しそうです。」

にこやかな笑顔で返される。画面にはひーひー言いながら操縦して

いるのが映っているが、どこを見ても嬉しそうには見えないのは突っ込んではいけない。

「大尉から見えてどうですか？」

「そうですね・・・まだ甘いところもありますがX M 3を使いこなせつつありますね。流石はヴァルキリーズといったところでしょいか。」

今までは訓練を見る機会が無かったけれども、どうやらまりもに相当しこかれたらしく、キャンセルとかも扱えているようだ。それからは訓練を見守る傍ら、今まで行ってきた内容を遥に聞いたりしていた。

（まりもちゃん・・・いくらなんでもやりすぎでしょうよ）

流石に内容を聞かされた時は同情せざるをえなかった。

訓練も終了したことでシミュレーターから降りて話しているみちるとまりもに近づいていく。

「お疲れ様です、伊隅大尉、神宮司軍曹。」

「白銀大尉か・・・全くとんでもない物を作ってくれたな。」

口元を微かに歪ませ、みちるはそう返してくる。

「気に入っていただけたようでなによりです。」

そうこうしている内に残りのヴァルキリーズが降りてきた。その内の一人に視線が向かうと、衝撃が走ったのだった。

（くそっ！これはこの世界の記憶なのか・・・？）

「・・・武君？」

その人はこちらを捉えると、幽霊でも見たように凍りついた。一方の武も関連付けの痛みに耐えて、記憶をまさぐる。

「・・・久しぶり、知代姉さん。」

「武君っ！！」

武が名前を呼ぶと一目散に駆け寄ってきて抱きついてきた。周りの皆は何が何だか分からずに呆然として武と知代を見つめていた。

美南知代、この世界での武と純夏が幼い頃お世話になった人物である。この世界の「白銀武」を知っており、今此処に居る「白銀武」とはあくまで別人なので、武としては悲しいといえは悲しい。

「あー、知代？悪いんだがとりあえず後にしてくれないか？」

「ご、ごめんなさい、みちる。つい・・・」

慌てて離れる知代。いつもならからかってきそうな美冴も、この時ばかりは大人しくしていた。知代が切り替え終わると、武が進み出て話し始める。

「改めて白銀武大尉です。ここでは堅っ苦しい言葉遣いは不要と聞いてますので、よろしく願います。」

以前の時は慌ただしかったこともあり、もう一度自己紹介をしておいた。その際、堅っ苦しい言葉遣いは無用というあたりで水月と美冴の目がきらりと光ったのは見間違いだと思いたい。

「白銀、これからはお前が教導を受け持つのか？」

「そうですね、神宮司軍曹もお忙しいことですし、そうなると思います。」

「というわけだ。各自は発案者に聞きたいことを明日までに考えてくるように。それと、宗像。今日は駄目だぞ。」

みちるの言葉にちっ、と舌打ちする美冴。間違いなくからかいたかったのだろっが、みちるのおかげで助かった武だった。が、

「面白い話は明日でも出来るだろう？それでは解散！」

やはりというか、この手の話は娯楽となりうるので逃れることは出来ないのだった。

次々とヴァルキリーズが部屋を出ていく中、みちるはそつと今は唯一人となってしまう同期の仲間に想いを馳せる。

元々知代は別の中隊だったが、明星作戦にて所属中隊が壊滅。リハビリを経て最近みちるの中隊に入った。これまで二人でお互いを支え合いつつ過ごしてきたのだが、この頃みちるは彼女の精神が限界を迎えているように感じられていた。

（一体どういった関係なのかは分かんが、これで知代にとって良い方向に向いてくれればな。）

部屋から彼女らが出ていき、二人だけとなり向かい合う武と知代。

「本当に武君なのよね？ちゃんと生きてるよね？」

「酷いなあ、知代姉さん。オレが死んでいるように見える？」

少しばかりおどけた言い方をする武に対し、困ったように嬉しそうに笑う知代が、小さく馬鹿と呟く。

そして、データベース上では死んでいることになっていたのは何故かと凄惨な剣幕で問い詰められたが、特殊任務だからということ詮無きを得た。ヴァルキリーズ自体も特殊な隊なので、こういったこ

とは徹底してあるのだ。

それからはもう夜も遅い、明日も訓練だということで知代を部屋まで送るのだった。

「それじゃ知代姉さん、また明日。」

「うん、武君もまた明日ね。」

遠ざかってゆく武の背中を目で追いながら、知代は物思いに耽る。

（武君が生きててくれて良かった。もう私は失いたくないよ、武君・
・だから私はもっと強くならなきゃっ！）

これからも生き残ることを、武を護ることを心に定めるのであった。

Episode ?

ゆさゆさ・・・ゆさゆさ・・・

「タケルちゃん、朝だよ早く起きてよ」

「うう・・・霞あと五分・・・」

武が寝言混じりに呟くと、起こそうとして揺らしていた手が止まった。これを機に武はごろんと体勢を変え、再び眠りにつこうとする。その傍らでぶるぶると震えるアンテナに黄色のリボン。そしてガシツと布団を掴んだ。

「この・・・起きろー!!」

「どわあああっ!!」

雄叫びとともに力を込めて一気に布団を捲り上げた。

「ったく・・・もう少し優しく起こせよな。」

「だってだってタケルちゃんが起きないんだもん。」

起こされた際に打ってしまった頭を撫でつつ、武は隣を歩く幼馴染みに文句を言うが、その彼女は頬を膨らませてぶんすか怒っていた。

「ほら、タケルちゃん急がないと冥夜達が待ってるよ。」

と急かされ、二人PXに向かうのだった。どうやら朝起こしに来る時に出会ったらしく、一緒に朝食を食べようと約束してたらしい。その時に色々あって、お互い恋敵かつお仲間だと認め合って名前で呼ぶことにしたらしい。

純夏自身やっぱり武を独り占めしたいという気持ちがあるが、今まで自分のせいで武を苦しめてきたという自責の念がある。さらに武が冥夜達と愛し合ったのを覚えていることもあり、武が彼女らを下に扱えないのも解っているつもりなので、半ば独占は諦めかけていたりする。

（タケルちゃんは優しいから・・・）

「どうした、純夏？」

「な、なんでもないよ!」

「????」

慌てて顔を真っ赤にして反らす。怪訝に思う武はやっぱり鈍感なのであろう。

そうしてPXで冥夜達と朝食を食べるのだった。その際、純夏があ

くんをし出したのを切っ掛けに次々と冥夜達もあくを所望した。美少女に囲まれて食事をする武を目の敵にする者達の視線に耐え、生きた心地がしない武であった。後にこのことが夕呼に知られて、からかわれるのは当たり前だと言えよう。

天国で地獄のような朝食を終えた武は訓練に向かう冥夜達、夕呼の手伝いに向かう純夏と別れて一人90番ハンガーへとやって来ていた。

飛鳥のコックピットに座り、機体に慣れるべく搭載されていたシミユレーターを行うのだった。

（うーん、基本的には戦術機みたいに動かすけど、やっぱり所々違うな）

網膜投影ではなく、スクリーンに写し出される光景を見て武は思う。

大きく違う点で、飛鳥には機体制御のサポートとしてリンクシステムが搭載されていることがある。これは機体と搭乗者を同調させることで、より高度で複雑な機体制御を行うのであり、搭乗者自身の技能も活かせる。戦術機には間接思考制御が搭載されてはいるが、飛鳥のものと比べれば雲泥の差があると武は感じた。

（なんとかこれを戦術機に応用出来ないか？そうすれば冥夜の剣術

や彩峰の体術がさらに活かせるんだけどなあ・・・」

確かにX M 3によつて機体の自由度は増したが、これほどではないと武は感じている。技術的なことは分からないので夕呼や霞、純夏に相談してみようということで、機体の電源を落とすのであった。

結果から言つと武の案は既に作成の途にあつた。X M 3の更なる改良として強化装備とともに活用する方法が純夏によつて確立されつつあつたのだつた。

シミュレーターではあるが、飛鳥の慣熟訓練を終えて武は整備班長との会話をしていた。

「しかし、この飛鳥つて機体は良く分かんよ。」

「そうなんですか？」

二人で肩を並べて飛鳥を眺めつつ、調べて判明したことを話していたのだ。

「まず内部機構からして戦術機とは異なる。普通戦術機は外骨格だが、こいつはより人体を模してあるのか内骨格だ。そこからして既存の物とは違うんだが、装甲の材質は全くの未知の素材で極めつけは動力炉だな。はつきり言つて全く分からんし、どうして馬鹿げたようなパワーを出せるのか不思議だ。」

中身、特に動力炉に関してはブラックボックスになっているらしく

血眼になって調べたらしいのだが、その全てが徒労に終わったそう
だ。

「とはいっても、戦術機用の新しい動力源や推進装置、電磁投射砲、
高周波を用いた長刀の耐久性の向上とやらなきやならんが多いもん
だから、諦めるしかないんだよな。」

はあっ、とため息をつく班長。目の前に未知の技術があるならどう
しても解明したいのは、職人の性なのだろう。そんな様子に苦笑い
しつつ、武はハンガーを後にするのだった。

その後も色々と装備群について話し合っていたが班長も忙しそうに
動き始めたので、武はハンガーから撤退して夕呼の執務室へと足を
運ぶ。シミュレーターではあるが実際に各種装備を使ってみて、そ
れを改修機に反映させるのに報告をするためだ。

「失礼します、夕呼先生。」

一言断りを入れてから入室すると、そこには以前の時と同様に真那
が居たのだった。

「・・・お邪魔でしたら出直しますが？」

「いいわよ、別に。あんたにも関係のある話なんだしね。」

「そうだな、白銀にも是非意見を聞きたい。」

難しい顔をして話し合っていた二人を見て、武は間が悪かったかなと出直そうとしたのだが、案外二人の方から呼び止められた。

「それで、話つてのは何なんですか？」

「横浜基地で開発することになったでしょ？そこで帝国からの要望が届いたんだけどね。」

「帝国陸軍としては不知火の改良も大切ではあるが、未だに主力機である撃震の強化も要望としてあるのだ。斯衛からも瑞鶴に代わる戦術機が欲しいとのことだ。未だに斯衛の主力が第一世代では心許ないからな。」

成る程と武は思う。恐らく今年の末に佐渡島ハイヴの攻略を行う為に少しでも戦力を上げたいのだろう。不知火が配備されるようになって随分経つとはいえ、未だに帝国陸軍の主力は撃震であり、XM3によって底上げが可能とはいえ、だ。

（そういえばオレは武御雷の部隊しか見たこと無いけど、斯衛の主力は瑞鶴なんだよな。）

「やっぱり斯衛に不知火は配備出来ないんですかね？」

「難しいだろうな・・・斯衛には斯衛の、という専用機思想があるからな。」

「まったく頭ばかり堅くて嫌になるわね。ま、事情はそんなだからあたしとしても悩んでいたのよ。」

手をひらひらさせて付け加えられた。真那も表情には出さないが、夕呼の言葉に内心では頭を抱えているのだった。

あははと乾いた笑いしか出来ずにいる武。これは何とかしなければ、と必死に頭を働かせて考えを絞り出す。

（これからの事を考えると斯衛の主力が第一世代じゃ不味いよな。武御雷も生産出来るのは数少ないし・・・うん？瑞鶴って確か・・・

）
「月詠さん、瑞鶴って撃震がベースになってますよね？」

「ああ、そうだ。斯衛用に近接戦闘能力を強化したものだ？」

何を当たり前のことを言っているんだ、というかのような真那。

「だったら、不知火改を二パターン作ってその内一つを斯衛に配備すれば良いんじゃないですか？新しく造るとなれば時間もかかりますし、何よりパーツを一から組まなきゃならない。その点、不知火を改造するなら機体も流用出来るし、コストも多少抑えられるんじゃないですか！？」

武の言葉に驚きを露にする二人。そして、直ぐ様頭の中で考察を重

ねていく。

（理には叶ってるわね・・・コストが高い武御雷に通常の不知火よりは若干高くなるとはいえコストを安く抑えられる。問題は不知火の改造でどこまでハイ・ロー・ミックスが上手くいくかね。）

（ふむ・・・武御雷では幾らか装備に制限がつくからな。白銀の言う通りになれば、部隊運用においても問題はあるまい。）

「あの・・・お二人とも？何か不味かったんですか？」

黙ったまま考え続ける二人に居たたまれなくなつた武は我慢しきれずに声をかける。

「いいえ、白銀にしては良く出来ているわよ。誉めてあげるわ。」

「しかし、白銀にそこまでの考えがあつてこの提案が出たのかは甚だ疑問だな。」

（あれ・・・？一応誉められてるんだよな？なのに何故だろうこの気持ちは・・・）

これが武クオリティ。普段が普段だけに、今回のようなことがあつても手放しでは誉められないのであつた。武が落ち込んでいる間に夕呼と真那は方針を決めるのだった。

「それで、あんたの用事は何なの？」

とりあえずの方向性が決まったところで、まだ落ち込んだ状態の武に夕呼がさっさとしなさいと声をかけた。

「あつ、はい。いくつかお願いがあるんですけど・・・」

「聞くだけ聞いてあげるからさっさと話しなさい。」

「まず戦術機の頭部における機銃です。これが戦車級にはかなり使えます。」

現在の戦術機では何らかの拍子に腕を奪われてしまえば、その戦闘能力を失ってしまう。そこで武が目につけたのは頭部や胸部に機銃をつけることだった。これは威力はそんなに高い訳では無いので、恐らく要撃級等の中、大型種には効果無いだろうが、戦車級には通用する。さらには仲間の戦術機が戦車級に取りつかれた際に、短刀に持ち替えなくても大丈夫となる。

「月詠中尉は今の話を聞いてどう？」

「話だけでもかなり良いと思われます。加えて自機が戦車級に取りつかれた際にも使えれば、恐らく犠牲が減ることでしょう。」

武から出された案を二人が実際に使うことを想定して練り上げてゆく。

「そうね・・・機体に取りつかれた時にはJIVESのセンサーを

利用した方法で・・・それならX M 3に新しい機能を・・・よし、いけるわね。」

武と真那の話を聞き、夕呼は現在の技術と照らし合わせてゆく。

「で、他には？まだあるんでしょう？」

「飛鳥にあったリンクシステムです。X M 3によって自由度は上がりましたが、これも使うことでさらに戦力の向上が計れます。」

まだ実際に動かした訳ではないけれど、恐らくそうなるであろうという確信が武にはあった。

「それに関してはもうやっているわよ。鑑と霞にやつてもらってるのがまさにそれだしね。」

「はあ!？」

「ちょうどいいことだしあんたにも話しておきましょうか。今回あたしはX M 3をトライアルと同時に世界へと普及させるつもりよ。」

それとどう繋がりがあるんだと不思議に思う武。

「開発するにしてもお金が必要になってくるから、その分をX M 3で集める。」

「少しよろしいですか？それだと国連に入ることになり、彼の国が

横槍を入れてはきませんか？」

X M 3の開発には夕呼と武どちらが欠けていても駄目だ。その所属が国連である以上、国連で幅を利かせている米国が余計なことを突っ込んでくるだろう。

「そうね。だけど、この前殿下が宣言なさった様にあくまでX M 3の所持権は帝国にあるとする。オルタネイティヴ？の副産物でもあると付け加えるけどね。そこで白銀には出来るなら斯衛兵になっしてほしいのよ。」

話を纏めるところなる。斯衛から一時的に転属となった武が夕呼に依頼。研究にも活かせられそうだということで夕呼はこれを承認。開発は帝国主導で行われ、必要なCPUの生産も帝国が行う。

「ま、これは国連に飛鳥があるのを防ぐためでもあるんだけど。斯衛にあるのなら米国も迂闊に手は出せないでしょうしね。」

一番の理由はそうなのだが、今後のことを考えると武が斯衛に所属していた方が都合が良い。納得した真那も殿下にお伝えすると約束をしたのだった。

「話を戻すけど、X M 3を外国に配るにあたり保険をかけておきたいのよ。」

「保険・・・ですか？」

「成る程・・・そういうことですか。」

「今はまだX M 3の性能を晒していないから、ほとんど価値はないわ。けど、性能が判明すれば間違いなくどっかの馬鹿どもが盗もうとするわね。これに関しては鑑にプロテクトを頼んだから大丈夫よ。」

00ユニットのプロテクトを解除するなんて、この世界どこを探したとしても不可能だろう。

「実際に輸出する時にも内部はブラックボックスにしておくわ。出来るとは思えないけど、解析されて量産されでもしたら面倒だからね。そして、重要になってくるのがX M 3を搭載した戦術機がここを攻めてくるかもしれないということ。」

それを聞いて武は歯をくいしばる。B E T Aとの戦いに集中せねばならないのに、そういったことをする輩がいるということに腹を立ててしまう。

「だから改良したX M 3を作っておく。これには他国で量産された場合も考えてのことよ。それと万が一のことに備えて00ユニット特性のウィルスを仕込んでおくから、攻めてきた場合にも即座に鎮圧出来るようにしておく・・・この世界に絶対なんてないのだから、これぐらいは手を打っておかないとね。」

納得は出来る。しかし、どこかやりきれないものを感じつつも、そこまでの話を纏めて武は夕呼の執務室を後にするのだった。

（対戦術機戦か・・・）

武はヴァルキリーズの訓練に向かいつつ、先程の話について考えていた。

（先生は万が一って言ってたけど、多分何かが起こるのは間違いないと思ってるんだろうな）

この世界は今までの世界とは明らかに異なりすぎている。武がこの世界に現れる日にちがずれているのもそう、皆に記憶があるのもそう、そして極めつけは飛鳥の存在だろう。

（確かにここまでは順調にいつている。けれど、前の世界がそうだったように未来を変えた代用は必ずといっていいほどあるはずだ。）

ラプラスの悪魔 量子力学の理の内にある限り何者にも未来は予測出来ない はもう存在しないと夕呼はかつてそう言った。

（クーデターは將軍を蔑ろにしているって起こったんだよな。なら、今の帝国の状況下ではクーデターはまず起きない。

なら、米国が直接何かしてくる？ いや、流石に表だつてはないはず・
・待てよ、誰かを唆してそれを口実に横浜基地をどうにかするのが米国には都合が良いんだよな。）

クーデターも結局はそれを鎮圧したのが米国だという事実が欲しかったのだ。この極東の防衛線での権力の向上のために。

（だったら絶対に何かが起こるのは間違いないじゃないか！！先生もそれが分かつていて・・・）

これでBETAとの戦いに集中出来ると考えていた自分を叱咤する。こんなだからまだまだ自分はガキなのだ。だから、夕呼もそれとなくしか言わなかったのだろう。

（認めよう、『シロガネタケル』はまだまだだつて・・・だからオレは『オレ達』の邪魔をする奴らの思い通りにはさせないっ！！）

今一度自らの立脚点を振り返り、決意を新たに自分が出て来ることをしようとするのだった。

『あ～～～も～～～白銀のやつ、なんで訓練に来ないのよ～～～っ！
っ！』

変わってヴァルキリーズの訓練風景。いつも通り？の光景であった。

『おや、速瀬中尉はやはり戦闘で性的快感を得るのです「む〜な〜か〜た〜！？」　つと、心の声が・・・』

『何が心の声よ〜！！今日という今日はとっちめてやるっ！！』

『み、水月〜訓練中だから、ねっ？』

『美冴さんもほどほどになさってくださいな。』

直ぐ様抑えにかかるヴァルキリーズの良心二人。最古参のみちる、知代は頭を抱えるのだった。

『まったく・・・速瀬！貴様は後で腕立て百回だ！』

『げっ！大尉〜それは勘弁してくださいよ〜』

『ふ・・・「宗像？」いや、なんでもありません』

勝ち誇ったような美冴だったが、自身に向けられた知代の元祖黒い笑みに冷や汗をかく。

『まったく・・・』

『でも、ボクも早くその白銀っていう人に会ってみたいです！』

口を挟んできたのはヴァルキリーズ印の元気っ娘、嘉藤佐奈。最近
は別件の任務により横浜基地を離れていたのだが、今日になって帰
ってきてたのだった。水月達の同期だ。

『楽しいおしゃべりはそこまでだ。最後にもう1セットいくぞっ！
』

「結局あいつ来なかったじゃないの〜〜！！」

「速瀬中尉は『やっと来たか〜〜〜！！』最後まで言わせてほしい
のですが。」

訓練を終えて軽いブリーフィングをしようとしていたところで、部
屋に武が入ってきた。

「あれ？もしかしてもう終わりましたか？」

「もうとっくに終わったやよ！それでせっかく来たんだからあたし
と勝負しなさい！」

「というわけなんだ。すまないが、速瀬の頼みではあるが勝負して
やってくれないか？実際、私達は白銀の機動を一度しか見たことな
いからな。今一度参考にしたい。」

「そういうことでしたら・・・涼宮中尉お願いしますね。」

「分かりました。水月、頑張つてね。」

「ふっふっふっ、ついにこの時が来たわね。白銀、あんたをギヤフンと言わせてやるわよ。」

遙のセッティングのもと、武と水月の勝負が行われた。結果は武の勝利だったとさ。

「うううう次は負けないわよ！！！」

「凄い・・・あれが武君の実力・・・」

「スゴイな、あの水月が何も出来なかったよ」

「改めて見せてもらったが、やはりお前の機動概念は違いすぎるな。神宮司軍曹が言っていた通りだな。」

水月が騒ぐ傍ら、知代と佐奈は初めてみる武の戦闘に感動している。美冴と禰子は先程の戦闘を二人で分析していた。

「ところでそちらの方は・・・？」

「そういえば初めましてだね。ボクは嘉藤佐奈、階級は少尉だよ。よろしくね、白銀君。」

ここで編成について・・・A小隊はみちると知代、B小隊は水月と佐奈、C小隊が美冴と禰子。変則的ではあるが、こうなっている。

「ところで白銀。実機にはいつぐらいに乗れるようになるんだ？」

「XM3への換装、機体の改修もやってますから早くて明日、遅くても明後日には終わるって整備班から聞きましたよ。」

「そうか・・・だが、改修とは何だ？私は聞いてないぞ？」

「XM3の搭載にあたって機動の自由度が増す代わりに、機体の消耗が増えるんです。そこで、この機会に不知火自体を強化してしまおうという訳です。これが仕様書になりますから読んでみてくださいね。」

機体へのダメージを減らせるような操縦が出来れば、問題は多少緩和される。けれども今後XM3を使いこなせるようになってくると、どうしても浮き彫りになってしまう唯一の欠点だ。

実際前の世界での横浜基地防衛戦で武は不知火を機動だけで中破させている。武の技量が未熟なこともあるが、恐らく不知火では耐えきれなくなると思われている。

とりあえず資料を各自に手渡してゆく。水月以外に・・・

「あの・・・白銀？あたしの分は？」

「速瀬中尉にはこれです。」

そう手渡たされたものをぺらりとめくって読むと、水月は固まってしまった。

「み、水月？」

「どれどれ・・・」

固まってしまった水月に声をかける遙に、横からのぞきこむ美冴。目をぱちくりして確かめた後、美冴は武に向き合うのだった。

「Y F - 23 ブラックウイドウ？とは・・・これは本当のことなのか？」

「そうよ！なんでこの機体がここにあるのよ！」

「正確にはまだ搬入されていませんけど、近い内にそうなります。しばらくは速瀬中尉にも不知火に乗ってもらいますが、整備や調べ終わったら実際に使ってもらうことになると思います。一応副司令の命令ですからね？」

未だ放心してしまってる水月を側に話は進み、ヴァルキリーズの皆は解散していったのだった。

武は一人夜空に輝く月を見上げていた。

（綺麗だ・・・けどあそこにもBETAは居るんだよな）

地球を取り戻したら次は月だ。そしてゆくゆくは火星へと・・・

（月にはウサギがいる・・・なんてよく言われるけど、月を奪還したら霞を連れて皆で餅でもつくか）

そんなことを考え可笑しくて笑ってしまう。宇宙服に身を包んだ霞がうんしょ、うんしょ言いながら打っている姿を。

「タケル、そなたは何を一人で笑っているのだ？」

「冥夜か・・・いやさ、月を見ていたんだ。」

振り替えば刀を二振り携えた冥夜が、不思議そうな顔をしながら立っていた。

「？それとそなたが笑っていたのと何の関係があるのだ？」

「たいしたことじゃないんだけど、あの月を取り戻して皆と一緒に霞が餅をついているのを想像したらな。」

それを聞いた冥夜はぽかんとした顔をする。そして、実際に想像してみたのか彼女も可笑しそうに笑うのだった。

「ふふふ・・・まったくそなたの考えていることはよく分からんぞ。」

「ヒデエな・・・これでも真面目に考えてたんだぞ。」

合わせたように二人でひとしきり笑う。笑いが収まると二人は肩を並べて座るのであった。

「この星からBETAを叩きだせば、次はあの月だ。」

「そうだな・・・必ずや我らの手でこの国を・・・この星を取り戻そう。」

「ああ・・・必ず、皆で一緒にだ。」

寄り添い合う二人。そんな二人を影から見守る真那。主とその想い人を見つめる心情や如何に。彼女自身にも全ては理解出来ないだろう。だからこそ、今はただ見守るだけ。

「ところで冥夜。こんな時間に何しに来たんだ？つと、聞くまでもなかったな。」

「うん、いつもの自主訓練だ。タケル、すまぬが一つ手合わせをお

願いたい。」

冥夜は模擬刀を差し出す。武はなんで二つ持ってたのか不思議に思う。すると、それが顔に出てたのであろうか、

「いやなに、今日はタケルと会える気がしたのだ。それに私は不器用なのだ。」

と言ったのだった。それとどう関係があるのか分からないが、武も模擬刀を構えて対峙する。静かに向き合う二人を月夜が照らす。

「ゆくぞっ!!」

気合い一閃。踏み込んできた冥夜が武に襲いかかる。一閃、二閃・・
・流れるような剣撃の嵐。

（さすが冥夜！正直、今のオレでも受けるのが精一杯だぜ。）

入れ替わり立ち替わり。踊るように動く影が、交錯しては離れる。時折月の光に照らされ浮かび上がるその姿は、まさに舞踏。

（綺麗だな・・・）

立ち合いの最中だというのに、武はそう思ってしまう。動く度に揺れる髪が月光を受けて輝き、凜々しい表情も相まって辺りは暗いというのに映えている。

（ああ、そうだよ。これが冥夜なんだよ）

冥夜と悠陽。双子でありながら、忌み子として引き離されてしまった存在。その名の如く陽の光と夜の闇。だけど、武には・・・

（悠陽が太陽なら、冥夜は月。決して闇なんかじゃなくて、その中にあっても輝きは損なわれることはないんだ）

「もらったああああ！！！」

渾身の一撃が武を襲い、受け止められなかったがために模擬刀が空を舞った。

「そなた最後に手を・・・タケル、どうして泣いておるのだ？」

えっ、と思つて頬に触れるとそこは確かに涙で濡れていた。

「うわっ、ちくしょう何で涙が出てくんだよ！」

口ではそう言いつつも、心の奥底では理解していた。悲しくて嬉しいのだと。

思えば何故二度目のループで目覚めた時に、言い様の無い悲しみが胸の内にあつたのか。人類が負けたからだと思つていたが、恐らく

愛した女性を宇宙へと送り出し今生の別れを経験したからでもあったのだろう。

目の前の彼女は、シロガネタケルの尊い人。シロガネタケルの大切な仲間。そして、シロガネタケルの愛した彼女^{ひと}。

「まったく・・・男の子が人前で其様に泣くでない。」

冥夜は武を抱き寄せてその胸の内に招き入れた。

「冥夜。」

「どうした？」

「（あい）・・・やっぱ、なんでもない。」

「まったくそなたは・・・（だが、今はこれでよい。私はそなたの隣に立ってしよう。皆と共にタケルを支えてみせるぞ）」

二人を見守っていた影も立ち去り、夜空に浮かぶ月だけが彼らを見つめていたのだった。

Episode? (後書き)

一応自分として飛鳥のモデルは、某自由ではなく可能性の獣です？
(ただ遠隔操作兵器をつけようかどうか迷ってますこれにはいくつか理由があるのですが、それは追々分かるということで・・・いや、つけないなら分らないか)

今まで読んできて思ったのですが、飛鳥の性能は確実にチートの部類に入ります(おいっ)無論、性能は制限して使用しますよ？

E p i s o d e ?

ヴァルキリーズのものよりも機密レベルの高いシミュレータールームで訓練に勤しむ一団があった。

『前方の大広間に約五万規模のBETA群を確認。こちらに向かっています。』

『五万・・・なら一度凄乃皇のラザフォード場を使って指向性を高めたS-11の爆発で焼き払うわよ。そして残存BETAを殲滅し大広間を確保、終了次第補給に入る。』

霞の報告を受けた千鶴が現在の各機体の状況をチェック、即座に判断を下し行動に移らせる。

素早い判断のおかげもあり、BETAの大半を殲滅。確保した大広間で急いで補給に入る。

補給を終えると門級の開放のための機材を設置し、凄乃皇の進路を確保と同時にBETAの追撃を阻止するために脳を破壊。無事に凄乃皇を反応炉ブロック手前の横坑に進ませ、門が閉じるまでの間警戒を怠らないように指示を出す。

その内の一人である美琴が計器に注目して、表示される些細な反応を逃さまいとしていた。

『千鶴さん！来るよ！』

『珠瀬と鎧衣は出現と同時に電磁投射砲で排出されるBETAを排除。その隙に彩峰がS-11を投げ込み、御剣はそのバックアップ。無力化と同時に最大戦速で門を抜けるわよ。』

『『『了解！』』』』

行動を起こして位置につく各機。そこに轟音を響かせて壁をぶち抜いて現れたのは、まさに移動式ハイヴとでも呼ぶべき母艦級。大口径な入り口が開かれ、胎内のBETA群が這い出ようとする。

『いきます！』『このお！』

が、近場に構えていた王姫と美琴の電磁投射砲が這い出つくるのを許さない。

『彩峰！今だ！』

『いつけええええ！』

出口付近のBETAを一掃されて空白が出来たそこへ彩峰がS-11を投げ込む。戦術核にも等しいその威力が母艦級の胎内を焼き尽くす。

『全機反転！門を抜けるわよ！』

母艦級が沈黙すると五機が急いで閉まりかけている門を目指し、な

んとか無事に通過する。

『榊は一呼吸遅い……。』

『あ、あんたねえ！こんなときにまで……。！』

『そなたら……。最後まで気を抜くでないぞ？』

注意する冥夜の表情にも硬いものはなく、かといって気負いがある訳でもなかった。そうして待機していた淒乃皇と合流して、超大型反応炉、作戦呼称「あ号標的」がある反応炉ブロックへと進む。

「状々況々終了。シミュレーターから降りたら、一度休憩。三十分後にブリーフィングよ。」

全機無事に反応炉を破壊し、モニターしていた夕呼からそう告げられ、シミュレーターが止まる。

「よくやったわ。シミュレーターとはいえ初めて全機健在のままオリジナルハイクを攻略したのだから。」

一度解散して再び集まったブリーフィングルームで珍しく夕呼が言う。集まっていたのは207Bにまりも、純夏、霞、冥夜の護衛の

ために居る真那だった。

「さて見た感想はどうだったかしら、まりも？」

「・・・実際にハイヴに潜ったことがないからこういうのもなんだけど、ヴォールクとは比べものにならないわね。」

「そうね・・・ヴォールクが駄目という訳じゃないけど、実際のハイヴと比べたらBETAの数が桁違いね。佐渡島もそうだったし。」

そんなやり取りを行い、肩を落とすまりも。シミュレーターであるけれど初めて見たハイヴの実状を鑑みて、今の自分では無理だろうと思う。

「神、実際に前の世界と比べてどうかしら？」

「BETAの数自体は然程変わらないと思います。しかし、出現頻度は若干低いかと。淒乃皇が居る以上、どうしてもBETAを引き寄せますから。」

地上陽動率はそれほど高くないのだが、淒乃皇に搭載されているML機関にBETAは群がってくるために陽動自体があまり当てにはならない。

「他には何かあるかしら、御剣？」

「やはり速度が大切かと。遅くなればそれだけ友軍の被害も大きくなり、また淒乃皇に引き寄せられるBETAも多くなります。」

「そう・・・なら、現状ではあんたたちに白銀を加えたメンバーがベストね。」

反応炉破壊で問題になってくるのは火力だが、それは淒乃皇があるので大丈夫だ。あとはいかに速く反応炉に達するかだ。

夕呼はこれにヴァルキリーズも加えようと考えているが、人数が増えればそれだけ速度を維持するのが難しくなる。補給にかかる時間も増える。最悪、先程述べたように白銀を加えた面子で攻略させようとするだろう。最も、それが現状では一番成功率が高くて被害を被る確率が低い方法。

「副司令、一つよろしいですか？最後に出てきたあの超大型のBETAは一体？」

と、そこで今までは黙って見ていた真那が疑問を口にする。

「ああ、あれね・・・鎧衣。」

「はい、あのBETAは実際に前の世界でも出てきました。その時はボクと王姫さんだけだったのもあって対処しきれませんでした。今は母艦級と呼称されるようになり、その大きさは全長1800メートルにもなると思われます。攻撃能力がないですけど、その胎内には要塞級を含め多くのBETAを内包しており、まさに移動式ハイクというべきBETAです。今のところ出現を予測するためには

振動計に頼るしかありません。対処方もその巨体故に胎内でS - 1を爆破させることくらいです。」

と、美琴はすらすら答える。実際に207Bのメンバーの中でも美琴だけが母艦級の出現を察知出来る。

「恐らく横浜基地襲撃の時もこいつは居たはずよ。でなければ説明がつかないこともあるしね。つとまあそれは置いて、対処はともかくなんとかこいつの出てるタイミングを分かるようにしたいわね。『・・・副司令。』彩峰？」

「・・・通常なら振動計でなんとか分かるかもしれませんが、仮に砲弾の着弾やS - 11の爆破に紛れられたら出現の予測は難しいと思われます。」

「っ！？そうね・・・BETAが戦術を取ってくる可能性がある以上それもあるか・・・いや、母艦級だけじゃなく他のBETAの地中侵攻も・・・」

唐突に発せられた彩峰の言葉に、前の世界の出来事と照らし合わせつつ夕呼も対策を練る。

「・・・だったらあれを使って・・・これならなんとか上手くいくかしら？」

考えが纏まったのか、夕呼は顔を上げて見回す。

「母艦級の出現予測に関しては振動計以外にも試してみるわ。それから・・・珠瀬！」

「は、はいっ！」

「あんたにはこの後OTHキャノンの改良型の試射をやってもらってから。H S S Tの落下事件は覚えているでしょ？」

壬姫の父親で国連事務次官の横浜基地訪問に合わせて、通常なら海上輸送がセオリーの爆薬満載の再突入駆逐艦がフルブーストで突っ込んでくるのだ。一回目の世界では壬姫が狙撃して撃墜、二回目の世界では事前に差し押さえていたのだった。

「あたしからは以上よ。」

手をひらひらさせながら退出してゆく夕呼らを見送り、そういえばと何かを思いついた冥夜が壬姫に声をかける。

「そつえば壬姫よ。そなた、お父上への手紙に私のことを何と書いたのだ？」

と言いながら壬姫の背後に回り込み肩を押さえる。

「はっ！？」

「そつえばそんなこともあったわね？」

「壬姫さんヒドイよ！ボクだって・・・ボクだって気にしてるのにつ！」

思いだしたかのように次々と迫りくる恐怖の魔の手。狙われた憐れな仔猫はただ震えるのみ。・・・まあ、自業自得なのだが。

「・・・冥夜。」

「うむ。」

「はわわわわっ！？」

示し合わせたように視線を通わせ、冥夜と慧は小柄な壬姫の体を持ち上げた。

「よくやったわ、彩峰、冥夜！そのまま強制連行して洗いざらい吐かせるわよ！」

「任せるがよい！」「・・・了解！」

他の者は互いに名前呼び合うようになったのに、未だ慧と千鶴は名字のままだった。二人らしいといえばそうなのだが・・・

「助けてくださーい！たーけーるーさーん！」

助けを乞われた彼もまた、後に制裁を受けることになるのだった。

（うおうっ！なんだ、寒気がしやがったぞ？）

うって変わって地上。207A分隊の訓練風景。召集をかけられた
まりもの代わりに武が訓練を見ているのだった。

（あゝやっぱり訓練に慣れた撃ち方してんな）

「涼宮！一度射撃を止めて集合させてくれ！」

そう言いながら、教官を代わるように頼まれた際にまりもから伝え
られたことを思い出す。

『白銀、あなたが207A分隊と仲良くなるのはいいけれど、一つ
大尉らしいことを見せてきなさい。』

（ははっ・・・まりもちゃんには叶わねえな）

心配をかけてしまった教官に詫びる。確かに今のところ大尉らしい
ことは何も見せてなく、あり得ないかもしれないが舐められる可
能性がある。無論、それは207A分隊だけではなく基地の他者にも
言える。ただでさえ前線国家に位置しながら緩い空気に浸かって
いるのだ。少しずつ改善の策を練らなければならない。

「大尉、集合いたしました！」

「ああ、楽にしてくれ。」

ハッ、と敬礼しながら言う通りにする。彼女達なら心配は無用か、と安心する武だった。

「お前達、射撃の時に何を気をつけている？ 築地」

「はい！ す、素早く正確に的を射ぬくことです！」

「そうか・・・ 柏木！ お前は何になるために訓練をしている？」

「ハッ！ 衛士になるためです！」

「そうだ、お前達は歩兵じゃなくて衛士になるために訓練しているんだ。なのに、今のお前達は訓練に慣れた撃ち方をしている。」

武が言いたいことがよく理解出来ないのか、不思議そうにする茜達。

「戦術機には自動照準つてのがあるんだ。その分だけ生身で撃つ時とタイミングがずれて、あまり早くに撃ち過ぎると無駄弾を撃つことになる。だから、今の内から一呼吸置いて撃つように心がける。その間に周囲の状況に気を配るのも戦場で生き残るのに必要になってくる。」

「「「「「っ！？ 了解っ！」「」「」」

（・・・最後のはちよつと露骨過ぎたかな？）

彼女達の表情に一瞬よぎったものを見抜きながら時期尚早かと考える。

（けれどそういったことも教えていけないとな・・・頼むからお前達はオレみたいにならないでくれ・・・！）

それは「シロガネタケル」の切なる願い。沢山の命と引き換えに生き延びさせられた者としての気持ち。他人から見れば甘い、その一言に収まるだろう。それでもいいと武は思う。戦場で大切なのは戦^も友と一秒でも長く生き残ること。

例えばその思いが伝わらなくても、彼女達なら乗り越えられると信じて・・・

午前の訓練が終わり、まりもに教官の引き渡しを終えて一人昼食を摂っていた。

（死の八分か・・・X M 3があるとはいえ新任の衛士にとってはかなりの難問だよな。）

新任が死の八分を乗り越えられないのは初めて見るBETAやその物量に気圧されるのと、人の死に触れるからであろう。

（うーん、訓練生の時にBETAの情報を知っていれば？ いやあまり関係ないな。でも、対戦術機訓練ばかりするのもな・・・）

任官するまでBETAの詳細については情報が制限される。これは戦意を低下させないためであり、それだけBETAの姿というのは人に恐怖心を抱かせるもので、何よりそのような異形の化物が大量にこぞって向かってくるのだ。

（どうすればいいんだろうな・・・）

「どうしたの、武君？ まだ食べてないじゃない。」

悩んでいるところに来たのは知代だった。彼女は一言断りを入れてから隣に座った。

「知代姉さんこそ、こんな時間にどうしたんだ？」

「午後の訓練がお休みになってね、暇をもてあましてたら何か難しそうなお顔をしてお考え事してた武君がいたもんだから声をかけてみたの。」

で、何考えてたの？ お姉さんが相談にのってあげるよ？。」

手間のかかる弟を見つめるように知代は武に向き合う。

「X M 3が出来て今の訓練生達も使うことになるんだけど、どうしたら初陣を乗り越えられるかなって。」

それを聞いた知代も難しそうな顔をする。

「それは・・・難しいことだね。確かにX M 3はスゴいけど、それだけでB E T Aとの戦いを乗り越えられる訳じゃないものね。」

「そうなんだよな。自分で言うのもなんだけど、X M 3があれば間違いない初陣における死の八分を伸ばすことが出来る。けど、そこから先はやっぱ本人次第なんだよな・・・」

それから何か良い案はないかと考えていたが、突然知代は訊ねてくる。

「ね・・・武君迷ってる？」

「どういうこと？」

「なんとなくね、武君にはもう考えがあるように思えたの。だけどそれが最善でも次善でもないから行動に移せない。違う？」

武の心がざわめく。それは自分でも言い様の知れない感情を見抜かれたからか。

「武君が私の知らない間にどんなことを経験したのかは分からないけど、きっと今考えてることは武君の戦場で生きてきた全ての証だと思う。だからね、それを信じてみよう?」

武がこれまで戦ってきた戦場は、いずれも人類史上最大規模のものだ。そんな中で逝ってしまった偉大なる恩師や先達、同僚。若干意味合いは異なるが生き残った武は彼女らから受け継いだ物を語り継がねばならない。それが衛士の流儀。

（神宮司教官・・・伊隅大尉・・・速瀬中尉、オレは貴女達から教わったことを伝えていけてますか?）

前の世界で己の死を以て衛士たることを直接教わった人を想う。武が衛士として成長出来たのは彼女らのおかげであり、世界が変わっても武の尊敬する人であることに変わりはない。

「そうだよな・・・ありがとう、知代姉さん。とりあえずまずはやってみるよ。」

「武君の役に立てたなら良かったよ。また何かあったら相談に乗るからね。」

片目をつぶってウインクして知代は立ち去っていった。

「よしっ!」

まずはまりもと相談しよう。自身の気持ちを伝えて、全てはそれか

らだ。武は勢いよく立ち上がるのであった。

コンコン

「白銀ですけど。まりもちゃん、少しいいですか？」

「白銀？どうぞ、入っていいわよ。」

ノックをして入室の許可をもらい、武はまりもの部屋へと入る。

「すみません、夜遅くに。」

「気にしないでいいわよ。それで、どうしたの？」

この世界では違うとはいえ、武にとってまりもは偉大な恩師。まりもにしても今は上官であるが、私的な場では元教え子として振る舞う。その表情は鬼教官と呼ばれるものではなく、元の世界の先生としての柔らかいものだった。

「ちょっと相談したいことがあるんです。」

一言先に入れてから始める。最初は何事かしらと聞いていたまりも

も、次第に険しい表情へと変わっていく。

「・・・白銀、本気かしら？」

「冗談の類いでこんなことはありませんよ。」

真剣な面持ちの武。それを見て本気度を察したまりもはため息を吐くのだった。

武が相談したのは戦術機の操縦訓練に移行してある程度進んだ場合、対BETA戦の疑似体験をさせようというもの。その後には、シミユレーターにも対BETAを加えてゆくつもりだ。

「あまりにも危険すぎるわ・・・最悪PTSDになる恐れがあるのよっ!？」

PTSD - 心的障害

所謂トラウマと呼ばれるものであり、武も前の世界で初めてBETAの実物を見て発症。それはこの世界の「白銀武」で唯一残っていたものだった。

「それは分かってます。だけど、あいつらが初陣で生き抜くには必要だと思っんです。」

苦しそうにも見える武の表情を、まりもは前の世界での武を想ってしまう。まりもにしろ武にしろ初陣は散々なものだったのだ。

「でも・・・」

「一回経験しておくだけでも、だいぶ違うはずです。それに乗り越えられないなら、衛士にならない方がいいでしょう。」

頭では理解している。乗り越えた時のメリットは大きいし、なににより訓練生時代ならば教官であるまりもがきっちりとアフターケア出来るだろう。医師とは別のやり方で、だ。

「・・・情報規制はどうするの？」

「オレが夕呼先生に直接お願いします。」

それが決め手となった。最後の抵抗をみせるまりもだったが、夕呼の名前を出したのが大きかった。彼女ならそうできてしまう権力があり、恐らく207Aが使い物にならなくなったとしても動揺しないだろう。

「分かった・・・やるからには全力でやらしてもらおうよ！」

覚悟を決め、より一層厳しい訓練を課すことを心に誓った。

帝都某所

「くそっ！小娘が調子に乗りおって・・・！」

「全くだ！あのまま傀儡であればよかったものを・・・」

そこに集っていたのは帝国将官数人。彼らは將軍が復権したために今までの甘い汁が吸えなくなった者達であり、かろうじて難を逃れたのだ。とはいえ、いつまでも逃れられる訳ではないだろうと彼らは踏んでいる。

「鎮まりたまえ。我らは我らの大義を抱えて立ち上がるのだ。かの娘は不要であり、帝国は今こそ立たねばなんのだよ。そして、我らはその立役者として米国の市民権を得る。」

集團のまとめ役が俯瞰しつつ口にした言葉に、他の連中も同意してざわめきが収まってゆく。

「しかし、米国の協力を失ったのが大きいのも事実です。いかなさいますか？」

「案ずるでない。既に米国経由で協力者は得ている。後は手筈が整うのを待つだけだ。」

色めきたつ集團。互いに今までの辛苦を労い、来るべき未来に想いを馳せる。

「して、目標はどうされますか？」

「目標は横浜と小娘だ。あの魔女に操られし將軍を救おうとするも無念な結果に終わる。そして横浜を、あの忌々しきハイヴ諸とも消し去ってくれようぞ。」

己のが欲望に従う者達は未だ息を潜める・・・

「それでは唯依ちゃん、横浜基地で頑張ってくれよ。」

「ハッ！必ずや成果を残して見せます！」

堅苦しく敬礼をする娘みたいな存在に、巖谷は苦笑する。

「おいおい、こんな時にまで格式張った物言いをする必要はないだろう・・・」

「し、しかし・・・」

板挟みに落ちてゆく唯依。そんな彼女を見てまた悪い癖が出たなと思いつつ、まあいいかと好きにさせる。

「・・・しかし、叔父様。何故いきなり横浜との共同での開発等と

「いう話が出てきたのでしょうか？」

「ああ・・・その話自体は殿下から来たのだが、どうやら向こうの思惑に合わせてる気がするな。復権の事といい、横浜が裏で手回しをしたと聞く。もしかすると・・・」

「まさか第四計画が!？」

「恐らくそうだろうな。詳細は分らんが、目的を達する直前なのだろう。」

第四計画、日本主導で行われていると聞く国連の対BETA極秘計画。巖谷もそういった計画があるとしたら知らないのも、一体どのようなものなのか興味もあるにはあるけれど恐ろしいものを感じている。

「となると、殿下が復権なさったのは第四計画絡み。その関係で役職を追われた者達は親米派という訳ですか。」

「そうだろうな。彼らは帝国にとって国賊も同様、むしろこれで良かったと言えるな。」

同じ帝国の民であるというのに嘆かわしいことだ。中には人質を捕られ強要されていた者も居たようで、そのような行いをする米国の輩に憤りを感じる。

「ともあれ何も無いとは思うが、気をつけてな。」

「はい。」

「それと・・・一応白銀大尉にも気をつけるんだ。」

巖谷から出された名前に唯依は疑問を抱く。もしかすると、あの人の良さそうな武に何か裏があるのではないかと感じてしまう。

「叔父様、それはどういう意味でしょうか？」

「いや、彼の人となりについて気になるわけじゃない。ただ、彼の経歴を調べたらおかしいんだよ。」

「おかしい・・・ですか？あれほどの腕前を持つのに？」

以前対戦した際のことを思い出す。こちらは武御雷で、あちらは不知火改。OSの差があったとはいえ、自身が完敗したと認める程の相手だ。かといって次に対戦する時は負けないと唯依は心に誓っている。

「違うぞ、あれほどの腕前だからだ。彼は三年前までは一般人だった。かの横浜侵攻で行方不明となり、今年になるまでその足取りを掴めなかった。三年、何の修練も積んでいなかった一般人が幼少より修行を行ってきた斯衛を上回るといえるのはどう見てもおかしいと思うだろう。」

それを聞かされて唯依はショックを受ける。何か恐ろしい物が唯依の体内を貫いていった。自分より少し年下に見える彼が、よもや三年前までは只の一般人だったと・・・

（もしそうだとすれば、白銀大尉は何れ程の地獄を見てきたのだろうか）

考えただけで身震いがするのであった。そんな唯依の様子を見て、言ってしまったのは不味かったなと巖谷は後悔した。

「彼自身に問題がある訳ではないんだし、あまり気にしないことだ。」

幾分か唯依の表情も明るくなり、この話がこれ以上なされることはなかった。ちなみに巖谷が武の経歴を調べたのは、唯依の婿として迎える時に何か不味いところはないか確かめるためであったのを付け加えておく。

E p i s o d e ?

悠陽が復権を公表してからしばらく、帝国に好意的に受け入れられたのは当たり前だが、諸外国特に欧州や大東亜連合にはかなり好意的だったこともあり、国際的な摩擦も少ないといえるだろう。

加えて、今までは將軍が帝国のトップであると見なしていなかった米国が通信回線とはいえ、初の將軍と大統領の会談が行われたのも大きな意味を持った。

これにより他の勢力に関しても將軍の復権に異を唱えるところはないかった。

これには悠陽が復権を宣言する際に、帝国は国際協調を優先する旨を上手く伝えたことと、初の御披露目となった年若い見た目麗しい悠陽が案外人気者になったのも大きかった。

まだ懸念事項があるとはいえ、こうして復権自体は国際的にしっかりと認められていた。が、全てとはいい切れないのもまた事実。

特に国民の大半に反日感情がある統一中華では、やはりというべきか拒絶の意志が強く見られた。そしてもう一つ、表向きは友好的でもソ連には何かしらの裏があるようだと言部が掴んでいた。

いきなり夕呼に呼び出された武は、霞に引つ張られる形で執務室へと赴いてきていた。部屋に入って見えたのは何やら難しい表情をしている夕呼と純夏であった。

「ようやく来たわね。早速で悪いけどこれを見て頂戴。」

挨拶や一体何用なのかと訊ねる前に夕呼が口を開いてモニターにデータを映し出した。

「これは・・・ハイヴのマッピングデータですか？」

「そうだよ、タケルちゃん。これは佐渡島のだよ。」

答えたのは一緒にこの部屋へとやって来た霞と肩を並べている純夏。その表情にも何やら困惑したものがあつた。

何が言いたいのかわからない武だったが、そんな彼には関係無く夕呼は次のデータを映し出した。

「これも・・・佐渡島ハイヴのマッピングデータですか？」

「ええ、そうよ。今のがこちらの世界のものよ。何か気づいたかしら？」

そう言つて二つのデータが並んで表示されて、比較しやすいようになされた。どちらにも所々小さな差異は見られるが別段おかしいとは思わなかった。

「？確かに僅かな違いはありますが、それを含めても問題無いみたいですけど？」

「そうね・・・確かにほとんど同じだね。」

呟くように言い、次の操作を行う。すると二つのデータが重ね合わせられた。

「前の世界では今年の末にリーディングしたもののだけど、この世界の現段階とほぼ同じ大きさ。一年足らずでそこまで変わる訳無いけれど、反応炉ブロックに関してはこっちの方が大きいのよ。」

実際に重ね合わせてみたら良く分かる。広間の数や地下茎構造の拡がりとはほとんど変わらない。しかし、反応炉のある主広間の大きさに限っては違っていた。とは言っても、そこまで差がある訳でもなく比較すれば違つと分かるくらいだった。

「あんたも分かつてると思うけど、基本的にBETAの行動は変わらないはず。なのに、今回これが起きた。」

「それは・・・やっぱり純夏が存在が原因になるんですか？」

純夏の脳髄は元々反応炉によって生かされていたのだ。それが途切れたということは、少なからず人類がBETAに影響を与えたに他ならない。

「いいえ、その可能性は否定出来ないけど、これの原因ではないは

ずよ。」

そう夕呼は断言をする。純夏が目覚めてからまだ二週間も経っていない、故に違うと言ったのだった。

「あたしたちには今回不確定要素が多い。他の世界の記憶があるようにね。それは恐らくBETAにも言えること。」

「それが・・・これだと？」

「これだけじゃないでしょう。今はまだ小さなものかもしれないけど、後々大きくなるかもしれないわ。」

そして夕呼は、けれどもやることは同じよと繋げる。BETAを殲滅させるには変わらない。ただ、より慎重に備えておくだけ。それを聞いて武もその通りだと思う。普通なら、未来が分からないのが当たり前なのだと。

割り切ったところで、暗い面持ちの純夏の頭を撫でる。

「そんな顔すんなよ。別にお前が悪い訳じゃないんだ、気にすんな。」

「純夏さん・・・元気出してください。」

「ありがとう・・・タケルちゃん、霞ちゃん。」

三人の周りに桃色な空気が流れ始めたので、なんとか現実に戻そう

とする夕呼だった。

「まったく・・・乳繰り合うなら他所でやってよね。」

ご機嫌斜めな夕呼に平謝りすることになった武。ちなみに武だけが悪いとされたのは、やはりというか恋愛原子核だからか。いい加減真面目な空気に戻ると、今後の対応について話し合う。

「とりあえずは今やっていることに付け加えて凄乃皇の改造ね。」

「えーっと、小型化と高エネルギー回路の形成ですよね？」

凄乃皇、特に四型は様々な武装を持ちその戦闘能力はずば抜けている。しかしながら、圧巻ともいうべき四型も前の世界では不完全な状態での出撃により、その力を発揮することは出来なかったのである。

そして四型が活躍するであろう場所は地球上最大規模を誇るオリジナルハイヴ。所属するBETAも群を抜いて多いため、弾薬は幾らあっても足りるということはない。

「ええ、ついでに弐型の方も一度組み直そうと思うの。そっちもよろしくね。」

「わかりました。それじゃ、行こっか霞ちゃん。」

「はい。」

「純夏も霞も無理すんなよ。」

「それはタケルちゃんのことだよ。いっつも無茶ばかりしてるんだから。」

「そうです・・・白銀さんこそ気をつけてください。」

無理して倒れられても困るので釘を刺そうとしたのだが、逆に武がやられたのだった。そんなに無茶してないんだけどな、と本人に自覚はなかったけれど。

「それで、そろそろ佐渡島からBETAの侵攻がある訳だけど、新潟に実弾演習でもぶちこむ？」

この時期に武は居なかったので預かり知らぬが、旅団規模のBETAが侵攻してくるのだった。無論、前の世界の通りに進めばという条件付きなのだが。

「・・・今回は止めときましよう。来るかどうか分からなくなってきたし、下手に反AL?の連中に口実を与えたくないです。」

仮にBETAの侵攻時期がずれていたら、AL?は多少なりとも被害を受けるだろう。折角米国のAL?推進派にも大打撃を与えられたのだ、ここで賭けをする必要もないだろう。

「あたしもそのつもりよ。今回は見極めたいしね。」

夕呼自身、今回のことは二重の意味での確認とするつもりだった。ここで言う二重とはBETAの行動と武についてのだ。BETAについては明言しなくても良いだろう、一方武に関しては覚悟云々よりどの程度まで考えて行動するかに重きを置いていた。

とりあえず自分でも色々と考えてはいるようだ。そこから武は如何に戦力を減らさずに済むかを夕呼と相談していく。その中で同時に横浜基地全体の弛んだ空気を何とかするのも忘れなかった。

武が考えてはいた策を夕呼と煮詰めたので、実行にあたりラダビノット司令に許可を貰うことになるのだった。

休日であるにも関わらず、シミュレータールームで一人黙々と訓練を重ねている姿があった。彼女の名はまりも。

（あの子達はあんな戦場で戦ってきた・・・なら、私だってあの子達の教官として負けてられない！）

思い起こされるのは先日見せて貰ったハイヴ攻略のシミュレーション。そこで207Bのメンバーは凄まじい成果を出した。混迷する世界で未来への希望の光が見えてきた、そうまりもは思ってしまった。

同時にまだまだ負けたくないという想いも芽生えていた。実質、彼女達は二ヶ月弱しか戦術機に乗っていない。まりもは実戦経験も二桁を越える古参であり彼女達の教官なのだ、負けたくないと思うのは当然だろう。

（その為には今まで積み重ねてきたものを徹底的に変えていかないと・・・！）

今まりもがシミュレーターで使用しているのは第三世代機の不知火である。

これまでまりもは第一世代機である撃震にこだわって使ってきた。理由は撃震に慣れているのもあるけれど、まりも自身が装甲が薄くなった不知火等を使うのに躊躇いがあったからだ。

別にこれはまりもだけではなく、その他の古参衛士にも見られることである。仮にも命を預ける機体なのだ、一番信頼出来るというのも分からなくはない。

しかし、まりもはシミュレーターとはいえ第三世代機に慣れようとしている。X M 3が搭載されて第一世代が第三世代にも及ぶ機動性を手に入れたものの、主機出力等の関係からいずれ向かうことになる激戦では足手まといとなってしまう。

（それに白銀に負けたままっていうのもね・・・）

確かに武は自分が見てた頃と比べて遥かに腕を上げたといっているだろう。前回対戦した時は同じ条件下で惜敗した。かといって、ま

りもの腕が武を下回っているかと言えばそうではない。

まりもの敗因は二つ。X M 3 に対する習熟度と、第三世代機である。まずX M 3 に対する習熟度であるが、これは元々武の機動をベースとしているので仕方ない。

練習機ではあるが第三世代機の吹雪。これが勝敗を分けたといってもいいだろう。装甲重視の第一世代に機動性重視の第三世代、操縦にも全く扱いが異なってくる。

今後のことを見据えて自分が武達についていくため、一刻も早くまりもは第三世代機に慣れなければならなかった。

（A - 0 1 も現在七人。いや、白銀は違うから六人が・・・新任が入るがそれまでに出勤がないと言い切れんからな）

中隊長のみちるは今後どのような任務があるかを考えながらシミュレーター室へと向かっていた。

人数の少なさはどうにもならないこともあり、出撃時の生存率を少しでも高めようと休日返上の訓練を行おうとしていたのだった。

（ん？あれは・・・速瀬か！？）

曲がり角を曲がった先に見えた青いポニーテール。強化装備姿であることから彼女も同じ考えのようだった。一人でいるようで親友の遥の姿はない。

「速瀬、お前も休日返上でシミュレーターか？」

「そう言う大尉もじゃないですか。あたしは白銀に負けっぱなしが気に入らないんですよ。」

不敵に返す水月。彼女は訓練の度に武との勝負を行っており、未だ一勝もあげてはいない。か、みるみる腕を上げており水月に引きずられる形でヴァルキリーズも上達している。武曰く、そろそろ負けそうだという。

「おや、一つだけ動いてるのがあるぞ？」

「ホントですね、珍しい。」

がたんごとん、と激しく動いていたのだがほどなく停止して中から降りてきた。

「「神宮司軍曹（教官）！！」」

「速瀬中尉、私はもう貴女の教官ではありませんよ？」

階級の事で強くは言えないが、まりもの瞳からは言葉には出来ない恐怖を感じ取った水月は硬直してしまう。訓練生時代の厳しい扱き

を思い起こされたのだ。

「ところで軍曹、休日だというのにどうしてシミュレーター室に？」

隣の水月に内心毒つきながら、話題を変えるべく話を持ちかけた。

「今の訓練生達が戦術機過程に進むとXM3の導入が決まっているので、その教官を勤めるのですから少しでも慣れておかねければと思いますして。」

「へーもう訓練生に使わせるんだ。」

「いや・・・訓練生だからか。今ではそんなに苦労はしないが、最初は酷かったからな。概ね何も知らない状態の方がXM3に対して適応し易いということか。」

みちるは自身のXM3慣熟訓練を思い出す。あれは旧OSに慣れた者では扱いづらいだろう。なにせ今までの機動の概念とは全く異なるのだ。

衛士にとっては鬼門とも言える上空を使つての三次元機動。これは実戦経験がある者なら誰しもがその危険極まりない行為に拒絶感を覚える。

「そつか、まだ何も知らない訓練生だからこそXM3に対する習熟が早い。即戦力にも期待出来るわけね。」

肯定し頷くまりも。互いにX M 3について思うところを話し合いま
りもは部屋を出ていき、みちると水月の二人は訓練を開始するのだ
った。

整備班が忙しくハンガーを駆け回る中、武は続々と搬入されてく
る帝国の代名詞とも呼べる戦術機を見上げていた。勿論、邪魔にな
らないよう端っこでだが。

「すげえ・・・武御雷がこんなにも色とりどり・・・」

元々横浜基地にある赤と白三機に加えて、今回新たに黄と黒が搬入
されたのだった。

やはりこう改めて見ると、武御雷は感慨深い戦術機だ。凄乃皇と幾
つかの奇跡みたいなものがあつたが、たった五機であるオリジナル
ハイヴの最下層へとたどり着いたことを思い出す。まだ知らない戦
術機は沢山有るが、武にとっては対B E T Aで武御雷程頼もしい戦
術機は無いのだった。

「このような場所で何を呆けている。」

そこに居たのは真那と白の三人だった。

「お前達、自己紹介をしろ。」

真那に敬礼をし、武に向き合う三人。

「神代巽少尉です。」

「巴雪乃少尉です。」

「戒美凧少尉ですわ。」

「『今後宜しくお願いいたします（ますわ）！』」

対する武も返礼を行い、自己紹介をする。

「白銀武大尉だ。こちらこそよろしく頼む。」

この三人所謂三バカには記憶が無いらしいので、武も注意はしている。下手に気を抜き過ぎれば口を滑らせてしまうかもしれないし、何よりも隣の真那が怖い。武の方が階級は上だが、人間関係上は真那の方が上なのだ。仕方ないと言えば仕方ない。

いくらか隣からの視線が和らいだ頃、一通り搬入作業への指示を終えた唯依が来ていた。

「篁唯依中尉、現時刻只今を以て着任いたします。」

「貴官の着任を歓迎する。」

お互いに敬礼をして形式上の挨拶を行う。武家の人間である唯依は慣れたものだが、一方の武は夕呼の直属であるが故にあまりこういった事に慣れていない。その為表情にぎこちなさが垣間見える。

「・・・という訳で堅苦しいのはここまで。オレ個人に対してあまり敬語とかは気にしないでいいですから。」

「「「「「・・・」」」」」

とうとう堪えきれなくなった武が折れてしまい、真那を除く斯衛組が呆然とする。真那は、やっぱりなと頭を抱えたのだった。

「何が『という訳で』だ。貴様という奴は相変わらずだな。」

「まあ、こういう性分ですしそこを何とか・・・」

（もしかして月詠中尉と白銀大尉は長い付き合いなのか・・・？）

ある程度親しそうな関係が見られる会話を聞きながら、唯依はそう考える。

（仮にそうだとするなら、月詠中尉は白銀大尉の空白の三年を知っていることになる。加えて此処には『あの方』も居られることから危険な人物ではない。やはり大尉は第四計画の重要人物なのだな・・・）

唯依は山吹を授かった武家の当主だ。一応斯衛の赤である真那が何故横浜に駐留しているのかを知っている。そこから武が冥夜に害を及ぼす存在ではないと判断し、武の経歴自体偽造されたのだろうと予想した。

ちなみに唯依が知っているのは冥夜が將軍家縁の人物だということ、決して悠陽の双子の妹であることは知らない。

とりあえず真那は「大尉は上官なのだから、中尉である私には口出しは出来ない」ということで無理矢理納得していた。そう、無理矢理……

そんな真那が醸し出す雰囲気にはびびってしまう武と、何故か白の三人だった。

「……ところで大尉。整備班が早速武御雷に取りついていますが、もうX M 3に換装するのですか？」

傍目にちらつと見えたのは、横浜基地と斯衛の整備班が一緒になって作業している姿であった。

「（助かった！）その通りですよ、篁中尉。月詠中尉や神代少尉達の機体には既に組み込み済みですし、何より篁中尉も早く実機で確かめたいでしょう？」

それを聞いて唯依は思わずにやりとしてしまう。以前は遅れをとったが今度はそうはいかない、衛士である以上誰でも負けず嫌いなのだ。

「それにしても・・・横浜の整備班は妙に生き生きとしているな。」

作業をする彼らを見つつ、真那はそう呟く。ここ最近整備班はXM3の換装に新兵器の開発、更には機体の改修と日夜激務なのだ。中には血走った目の者も居る。

「まあ・・・整備班も日本人ですからね、帝国の象徴ともいえる武御雷に触れられるのがよっぽど嬉しいんですよ。」

帝国と共同での計画が発動されてからここ横浜基地では日本人整備班の抜擢が行われた。国連の基地とはいえ流石に外国人に武御雷等を触らせるのは良くないとのことだ。

そんな熱気に圧されていると唯依や白の三人が呼ばれていた。どうやらXM3搭載と同時にやっている武御雷の改修についての話らしい。

武御雷は不知火を軽く上回る性能を持つが、それは高度な整備環境に裏付けされている。本来なら量産には向かない機体なのだ。そこでXM3搭載と平行して性能を落とさずに整備性を少しでも引き上げようとするのだった。

「それで、実際のところこんなにも急がせた本当の理由は何なのだ？とは言っても大体予測はついてるが・・・」

近くに誰も居ないのを見計らって真那が小声で囁いてきた。

「・・・勿論佐渡島からBETAが進攻してくる事です。」

「やはりそうか・・・」

つられて表情を引き締めた武も小声になる。聞かされた真那は予想していたとはいえ苦い顔をするのだった。

「前の世界ではオレが11月11日にBETAが来ることを知っていたから、夕呼先生に頼んで事前に防衛基準態勢2を発令させました。」

と、そこまで言うってから一区切りを置く。進攻を事前に知っていた夕呼がBETAを捕獲、そしてそれをトライアル中に放ち、その時まりもが目の前で喰われた。どうしてもその時のことが武の頭を過ってしまい心の奥底でさわめく。

「・・・ですが、今回はそれが当たるかどうか分からないんですよ。」

「どういうことだ？」

「詳しい話は省きますけど、もしかしたらBETAの行動が変化するかもしれないんです。」

そこまで言うてから真那は第四計画関連だと分かった。

「ですから今回はその見極めにするつもりです。万が一に備えて新潟辺りには近々進攻の可能性があるとだけ警告だけしておきます。それに付随して策も打つ予定です。」

「そうか・・・いや、すまなかつたな。で、話は若干変わるがもし進攻があつた場合には此処からも出すのか？」

真那としては犠牲を減らすためにも前の世界同様にしておきたいところだったが、武の話を聞いて考えを改める。それで納得出来るはずもないが、武が策を打つとのことで無理矢理抑えようとする。

分かつてはいるのだ、例え万全の状態でもBETAを迎撃したとしてもかなりの犠牲が出ることを。予測不可能なBETAだが、一番の問題はその物量。それに対抗する手段は今のところ人類にはない。

「その予定です。A-01は確定ですが出来れば篁中尉辺りにも出てほしいですね。」

「それはXM3の実戦証明が目的か？」

前の世界ではきちんと実戦証明なされたものだが、この世界では未だになされておらず、世界へと大々的に売り出すためにも必要なことなのだ。後は頭の固い連中を説き伏せるためぐらいか。

トライアルを行い実際に使ってもらえば恐らく文句はないだろうが、そのトライアルに人を集めるためにも必要なのだ。

「そうですね。それと不知火の改良型と武御雷のテストも兼ねるつもりです。斯衛専用不知火の方は間に合いませんけどね。」

「・・・その時は冥夜様も出撃なさるのか？」

護衛である真那にしたら大問題だろう。公には出来ないが207Bは既にエースに比類する腕の持ち主だ。実戦経験のある彼女達を遊ばせておくほど余裕はない。

「いえ、今回そうはならないはずです。無いとは思いますが万が一の時は月詠さんも冥夜達についていてください。」

「了解した。だが万が一等ということが起きぬことを期待しよう。」

「・・・それは奴らに言いたいんですけどね。」

ハンガーで武御雷の改修についての説明を終えて武と唯依は基地の案内を含めてPXへと来ていた。

「さてあいつらは・・・おっ、いたいた。」

昼食を受け取った武は辺りをキョロキョロと見回し、207訓練生達を見つけて近寄っていく。

（あの方がそうなのか・・・しかし、似ておられるな）

唯依は武の後を追いつつ、食事を摂っている訓練生達の中の一人を見てそう思う。

「よっお前ら。ここ良いか？」

「あっ、タケルくなんか久しぶりだね。」

「久しぶりって・・・あんた昨日会ってたでしょうに。」

的外れなことを言う美琴に呆れてしまう千鶴。いつもの光景に慣れてしまったのか、207Aにも武と接する際に堅苦しさは見られなくなっていた。

「ところでタケル。そなたの後ろに誰か居られるぞ。」

「おおっ！紹介するな・・・篁中尉。」

「帝国斯衛軍の篁唯依中尉だ。」

唯依が自己紹介を行うと皆が一斉に立ち上がって一糸乱れぬ敬礼をする。それを見て、あまり詳しくはなかったけど207Aもやはり優秀だなと武は思いつつ席に座らせるのだった。

「篁中尉はな、横浜基地と帝国との間で行われる新OSと新兵器開発の現場担当として来ているんだ。」

何故帝国軍人が国連の基地である此処に居るのかを簡単に説明したのだった。

「あの、白銀・・・大尉。そのようなことを訓練生である私達に言っても良かったのですか？」

「涼宮、別にいつも通りでいいぞ。」

「ですが・・・」

「篁中尉もこれが普段の光景ですから慣れてくださいね。」

傍らで困惑していた唯依にも声をかける。このような事で良いのだろうかと自問自答する唯依。

「茜はもっと柔軟に対応しないとね。それで白銀君、結局私らに言っても良かったの？」

「茜も白銀君がそう言っているんだからあまり気にしないの。けれど、晴子は碎けすぎよ。」

どもっている茜に晴子に合いの手を入れ、真依が困りながらも普段通りに接する。

「えつとさっきの質問の答えなんだがYESだ。詳しい事は戦術機過程に進んでからになるが、お前らにも開発の一端を担ってもらうことになる。」

それを聞いて驚いていたのは207Aだけでなく、唯依もだった。

「あれ？壬姫ちゃん達はあんまり驚いてないけど、もしかして知ってたの？」

「私達はたけるさんに教えてもらってたんだよ、美咲さん。」

「まあ、そういうことだ。これから篁中尉とも会うこともあるだろうから今日のところは顔合わせしてところだな。一応これは上官命令としておこうか？」

言葉にはしていないが帝国との関係が表向き良くないのはこの場にいる誰もが分かっている。武が少しずつでも良くしようと言つことは明白だった。

帝国と横浜の確執を改善していくためにもまずは彼女達には普段から良好な関係を築いてもらおうと、今後のことを考え武はそうした対応を行ったのだが如何せん最後の部分が余計だった。真面目なままでは終わらないのが武クオリティ。

「鬼畜だね、白銀。篁中尉に命令だからと言ってあんなことやこんなことまでするなんて流石・・・ポツ」

「あ、ああ彩峰、お前なんつーことを！」「あ、彩峰え！何言つて

んのよ！」

若干シリアスっぽい雰囲気にとさらりと爆弾が投下されて現場は一転し力オスと化したのだった。

「……………」

「白銀さんに限って……いや、でもやっぱり男の人だし……」
固まってしまった壬姫と顔を真っ赤にしてぶつぶつと呟く美咲。みかねた真依が二人を正気に戻そうと肩を揺さぶる。

「わーお、冷たい視線がぐっさぐさ。」

面白いものを見つけた晴子はさらに煽るべく茶化していく。

「……………」

「いや、お前らそんなことを信じんなよ！って、篁中尉まで！」

この騒ぎの張本人はというと、何やら勝ち誇った表情で眺めていたのだった。その姿が誰かと被ってしまうのは致し方無い。

（くっ……こうなったら最終手段だ）

「彩峰、焼きそばパンで手を打とうではないか？」

「委細承知。命令絶対遵守。」

対彩峰最終兵器の名前を持ち出すことですぐさま手のひらを返す。
こうして何とか第一回の力オスが幕を閉じた。（続くかもしれない）

唯依は自室に戻り今日の驚くべき出来事を振り返りつつ考察を重ねていった。

（全く・・・白銀大尉には驚かされてばかりだな）

思い起こされるのは午後の一時。すぐ近くでは武を中心に何人かが騒いでいた。凄腕の衛士としての一面を知っているが為、今のくだけた態度を見て唯依はそのギャップに驚いていた。

『涼宮・・・訓練生でよかったな？すまないが大尉はいつもあんなのか？』

『はい、白銀・・・大尉は普段はあのような感じです。』

茜の困った様子に、唯依は共感を覚えて一緒にため息を吐く。これは慣れなければ後々大変なことになりそうだと思っただった。

『で、でも白銀君はスゴいですっぺ!』

『多恵は少し落ち着く。ですが白銀君が軍人としても優秀なのは本当のことだと思います。』

真依は訓練の時に武が指摘してくれたことを一つ一つ唯依に伝えていく。それを聞いて指摘した内容について成る程なと納得し、自惚れではないけれど自分が負けた相手だと認識していた。

『流石・・・白銀大尉だな。』

『それはどういう意味ですか、篁中尉?』

全てを聞き終えて自身で完結してしまった唯依に茜がおずおずとしながらも訊ねる。

『ん? ああ、すまなかったな。私は此処に来る前に一度帝都で手合わせをしたことがあってな。その時はものの見事にあっさりと破れたのだ。』

本来なら山吹を、武御雷を授かる斯衛として敗北は恥ずべきことなのだろうが、唯依の中にはその様な感情はなかった。

一方話を聞かされた三人は武御雷を駆る斯衛を倒してしまった武に関して評価をもっと上方修正しなければならなかった。流石にそこまでは予想しきれなかったのだ。

『お前達は運が良いぞ。何せ世界でも有数の実力を持つ白銀大尉に教えを受けるのだからな。』

誇らしい気持ちで話を終えたのだった。

（白銀大尉には人を惹き付ける何かがあるのだろうか）

昼間の出来事を振り返りつつそう思う。唯依にしてもその一人だという自覚はあった。

（それにしてもまさか大尉の方が年下だったなんて・・・若いとは思っていたが）

今日一番驚いたのはそこだろう。これでますます白銀武という人物が謎めいてきたのだった。

（だが、年下であろうが何であろうが彼本人は尊敬出来る人物であり、また今私が目標とすべき相手、それでいいんだ。）

そう自分に言い聞かせるように思い込んでゆく。いずれは武本人の口から聞けることを祈って・・・

E p i s o d e ?

空に太陽が昇り始める頃、朝日を受けて波打つ水面に臨む此処横浜基地では、殺風景な周囲の景色とは不釣り合いな警報が鳴り響いた。

基地の人間は突如鳴り響く警報を耳にすると、ある者は急いで持ち場へ向かい、またある者は眠っている仲間を起こしに行く。

「うつむ・・・やはり今のままではB E T Aが此処まで攻めてきた場合横浜基地は壊滅だな。」

武、夕呼はラダビノッド司令と共に基地の司令室にて新たに判明した母艦級を想定しての訓練を行っている様子をチェックしているのだが、予想に反さず如何にこの横浜基地が腑抜けているかが浮き彫りとなる。

「司令、恐らくB E T Aはその気になればいつでも此処を取り戻すべく攻めてこれるはずです。ですがそれをしないのは・・・」

「B E T Aにとって此処横浜はそれだけの価値があるというのか・・・」

苦々しい表情で重々しく考えを呟く。夕呼も同じなのか黙って頷くだけであった。

B E T Aは機械染みたあるプログラムによって行動している。

万単位での侵攻をする際に要塞級から小型種に至るまで決して同士

討ちをしないことから、BETAの行動プログラムみたいなものが
どれだけ優秀なのかは明らかだ。

付け加えると唯一生き残った純夏が捕らわれていた横浜がBETA
にとって何らかの研究所なのはほぼ間違いない。

しかし、純夏が00ユニットとして肉体を持つようになった今、反
応炉を取り返そうとしてBETAが攻めてくる可能性が大きくなっ
た。

00ユニット云々は隠したままラダビノッド司令にその事を示唆し
て今回の演習にこぎ着けたのだ。

「では司令。例の件なのですが・・・」

「うむ。帝国との兼ね合いもあるが許可を出しておこう。」

ありがとございますと礼を述べると武は司令室を後にするのだっ
た。

司令室を出た武はそのままの足で207訓練生が集められている場
所へと向かう。武が部屋に入ると皆一斉に敬礼をする。武も軽く返
礼して早速話を始めるのだった。

「軍曹、彼女達の様子はとうだった？」

「はっ！防衛基準態勢2発令より十分以内に集合完了。その後は司令室からの指示を仰いでいたところです。」

普段とはまた違ってその身に緊張感を漂わせている武を見て、207訓練生達もより一層気を引き締める。

彼女達が見ている中、武はまりもと集合に至るまでの様子を詳しく聞いていった。

（さすがだな。冥夜達207Bはともかくとして、涼宮達207Aに関して問題無さそうだな）

207Bは前の世界の記憶があることから、此処横浜がBETAに攻められることを知っているが為に彼女達には気の緩みというものはない。しかし、武は207Aはそうはいかないと踏んでいたのだが、彼女達もまたほとんど変わらない素早い集合をした。

今まではほとんど知らなかった207Aメンバーの事を知っていく武は嬉しく思うのだった。だが、少なくともこの場ではその様な感情は一切見せないように心がける。

「この目で見た訳では無いが神宮司軍曹より聞いた話では及第点に達していると判断した。だが、今後もこれに慢心せずに精進を続け

て欲しい。お前達の目標である衛士の一分、一秒遅れで大勢の命が失われるなんてことはよくあることだからな、それを覚えておけ。」

「『『『』はっ！』『』『』」

彼女達が目指すべき高みを具体的に示してやることで励みになればと思うのだった。武が既に得ている信頼は絶大なのか、誰一人として武の言葉を軽んじる者は居ないのだった。

（どうやら私の心配は無用だったようね・・・）

207Aも武を信頼しているようで、隣に居るまりもは内心嬉しく様子を見ていた。

かつての世界では武と恋仲にあったまりもだが、今のところは一步引いたところに居る。それは冥夜達にしる純夏にしる程度の違いはあるものの変わらない。

武にしても恋愛ということについてはそうだろう。彼女達皆を愛し、とるという強い気持ち故に戸惑っているのだ。主観的に言えば別人の気持ちな訳ではあるけれど、それでも自分自身の事であるから嘘偽り無い物だとはつきり断言出来る。

彼女達は皆その事を察しているので、余り武に無理強いをしないし自分一人にこだわって欲しいとは思ってない。かといって恋愛原子核と呼ばれる武のことだ、これ以上は増やさないで欲しいとは思っているけどどうしても引き寄せられる人が出てきてしまう。だからこそこれ以上増えないように対外的にアピールして見せつけるのだ。果たしてその労力が実を結ぶかは別としてだが。

「・・・そんなお前達に嬉しいニュースだ。とっておきのご褒美として三週間後に南の島でバカンスに行くことが決まった。」

感慨深く見ていたまりもだったが、武から発せられたその一言で現実に戻された。207訓練生達も驚いてしまったようで、表情に表れている。けれどもまりもはそれを咎めることが出来なかったのだった。

「大尉！それは『軍曹』・・・失礼いたしました。」

まりもが意見を述べようとしたのを片手を挙げて遮る。そして訓練生達を座らせて楽にしてもらう。

「不安か？涼宮」

「は、はい。大尉『今はいつも通りでいいぞ。』・・・うん、白銀の言う通り不安だよ。」

他のメンバーにも目を向けたが、返ってきたのは同じような反応だった。

「総合戦闘技術評価演習が普通より一ヶ月近く早まったのには、前にちらつと言ったけどお前達にテストパイロットをしてもらうからというのがある。」

武自身も総合戦闘技術評価演習が早まったのを聞いたのはつい先日。多少は早めることを考えていたとはいえ当初は驚いたものだ。

「実を言うとオレもこの話を聞いたのは昨日のことなんだ。一応最終決定はオレに任された訳だが、お前達なら大丈夫だと確信があるからGOサインを出したんだ。」

武に誉められた嬉しさがあるものの、207Aは未だに不安を拭えないでいた。そんな彼女達を見て武は一つ話を切り出すのだった。

「なあ、柏木。もし予定通りに総合戦闘技術評価演習が行われたとしても、お前達は不安にならずに受けれると思うか？」

「えっ、うーん・・・そりや不安になると思うよ。だって衛士になれるかどうかだからね。あっ・・・」

「そうだな。お前達ぐらいのレベルになったら何時やるかどうかは余り関係無いとオレは思うんだ。」

晴子が気づいたのをきっかけに他のメンバーも気づいていく。唯一多恵だけは頭に？を浮かべていたけれど。そんなやりとりをまりもは嬉しげに見ていた。この後の話の展開が少し分かったからだろうか・・・

「そうは言っても正直総合戦闘技術評価演習が早まって、何かしら言いたいのは当たり前だと思う。」

それでもお前達は軍属なんだから、一度下された命令はきちんとしないとイケないんだけどな、と付け加える。そこで露骨に嫌そうな顔をしたのが居たが敢えて無視する。

「まあ命令については追々分かると思うから今日は置いて、一つオレの話を聞いて欲しい。」

目をつむると思ひ返されること。余り良い思い出ではないけれど散々呼に良いように使われていたことだ。そしてこの言葉はオレがかつてヒヨッコだった時に言われた言葉だと前置きしておく。

「まだ準備が万全じゃない・・・今の自分じゃ力が及ばない・・・あれこれ理由をつけて尻込みする奴は一生結果を出せないってな。」

「ふむ・・・良い言葉だな。」

各自が各々異なる反応を示す中、冥夜は感慨深そうに同意していた。

「ああ、オレもそう思うよ。今お前達は何を考えてるのは分からないけれど、オレはお前達にこの言葉を胸に刻み込んでいて欲しいんだ。」

そうして武は話を終えて退出していくのだった。胸の内に秘めたる物を彼女達に僅かばかり託しながら・・・

「お前達はどうするんだ？」

武が退出してしばらく、静けさを打ち破って放たれたのはまりもからの言葉。

「大尉はお前達なら必ず合格出来ると信じたんだ。此処で万が一でも不合格になってみる、それは大尉の顔に泥を塗ることになる。」

それを聞いて皆が齒をくいしばる。まりもはそんな様子を満足げに眺めつつ、発破をかける。

「お前達が報いる方法は唯一つ。総合戦闘技術評価演習に合格して戦術機過程に移ることだ、いいな!？」

「ハッ!」「ハッ!」

一斉に力強い敬礼を答えてみせる。その瞳も揺れることはなくただまりもを、その先にある物を見据えていたのだった。

退出した武は真那、唯依と合流していた。夕呼に呼ばれておりA・O1との顔合わせをするとか。

「成る程・・・先程の防衛基準態勢2はそう思った思惑があったの

か。」

機密ブロックなので道すがら抜き打ち訓練についての詳細を話していたのだった。真那はそれが前の世界で起きたBETA横浜基地襲撃を予測してのものだと直ぐ様思い至ったが、知っているのと怪しまれるところがあるので話を聞いて初めて納得したように答えた。

「・・・ですが大尉が仰ることは絶対防衛線が抜かれた状況を想定してのことです。間引き作戦が定期的に行われている昨今、BETAの大規模侵攻は極めて可能性が低いのではないですか？」

当初唯依は帝国軍では防ぎきれないと判断してのものかとも思ったが、武の人となりを見て即座に否定。横浜基地が襲撃されるような最悪の場合を考えてみてそういった結論を出したのだった。

「確かにそうですけど、BETAとの戦いにおいて『あり得ない』ことは無いと思うべきですよ。」

「それは！？・・・いえ、大尉の仰る通りです。」

自分では過信や油断といったものは無いと思っていた唯依だったが、まだまだ自分も甘いのだと諭された。しかもそれが年下である武によってなされたものだから、自らの不甲斐なさを恨めしく思う。

「えっと・・・篁中尉？」

「反省するのは良いが、過ぎたるのも考えものだぞ。」

「も、申し訳ありません・・・」

唯依が戻ってきたところで気を取り直して武は話を続ける。

「あくまで大規模侵攻は可能性の一つですからそんなに気構えなくとも良いですよ。それに実を言うと今回の訓練は大規模侵攻を想定したものじゃないんです。」

「・・・それは一体どういう意味なのですか？」

唯依の脳裏にはつい先日更迭された米国との繋がりを持っていた将兵が思い出され、彼らの残党共が横浜基地を襲ってくるのではないかと考える。

一方の真那も話が尋常ではない方向に進み始めたのに気づいて表情が険しいものとなる。

「正直こんなことは怠慢だと言われるのが筋なんですけど、篁中尉は此処に来て横浜基地の雰囲気はどう感じましたか？」

「基地の雰囲気ですか・・・」

「人目ありませんし、思ったことをありのままに言って下さい。」

明らかに躊躇した唯依に対して正直に話して欲しいと促すのだった。

「私は以前に最前線の基地に居たことがあるのですが・・・其所とは違い緩い雰囲気を感じました。」

それは一日過ごただけで感じたことだった。同じ日本に在りながらこの差は何なのだろうかと憤慨しそうにもなった。帝国の衛士達はその命に変えて護っている中何故のうのうといられるのか、と。

「月詠中尉は？・・・っと、聞かなくても大丈夫そうですね。」

「ああ、私も筆と同意見だ。此処には日本人も居るというのに嘆かわしい。」

「そうですね・・・日本は対BETAの最前線だということを分かってないんですよ。今回の目的は其処ら辺を変える為にやっただけです。」

とそんな事を宣っているが、武はこんなことでは全然変わらないと思っている。なのであくまでも今日の演習は第一段階だ。

「まあ他にも色々あるんですけど、恐らく幾つかはこの後説明があると思うので。」

簡単に今日のブリーフィングの趣旨を説明して、夕呼やヴァルキリースの待つ部屋まで伴うのだった。

武達がブリーフィングルームに入るとそこには既にヴァルキリーズ六人、夕呼、ピアティフが居たのだった。

「白銀、あたしを待たせるなんて良い度胸してるじゃない。」

「うげっ！勘弁してくださいよ。」

武と夕呼の間で一種のコミュニケーションを行うと、時間が勿体無いとばかりに本題に入るのだった。

「今日集まってもらったのは今後の事について話があったからよ。その関係で帝国とも関わりが出てくるから月詠中尉達にも此処に居てもらってるわ。」

恐らく何故斯衛の二人がこの部屋に居るのか口にはしないけれど、不思議に思っている人もいるだろうから付け加えた。

「まずは顔合わせね。二人とも入ってらっしゃい。」

夕呼が部屋の外で待っている者に声をかけると、その人物が姿を現した。内一人を認めると知代は息を呑んだ。

「鑑純夏です！タケルちゃんや霞ちゃんともどもよろしく願います！」

「社霞です。よろしく願います。」

元氣一杯に挨拶をする純夏に呆然としてしまう何人か。武は頭を抱えてしまふのだった。

「色々聞きたいことがあるでしょうけど、一先ずそれは後にしなさい。」

驚きを隠せない様子のヴァルキリーズや斯衛二人に対して夕呼が手を叩いて注目させる。

「鑑はある病気を患っていたんだけど、最近調子が良くなってきたからあんなたちに会わせることになったの。無いとは思いつけど鑑が倒れた時はあたしか白銀、もしくは社に伝えなさい。」

了解の旨を示すヴァルキリーズ。一方夕呼は真那や唯依にもお願いしていた。二人も異論が有る訳ではなく承知しましたと返していた。

「それと鑑と社は特別な人物だからあんなたちでしっかり護りなさいね。」

再び驚いた一同だが、此処に居るのは軍規というものをしっかりとわきまえている人物ばかりであるから、難なく受け入れていた。

「白銀、後は任せるわよ。」

「了解しました。」

退出してゆく夕呼に敬礼をするが、手をひらひらとさせて敬礼なん
か要らないわよ、と言って出ていったのだった。

「さてと。今日は抜き打ちの演習があつた訳ですが、これには事情
があります。それを皆さんに説明しようと思います。」

皆に樂にしてもらい話を始める武。その間に霞に手伝ってもらい資
料を用意するのだった。

「先程月詠中尉や篁中尉は聞いたと思いますが、今日の演習の目的
は横浜基地の緩んだ雰囲気改善するのが目的でした。」

ヴァルキリーズの皆も思うところがあるのかある程度は納得して頷
いていた。

「ですが、それはあくまで表向きに過ぎません。」

真剣な表情で前置きをしてから本当の目的を話始める。

「皆さんもおおよそ察していると思いますが、第四計画は既に達成
したと言っても良いでしょう。」

薄々とは感じていたことを肯定されて、武の口から悲願の達成を告
げられヴァルキリーズの面子は喜びを噛み締める。

最初は連隊規模であつたA - 01も今はたったの六人。多くの犠牲を払いながらも漸く此処まで来たと感無量な気持ちだった。

「幾つか判明した事実の中にBETAの侵攻目標として、此処横浜基地があるそうです。その事実が分かったからこそその演習だった訳です。ここまでで何か質問はありませんか？」

「白銀大尉、一つよろしいでしょうか？」

質問の有無を確かめたところ禰子が挙手をして許可を求める。

「近年では間引き作戦が上手くいくようになり、過去のような大規模侵攻は無かつたと思いますが？」

「そうですね。BETAの侵攻は所属するハイヴのBETAが飽和すると起こるもので、定期的な間引きが為されている間大規模侵攻の可能性はほぼ皆無でしょう。」

武の返答になれば何故？と疑問に思うヴァルキリーズの面子だったが、そんな中でみちるが発言をする。

「確かに今までは無かつたかもしれないが、これからもそうであるという証拠は何処にも無いんだぞ。そして白銀はそんな非常事態が起こりうるから我々に話したのだ。その意味を良く考える！」

みちるの言葉を受けて考えを切り替えるのだった。武はみちるに感

謝して話を続ける。

「伊隅大尉の仰る通り常に最悪の状況を頭に入れておくべきです。そして今から伝えるのは非公開の最新情報です。世界各国にもまだ知らされていない情報ですから他言無用にお願いします。」

そう断りを入れてから霞に頼んで映像を映し出してもらった。映像として映っていたのは現状確認されているどれよりも巨大なBET A。

「未確認大型種、通称母艦級です。」

これには度肝を抜かれてしまいみちるでさえ驚きを隠せないのだった。

「こいつは胎内に要塞級までも収容して地下深くを侵攻します。正確な積載量は不明ですが、その巨大さ故に下手をすれば大隊規模から旅団規模ではないかと考えられています。」

詳細が明らかになるにつれてその脅威度が分かる。母艦級には防衛線なんて関係無い、それこそ一気に攻めてくる可能性だってあるのだ。

予想を遥かに越えた情報だったが、直ぐ様冷静になり対策を考え始めるあたり指揮官として思うところがあるのだろう。

「ねっ、対抗策は無いのかな？」

若干暗い雰囲気になってしまったのを懸念して、佐奈が努めて明るく振る舞う。

「母艦級なんですが恐らくそれ自体は地表まで出てくることは余り無いと思われます。また出てきたとしてもBETAを排出する際には動きが止まるのでS-11を投げ込めば無力化出来ます。」

「ならば気をつけなければならぬことは母艦級の出現場所とタイミングですね。」

「宗像の言う通りだな。事前予測が出来れば対処は可能ということか。」

「地中を侵攻してくるんですよね？それなら振動を解析すれば分かるのではないですか？」

各自が与えられた情報を基にして思いついたことを述べていく内に、先程の暗い雰囲気から一転して表情が明るいものとなっていく。

「涼宮中尉の言う通りです。こいつが通った後には特定の振動波が観測されます。そして実際過去にあった地中からの侵攻のデータにも表れています。」

以前より未確認ではあるけれど一部では想像上のBETAとして考えられてはいたのだ。それを今回第四計画が正式なデータとして纏

めた。

「へー実際に姿を見たことはないけど、ずっと前から居たのね。BETAにおける縁の下の力持ちってどこかしら。」

にやりとしながら水月が下した評価に苦笑してしまう一同。

「おや、速瀬中尉は戦闘で性的欲求を満たすような人ですが上手いことを言いますね。『む〜な〜か〜た〜!!』」と、白銀大尉が言っていました。」

「白銀〜!!！」

「言ってますからねっ!!！」

いつものヴァルキリーズの雰囲気になってゆく。武はこの世界でも美冴にからかわれることになるのかと内心へこんでいた。

「現在副司令が振動波とは異なる母艦級の索敵方法を考案中ですから、それが実現されて公表されることになります。」

いくら振動波による母艦級の察知が可能だからといって、戦闘中となるとそれも万全とはいえない。戦場では常に砲弾が飛び交い様々な振動が発生しているのだから。

もし仮に有効な対策が無いまま母艦級を公表してしまうと世界中で混乱が起こるだろう。

そして実際に母艦級がその姿をさらけ出し、戦線が崩壊しそうになればA-L? 推進派は喜んでG弾を使うだろう。たった一発でも落とされてしまえば、もはや止める術はない。だからこそ今はまだ公表出来ないのだ。

「次にこれからのA-01の動きについてになります。」

演習の裏側について軽く説明を終えると、今日のブリーフィングのメインに触れる。如何に第四計画がその目的を達したといえども、足場をしっかりと固めなければいつまた第五計画が息を吹き返すか分からない。そういった意味ではこれからのA-01の活動というのは重要度が増している。

「まずはX-M3や不知火改の実戦証明です。そして実戦証明の場合は新潟、BETA相手となります。」

今日のブリーフィングで何度目か分なくなる程驚愕をしてしまう。

「白銀、それはBETAの行動を予測したというのか・・・?」

「色々と制約が付きますし、精度にも欠けた予測なんですけどね。それに今のところは甲21号だけしか予測出来ません。」

実際に純夏がリーディングを行ったところ、甲21号の反応炉が活発になっていたので侵攻があるのは間違いない。

「BETAの侵攻が確認されたらA-01は出撃する予定です。その際出来たらで構わないんですが篁中尉にも出撃して欲しいんです。」

「私が・・・ですか？」

突然話を振られ、意図が掴めない唯依。同行すると告げられたヴァルキリーズ達も戸惑っているのだった。それは今まで部隊での連携訓練を行ったことすらないからだ。

「恐らくですが、当日ヴァルキリーズは帝国軍を援護することになると思います。」

「成る程、国連軍に斯衛である私がついていれば現場でのいざこざを抑えられる訳ですね。」

少しずつ国連軍に対する嫌悪の感情は薄れつつはあるが、それでもまだ現場の衛士にしたら感情を抑えられるものではない。

しかし、そこに帝国が誇る斯衛の武御雷が居たらどうだろうか？少なくとも言葉にて拒絶をするような輩は居ないだろう。

「そういうことです。無理にという訳でなく、武御雷の使用許可が下りたらで構いませんから。」

武がこう言ったのには訳がある。本来武御雷というものは將軍の守護に使われるものである。故に国連軍等に追従して使う場合は事前

に許可が必要なのだ。

「その点は問題ありません。有事の際には横浜の指揮下に入るよう通達がありましたので。」

「それに殿下より武御雷の運用については我らに一任するとの仰せを承っている。白銀大尉が心配するような事は何もありません。」

唯依と真那により懸念していた事項を解消されたので、武は安心して協力を願えたのだった。

「それで伊隅大尉から見て、今のところ不知火改の慣熟はどれくらい出来てます？」

「そうだな・・・明日出撃になったとしても皆生き残れる程度には慣れただろう。」

他のメンバーを見てみると自信満々な表情でみちるの評価を肯定していた。早くBETA相手に試してみたかったところだろうか。

ヴァルキリーズがX M 3の実戦証明を為せば、世界中に広められるようになる。そうなれば今も何処かで戦っている名も知らない衛士の命を救えるかもしれない。多くの犠牲の元に成り立つヴァルキリーズだからこそ、X M 3がもたらすであろう光を待ち望んでいるのだ。

その想いは武にしても同じ。故に武は敢えてヴァルキリーズの面子

に願う。

「最後に・・・これからヴァルキリーズの皆さんは人類の大反抗における先鋒になると思われます。」

武の口から出た言葉を聞いていた誰もが今まで夢物語のようなBE TAに対する大反抗に、人類は漸く此処まで来たのだと感極まってくる。

「これからの戦場は人類の歴史上類を見ない程の激戦が待っています。だからこそこれからの作戦では誰一人として欠けることなく生きてください。ただ生き残って次へと繋げてください、そうすることです人類の勝利が近づきます。無理難題を言ってるのは理解してるつもりです、それでもオレは貴女達にお願いします。」

武が受け継いだ数々の想い、そのどれもが悲しくて辛くて心が引き裂かれそうなものだ。

死ぬな、そう言った武を見ていた一同は衝撃を受けることになる。人がどんどん死んで逝く時世だ、どれだけ難しいことなのかは分かりきっている。

しかし、それよりも惹き付けられたのは武の瞳だった。悲痛でありながらも未来への強い意志を秘めたその瞳に。

白銀武はどの世界においてもある意味『一人きり』だった。例えば信頼出来る仲間が居ても、秘密の事情を知る恩師が居ても、心が読める少女や幼馴染みが居ても変わらない事実。

そして武は、語弊があるかもしれないが、逃げることに弱音や泣き言を吐くことすら許されなかった。唯一人で苦境に立ち向かい、世界に抗ってきたのだ。

人に在らざる過去を持ち、それでも尚戦い続けるからこそ武はこの世界の救世主たる資格があるのだろう。

「大丈夫よ、武君。私は、私達は絶対に死んだりしないから。」

「・・・知代の言う通りだな。元々戦乙女の任務は過酷なものだ、さらに難度が増したとて我々は成し遂げねばならない。」

此処に居る戦乙女は全てまりもの教え子だ。武が言いたいことは分かっているだろう。どんなに惨めであつても生きて人としての強さを示す、それがまりもの教え。

「死力を尽くして任務に当たれ。生ある限り最善を尽くせ・・・
・・・這いつくばつても生き残れ。中隊復唱！」

「死力を尽くして任務に当たれ！生ある限り最善を尽くせ！
！這いつくばつても生き残れ！」

これが伊隅戦乙女の新しい隊規となるのだった。

「そ・れ・で、武君？何かお姉さんに言いたいことは無いのかしら？」

ブリーフィングを終えて純夏に猛烈な勢いで抱きついた知代は、凄みを感じさせる笑みを浮かべて武ににじり寄っていた。何故純夏が生きているのを教えてくれなかったのか、と。

純夏は純夏で知代に見えない場所でニヤニヤし、霞はどうしようかとオロオロしていた。

（くそっ！純夏の奴後でとっちめる　うおっ！）

「タ・ケ・ル・く・ん？」

武は、何も言わないことに焦れた知代の顔のすぐ目の前に引き寄せられる。いきなりの事態に若干頬が赤くなり、これには純夏が不満げな表情をするのだった。一方、純夏の無言の圧力を意に介さず知代は更に詰め寄る。

「・・・・・・・・」

「いやゝその・・・あの、まあ・・・」

「・・・はあ。もう良いわよ、こうして二人が生きててくれた。それだけで私は凄く嬉しいから。」

表情が緩むと、武と純夏の二人を抱き寄せる。二人は困りながらも顔を見合せてくすりと笑い、知代の抱擁を受け入れるのだった。

「ゴメンね、知代お姉ちゃん。」

「何か言えないような事情があるんでしょう？それより純夏ちゃんの方こそ病気にしかかっただけそうだけど大丈夫なの？」

「博士はあんな風に言ってたけど、もう全然平気だよ」

そんなやりとりを武は心苦しく見つめていた。それは純夏が分類上では既に人間ではないからだ。

武だけならそのような事を気にすることはない。しかし他の者はどうだろうか？皆の性格は良く理解しているため、事実を知ったとて態度を変えることはまずないだろう。けれども万が一、万が一のことを考えるとこれで良かったのが分からなくなる。

「・・・白銀さん、大丈夫です。」

いつの間にか側まで来ていた霞が手をぎゅっ、と握る。

「そう・・・だな。心配してくれてありがとな、霞。」

武が慣れた手つきで霞の頭を撫でる様子を見た知代は感嘆するのだった。時間の流れを改めて思い知らされ、成長の過程を見ることが

出来なかった寂しさを感じている。

「手慣れてるね。武君もいつの間にかお兄さんになったんだね・
・あの頃はまだまだお子様だったのに・・・」

「そりゃあ・・・まあ、あの頃から五年ぐらい経ったんだし変わりはするだろ？」

「・・・でも女の子が集まってくるのは変わらないよ・・・」

ぼそりと放たれた言葉に武はそんなことないだろ、と答えるが、知代は相も変わらず鈍感なんだと再認識するのだった。

二人が言い合っているのを尻目に知代は霞と向き合う。

「霞ちゃんもよろしくね。」

「はい、よろしく願いします知代さん。」

Episode??

まだ起床ラッパも鳴る前の早朝、武は夕呼とともにBETA侵攻の一報が来るのを待っていた。

「もう少しですね・・・」

「知らない奴からしたら来ないのが良いんだろうけど、あたしたちからしたら今日侵攻がある方が都合が良いっていうのはおかしい話よね。」

矛盾しているのは分かっている。未来を知ってるためその通りにならない場合、今後のスケジュールを組み直さなければならなくなる。最悪凄乃皇が搬入されて調整が終わり、直ぐ様オリジナルハイヴ攻略というのもあり得るのだ。

武自身その事を良く理解している。いや、前回のループにおいて理解させられた。未来を知ることとはそれだけで有利かと思われるが、その実僅かな歪みで崩れさる不安定なものでもあるのだ。

深妙な面持ちで連絡を待つ二人。この星を奪還するための大事な第一歩で躓く訳にもいかない。

『副司令！帝国軍より入電、佐渡島よりBETA群の南下を確認したとのことです。』

「そう・・・あたしも司令室に向かうわ。それまでに状況を纏めて

おいてね、それと伊隅達にも出撃命令を。」

その知らせを受けてからは早かった。夕呼が答えている間に武は顔を持ち上げて退出してゆく。

「タケルッ！」

出撃の為に強化装備に着替えた武が向かっていると、背後から冥夜と真那が走ってきた。その後ろには千鶴、慧、壬姫、美琴もいたのだった。

「お前達・・・待機命令が出たんじゃないのか？」

彼女らが此処に居るとは予想もしてなかったので驚く。

「そなたが出撃すると月詠から聞いて急いで来たのだ。」

「待機命令のことなら大丈夫よ、神宮司軍曹から許可はちゃんと取ってあるわ。」

生真面目な千鶴らしく、事前にきちんと許可を取っておいたらしい。他のメンバーも口々に伝えたいことを述べてゆく。

「たけるさん・・・まだ私達はたけるさんの隣に立ってないですけど、次の時にはきちんと立ってみせますから。」

「王姫さんの言う通りだよ！タケルつてば変なところでおつちよこちよいなんだから気をつけてよ。」

「・・・そだね。白銀は危なっかしいから見えないとすごく心配。」

「美琴に彩峰、お前らな。」

言葉にはしないけれど、武は張り詰めていた自身の何かが解かれていくのを感じ、心の底で感謝していた。記憶にはあるけれど、今日がこの世界での初陣なのだ。知らず知らずの内に緊張していたのだろつ。

「タケル、例えこの身が離れていようと我らの心はそなたと共にある。」

「ああ・・・なんたつてオレ達は同じ小隊の仲間なんだからな。それにこんな所で躓いたりしたら人類を救うなんて出来ない・・・んうっ！？」

武の話に割って入るが如く、慧ががっしりと抱きついて唇を合わせる。抱擁とか生易しいものではなく、もう武の背筋が反るほどのものだつた。

「ん・・・ふう、ごちそうさま。」

「あ、あ、彩峰えー！！何してんのよっ！！」

「何って・・・キス？」

いきなりの行動に驚いた一同の中千鶴が抗議の声をあげるのだが、相手の慧はのりくらりとして追及をかわす。そして驚きから立ち直った彼女らも負けじと行動に移すのだった。

「慧さんズルい！ボクもタケルにキスするー！」

「はわわ・・・わ、私もたけるさんに・・・」

「そなたら、人前で其の様なことをするでない・・・くっ、ええいこうなったら私もゆくぞ！」

「冥夜まで！？ああもう、こうなったら私もしてやるわよ！」

「お前ら、ちよつとは落ち着けーっ！！」

離れていても心だけは共にありたい、そんな願いを込めてのものだったのだが、慧を発端として有哉無哉になる。結局武は全員から激しい見送りをされることになったのだった。その光景を見ていた真那は呆れていたのだが、これも武達の強さなのか・・・と遠い目をしていた。

最後は真面目に敬礼をされて送り出された武はヴァルキリーズ、唯依と合流して支援車両にて北関東絶対防衛線へと向かっていた。

「涼宮、状況はどうなっている？」

『いくつかの戦線でBETA群をロストしています。それに加えて部隊が壊滅したそうですが、被害自体は低く抑えられているようです。』

みちるはデータリンクを用いて情報を集めている遙の報告に眉をひそめる。事前に警告がなされていたとはいえ自分達ですら、近々BETAの侵攻があることが半信半疑だった。しかし、こうして実際に侵攻があり損害を少しでも抑えられたのだから十分な成果だ。

対BETAの歴史を紐解くと分かるように、戦場で人類側の部隊が壊滅するのはほぼ必須。寧ろ全滅しないようにするのでさえ難しいことなのだ。

それを考えると、今回のBETA侵攻における現在の損害は少ないと言えるだろう。かといって防衛線を抜かれるのは戴けないのだが。

「涼宮中尉、援軍の方はどうなっていますか？」

『既に出撃したそうです。2次防衛線突破は免れそうにないですが、絶対防衛線で予想される戦闘には間に合うとのことですよ。』

武は2001年11月11日のBETAの行動を基に頭の中でシミュレートしつつ状況を整理する。

恐らくというか、十中八九BETAの目標は横浜基地。ならば武達はその予想される進路に向かえばよい。帝国軍にもその事を伝えることが出来るなら良いのだが、万が一の事態も考えられるため敢えて何も干渉しないのだった。

「白銀、一応先任大尉は私なのだが今までを考えるとお前の方が機密に深く関わっている。故に指揮官を委譲した方が良いのか？」

みちるは、今後の活動についての指針を夕呼からではなく武から聞いたという事実を踏まえて、明らかに武に与えられている情報の機密レベルが高いのでそう進言した。

「いえ、指揮は伊隅大尉にお願いします。オレ自身指揮官経験は無いに等しいし、階級にしても開発に寄与するところが大きいんで。」

実際は夕呼の独断によるものなのだが、武は後付けで理由を考えていた。ある程度は階級が高くないと意見が通らないという弊害が生じてしまうし、逆に高過ぎると若さ故に怪しまれてしまいかえって逆効果になる。それを考えると大尉というのは丁度良い。

ヴァルキリーズと唯依は武の説明に納得して了解してくれた。そんな中、一人だけむすつとしていた人物が居た。

「速瀬中尉、階級が低いからといって余り妬まない方がよろしいの

では？『むゝなゝかゝたゝゝっ！？』・・・と、嘉藤少尉が仰ってました。」

「佐々奈々々？」

「ふえええっ！！ボク、そんなこと言つて無いよっ！！」

すかさずヘッドロックをかけて白状させようとする。なんだかんだで和んでいるのであった。

「速瀬中尉、余りヴァルキリーズの恥を晒さないで下さい。そこに居る簗中尉が困惑しているではないですか。」

「えっ！？・・・いえ、そのようなことは・・・」

予想外に話を降られてしまった唯依はいきなりのことにびっくりしてしまふ。その生真面目な性格な為、美冴は今まで虎視眈々と狙っていたのだ。

「もう美冴さんったら、簗中尉が困つてしまわれているじゃありませんか。」

「簗中尉も宗像の言うことは余り気にしないで軽く受け流してね。」

はあ・・・と珍しく要領を得ない返事をする唯依。そんな中すぐ近くでは佐奈が水月から逃れようともがいていた。暴れる水月をみちるが叱って止めて、それから作戦行動についての話があったのだった。

基本的にはエレメントを組み合わせで2小隊で行動を行う。武&mp;唯依とみちる&mp;知代でA小隊、水月&mp;佐奈と美冴&mp;禰子がB小隊。

まず唯依とエレメントを組むのが武となったのはある意味当然である。武はヴァルキリーズと唯依のどちらにもXＭ3の教導を行っておりある程度なら合わせられるため。

次に組み合わせるエレメントについてだが、シミュレーターではあるけれど武の援護として知代の適性が高かったのだあという組み合わせとなつたのだ。

知代が武の性格等を熟知しているためであつたけれど、組み合わせが伝えられたのがきっかけとなつて美冴にからかわれたのは当たり前といえよう。

銃撃　突撃砲より銃声が鳴り響く度に射線上に位置する異形の物が、その身を挽き肉と化していく。しかし、挽き肉となつたその向こうから次々と押し寄せる如く流れが途絶えることはない。

「ちつ、こつちに流れてきてるBETAが多すぎるな。こりゃどっかがやらかしたか？」

「クロウ１よりクロウ３。無駄口を叩く前よりもさっさとトリガーを引きなさい。弾幕が薄くなってるわよ？」

現状に舌打ちをしていると部隊の隊長よりお達しの通信が入る。呆れた物言いをするあたりクロウ３がこういう事になるのはよくあることのようなだ。現に他の隊員達にもちらほらと笑いが見受けられる。慣れた扱いとはいえ、クロウ３は流石に罰の悪い表情をして応じるのだった。

「クロウ３よりクロウ１。まあ、これが性分なんで勘弁してください。」

「はあ・・・とりあえず帰ったらトイレ掃除一週間は受けてもらうわよ。」

そりゃないぜ！と上がる声に再び沸き起こる笑いの渦。クロウ１はこの危地にあっても戦意は衰えることなく冗句を吐く余裕まである自らの部隊に対して、隊員にばれない様に小さく笑う。

クロウ３、彼が居て本当によかったと思う。訓練生時代からの長い付き合いになるが今までにも彼に助けられたことはよくあった。何かと中心に居ることが多いクロウ３は、間違いなく精神的な支えとなっているのだ。

そんな事を考えていたが、途中で頭から振り払う。このような事を考えるなんて、まるで今日此処で死ぬようなものではないか。少なくともクロウ３にトイレ掃除の罰を受けさせなければならぬのだ、弱気ではいけないと今一度気持ちを新たにすする。

「クロウ１よりHQ、そろそろ弾数も危うくなってきた。至急増援と補給の手筈を頼む！」

BETAが途切れたのを見計らいHQに通信を入れる。まだまだ携行弾数的には戦えるが、予想されていたよりもBETAの数が多い。このまま戦い続けられれば消耗するのは道理。

『HQよりクロウ１、現在そちらに国連軍と斯衛軍が増援として向かっている。尚、補給に関しては追って指示を伝える。』

「クロウ１、了解。」

（国連と斯衛が・・・だと？やはりあの噂は本当だったのか・・・？）

つい先日、帝国内で一斉に検挙されるという大きな事態が発生した。その中には彼女の上司も含まれていたのだ。現場に流れる噂では検挙されたのは裏で米国と繋がりを持っていたと言われている。そして一斉検挙には横浜も絡んでいると。

（そして今までは蔑ろとされてきた殿下に、少しずつではあるけれど実権が戻りつつある。しかし・・・）

噂にはまだ続きがあるのだ。今度は裏で横浜が殿下に何かをしている、自分達に都合が良いように仕向けている、と。それに夕呼の悪名もあってかなりの数の人間がその噂を信じているのだ。

（しかし、何故なんだ？彼らにとってそれほど利があるとは思えない。むしろ今までの方が彼らにとってはやり易かったはずだ・・・）
国連軍を米国同様に見なすのなら、將軍を傀儡としていた政権の方が都合が良いと思われるので尚更混乱するのだった。

（こうなったら実際に見極めるしかないのか・・・？）

途切れていたBETAの姿を目にすると、再び気持ちを切り替えてゆく。雑念は捨てて今はただ一振りの刀となるがために。

「クロウ1より各機、斯衛と国連軍の救援が来るそうだ！それまで持ちこたえてみせろ！」

「はっ！腰抜けの国連なんか来ても足手まといになるだけだろうがっ！」

「斯衛も居るということはやはり・・・！奴らだけ我らを愚弄するつもりなのだっ！」

案の定黒い感情を露にする。特に隊員の中でも若い連中が顕著であった。クロウ1自身もまだ二十代の半ばになるぐらいなのだが、如何せんBETAとの戦いにおいて人命の損失というのは大きかった。何せ二十歳になる前に実戦に出る世界だ。どうしても若くないと見られてしまう。

何かに対し感情を昂らせて戦うのも一つの方法だが、冷静さに欠如するものもよろしくない。クロウ１は自らの経験を活かして若者を導くのだった。

「無駄口を叩くのもいいが、まずはきちんとこの戦いを生き残れよ！」

「……了解っ！！」「……」

唱和すると同時に前衛の機体の主機が唸りを上げて出力を引き出す。そして後衛からの援護を受けてBETAの波を切り裂く。

「はああああっ！！」

前衛が長刀で要撃級を切り捨てる。BETAの集団の最中に居るため次々と襲いかかってくるが、前衛に近づく要撃級や戦車級は後衛からの援護射撃によって片っ端から肉片と変えられる。

「各機、光線級に注意しろ！確認したらすぐさま排除するんだ！」

「気をつけるよどこかであの目玉がキョロキョロしながら視てるかもしれないからな。」

「……了解っ！！」「……」

今はまだこの場において光線級が確認されておらず、絶対にレーザー照射が無いとはいえないがそれでも少し高度が取れるため戦い易いので有利に運べたのだった。

「クロウ3よりクロウ1、ちょっといいか？」

「今は戦闘中よ、勝手に秘匿回線なんか使ってどうしたの？」

「あゝすまん、けどどうしてもはつきりさせときたい事があるんでな。ま、勘弁してくれや。」

戦闘中ということもあり真面目な表情ではあるのだが、いつになく其処に陰しさを見たためにこれ以上追及することなく話を促すのだった。

「それで話は？」

「ああ、増援の国連についてだよ。俺とお前の間だけでもはつきりさせときたいなって。」

話というのは先程リーダーにも映った増援予定の国連についてだった。もう随分と近づいているようでこのままだと後二、三分もしない内に到着するだろう。

「実際問題、お前はと思う？」

「そうね、正直おかしな話だとは思っわ。だって横浜に利がそれほど無いじゃない。」

「だよな。けど横浜に居るのはあの女狐だぜ？」

それを聞いて少し苦笑いして思い直す。かの帝国きつての天才のことだ、凡人には及びもつかない事を狙っているのかもしれない。

「それは・・・そうかもしれないわね。」

「まあな。そこら辺をちよつとお前に聞きたかったただけだ。あんまし深読みすんなよ?」

自身の性格をよく知っていると思う。以前より言われていたのだが、隊長となつてからは深読みするのが酷くなつたそうだ。指摘され落ち込むこともあつたけれど、隊長だからそんなくらいでいいとも言われて慰められたりもしたのだった。

「それにあんまし悪い方向にはならないと思うぜ? 噂にしろ妬む誰かさんが悪戯で流したにすぎないだろうしな。」

「それはまたどうして?」

訊ねた問いに関して即座にクロウ3は勘だ、と答えるのだった。どちらからともなく二人でひとしきり笑うと、再び気を引き締める。

「各機警戒を! 帝国軍人としての誇りに懸けても国連軍なんかに無様を見せるなよ!」

「『『『『『了解!』』』』』」

各機が小隊毎に散らばり周辺の警戒を始める。それを見てクロウ1は今日の戦闘も何とかなりそうだとため息を吐くのだった。既に増援はそこまで来ているし、各方面においても殲滅の報告が上がってきているので時間の問題だろう。

事実だけを鑑みて気を抜いたつもりはなかった。けれども無情にも思われる程BETAは一瞬の間をついたのであった。

「クロウ1！避けるおおっ！！」

・第一種光線属種照射危険地帯・

(なっ・・・！？)

表示がなされるとほぼ同時にクロウ1は見つけてしまった。何故か一匹だけ光線級がはぐれていたのを。そしてその不気味な目玉と自らの視線が合ってしまったのを。

時がゆつくりと流れるように感じられた。無情にも目玉が発振して、開戦以来人類をどん底にまで叩き落とした魔の光が放たれようとしていた。強力且つ正確無比なレーザー、それを防ぐ術は人類に無い。避けるにしろ光線級を叩くにしろ既に遅すぎた。

クロウ3が必死に叫ぶ姿が目に入る。表情は彼らしくもなく切羽詰まったものであった。彼の機体が向かってきているが到底間に合うものではない。それでも、動かさずにはいらなかったのだ。

（今まで・・・ありがとう・・・）

そう想いを託して今まさに光に呑み込まれようとしていた。後は目を瞑り先に九段へと向かった仲間の所へ向かうはずだった。

（・・・？）

いつまで経っても訪れない死、不思議に思ったクロウ１はゆつくりと目を開ける。

「死力を尽くして任務にあたれ。生ある限り最善を尽くせ。這いつくばってでも生き残れ」

「ま、これはあたし達の隊規だから押し付けるつもりはないんだけど？流石に目の前で諦められるのも困るのよね」

聞き慣れない声を耳にする傍ら、見開いた目を目の前の光景から離せなくなった。そこには鋭利に輝く白銀があつたのだった。

（各部正常、問題はみられないと。流石にびびった）

シミュレーターで防げると分かっていたものの、初めて実戦で使うことにちよっぴり腰が抜けそうになったのは秘密だ。その間にも、はぐれ光線級に対して過剰にも思える程の銃弾が撃ち込まれ、見るも無惨な姿へと変えられたのだった。

「もう！いきなり飛び出して、しかも光線級との射線上に割り込むなんて・・・心配したじゃない！」

無事だから良いものを、万が一の時を考えると小言の一つや二つ言いたい知代であつた。そんな小姑と嫁の関係のようなりとりを、ニヤニヤしながらヴァルキリーズは聞いていたのだった。

「嘘だろ・・・レーザーを防ぎやがった・・・」

「おい、誰でもいいから俺の頬を引っ張ってくれ。夢じゃねえよな？」

呑気なヴァルキリーズの裏方、レーザーを防ぎきった飛鳥を驚きを隠せない面持ちで見つめる。かつて人類を劣勢に立たせた脅威を打ち破った瞬間。

驚きからくる茫然自失による意識の空白、戦場においてはあるまじき行為だがクロウ1は部下を叱る事が出来ずにいた。否、自身でさえ未だに驚愕から立ち直れないでいたのだった。

「ヴァルキリー1よりクロウ1、遅くなってすまない。これより我等が援護に入るから今の内に順次補給を。」

「あ・・・クロウ1了解。援護感謝する。クロウ1よりクロウ各機、第二小隊より逐次補給に入る、ばやばやするなよ！」

通信を受けてようやく意識が戻ってきたクロウ１は、先程までの自分と同じような状態であった部下を叱咤して急がせる。

まだぎこちないなりに補給を行う部下達には、ヴァルキリーズが到着するまでにあつた国連に対する嫌悪感は吹き飛んでしまつていた。そんな様子を横目にクロウ１は山吹の武御雷の側に立つ見慣れぬ白銀の機体に礼を言うべく通信を入れる。

「貴官のおかげで助かったよ、礼を言わせてくれ。」

「いえ・・・たまたま手が届いただけです。それに戦場ではお互いに助け合うものですから。」

（な・・・！？若い！！）

映し出された未知の機体の衛士を見て、どのような者が乗っているのかあれこれ想像したのと全く異なっているのに更なる驚きを得た。

「・・・？どうしました？」

「いや失礼した。貴官がその、余りにも若かつたものだからな。」

「あゝ確かにまだまだ若造ですからね。結構よく言われますよ。」

気分を害するかと思いきや、あつさりとした受け答えで笑って流された。

（正直、見た目通りの年とは思えないわね・・・）

武ほどの年齢なら普通は新兵上がりかそこらであるはずなのに、クロー１は僅かな会話の中であたかもベテランではないかと錯覚した。

『ヴァルキリーマムより各機、新たなBETA群が接近。加えて要塞級8光線級10が確認されています。』

「ヴァルキリー1（伊隅）了解。」

が、そうしている間にもBETAの接近が告げられる。

「ヴァルキリー1（伊隅）よりヴァルキリー2（速瀬）、ここが腕の見せどころだ。光線級のスポットライトを独り占めにしていこい！」

「ヴァルキリー2（速瀬）了解！」

口元に獰猛な笑みを浮かべてBETAの奥に位置する要塞を見定める水月。

「速瀬中尉は戦闘で性的快感を得るものだばかり思っていました、まさか視られても興奮するとは思いませんでしたよ。」

相も変わらず軽口を叩く美冴。他の隊員はまたいつものやりとりが始まったと既に流して迎撃準備を整える。

「エアリアル1（白銀）よりヴァルキリー2（速瀬）、こっちで穴を開けますからよろしくお願いします。」

飛鳥を集団の先頭に立たせつつ、左肩のマウントに取りつけられた電磁投射砲を構える。

砲弾に36mを用いることで一先ずダウンサイズ化したものであり、マウントに格納時は砲身を折り畳むことによって高機動を妨げることはないようになっていく。

突撃前衛でも扱えなくなってしまう代わりに、折り畳み式にしたことでどうしても耐久性に欠けるのではないかという問題もある。それでも今までの電磁投射砲と比べると十分実戦で使えるようになっていくのだった。

さらに今飛鳥が装備している電磁投射砲は新型の動力源を用いたものである。それゆえG元素を使わないために、BETAを引き寄せてしまうこともなくなっているのだった。

「砲身展開完了、各部門問題無し。機体からの電力供給を確認。砲弾装填・・・良しっ！」

発射までのシーケンスを行う武。その全てを終えると、飛鳥の左脇に抱えられた電磁投射砲がゆっくりと唸り、産声を上げるその時を今か今かと待つ。

「エアリアル1（白銀）FOX1！」

唸りが一瞬止まったかと思うと次の瞬間には、砲身の先端部より爆

音と閃光を伴って発射される。

圧倒的な速さで撃ち出された砲弾によって迫り来るBETAは蹂躪される。BETAの中でも最硬度を誇る突撃級を真正面から36mが貫通することはなかったが、それでも一発二発と受けていくたびに倒れてゆく。小型種はそれほど電磁投射砲の被害を受けていなかったが、突撃級の横転に巻き込まれて無惨にも潰れていた。

要塞までの道を切り開くと武はすぐさま射線をずらして、細い一本の道をより大きくしようとする。

（大尉は冷静だな・・・私などは電磁投射砲の威力に浮かれて状況判断を見誤ってしまったというのに）

シミュレーターで電磁投射砲を用いてのハイヴ内戦闘を思い出す。

あの時は初めてその威力を目の当たりにして舞い上がったがために、偽装横坑の奇襲を受けて部隊は壊滅という結果に終わった。

あの時の教訓があったからこそ今は冷静にいられる唯依であった。と同時に傍らに立つ上官の凄さを思い知らされていた。

武が存外に冷静でいられたのは、勿論前の世界で荷電粒子砲を見ていたためだ。ハイヴのモニUMENTを一撃で吹き飛ばす威力に比べれば、どうしても見劣りしてしまうだろう。

「行くわよ佐奈！」

「りょくかい！」

電磁投射砲の掃射が終わると同時に飛び出す二つの機影。威力に見惚れることなく自身の活躍の場をただ虎視眈々と待っていた水月とついでに佐奈。

「エリアル1（白銀）よりエリアル2（篁）、お待ちせしました。オレ達も突っ込みます！」

「了解！」

それに遅れて飛び出す白銀と山吹の機影。後衛もサポートをすべく四人の後を旋回して追おうとするBETAを狙い撃つ。

（あゝもう！なんで白銀にもあんな機体があるのよゝゝゝっ！）

視界の片隅で戦う武にちらっと目を向けると、ほぼ即席にしては良い連携を取っている。機体性能も相まってエレメントでどんどん撃破数を増やしつつある。

悔しいけれど流石はXM3の開発者といったところか、まだ今は勝てないと水月は認めていた。それでもその差は急速に迫りつつあり、同条件下なら後少しというところまで来ている。

YF-23が与えられることもあって武に勝つのも、もうすぐだと思気込んでいたので飛鳥の存在に崖から突き落とされたようだった。

（あれもこれも全っ部白銀が悪いのよっ！！）

むしゃくしゃした気持ちを目の前の化け物と隣と同僚にぶつけることにする。

「佐奈っ！どっちが多く光線級を狩るか勝負よっ！負けた方は勿論罰ゲームね。」

「えゝゝっ！？普通にやろうよゝゝ！」

言うが早いかどうかで水月是要塞級に突撃する。佐奈はそんな水月を非難がましく見るのだが、肝心の相手がもう既にBETAに夢中になっており声が届くことはなかった。

「そんなもの当たらないわよっ！」

尾節から伸びてきた触手の先端にある衝角をかわして一気に懐へと入り込む。そしてそのまま弱点である三胴構造部の結合部を飛び上がりながら長刀で切り抜ける。

高周波を用いられた長刀は切れ味、耐久性のどちらにおいても従来の物より性能に優れている。さらに止めとして佐奈が至近距離から120mをぶちこんだことで、呆気なく要塞級は沈むのだった。

- レーザー照射警報 -

要塞級がいなくなったことにより射線が確保され水月は十もの光線級に狙われることとなる。その内大半は援護として打ち上げられた

A.L弾に向けてレーザーを放ったけれど、水月もまたレーザーを向けられる。

「こっつ……んのおおお!!」

照射に合わせて先行入力していたコンボを使い、レーザー被膜が防いでる内に全力噴射降下。空撃ちさせることに成功し、光線級は照射のインターバルで無防備となる。

そこへ二機の不知火改が飛び込み、暴虐の嵐へと巻き込んだ。

「……………これで6つ！佐奈、この勝負あたしの勝ちよっ!!」

「う~~~~」

「速瀬中尉、相変わらずの猛獣ぶりですね。」

「美冴さんったら……ですが速瀬中尉、今のままでは援護し辛いので早めに戻ってきてもらえませんか？」

「うつ……分かったわよ。それと宗像！あんたは後で覚えてなさいよ!」

隣で涙目になっている佐奈を急かしながら、溜まっていた鬱憤を晴らすべくさらなる戦場を求めて水月の駆る不知火改は疾走する。

BETAの集団の中で流れるような挙動を、時には飛び上がり三次元的な機動を用いて一機たりとも損傷することなく戦い続ける国連カラーと白銀、山吹の機体に帝国軍人は目を奪われるのだった。

「すげえ………不知火に、いや戦術機にあんな機動が出来るのか……？」

「おい……見間違いじゃなければ、さっきレーザーをかわしてたよな？」

「くそっ……！誰だよ国連の連中が腰抜けて言ったのはっ！」

次々と吐き出される部下の小言を聞きながら、本当に驚かされてばかりだと思う。

（国連で不知火を使っているのにも驚いたけれど、あのような機動が出来るものなのかしら？）

細部で結構異なる点が多いけれども基本的には不知火なのだ。正直多少の改修だけで立体的且つ滑らかな動作は出来ないだろう。

国連カラーの不知火の衛士の腕前自体も良いと思うが、それだけでここまで変わるとは思えないクロウ1。

（彼の言った通り、噂は余り当てには出来ないわね……）

同僚の勘も馬鹿にできないものだ、薄く笑いを浮かべる。国連の

衛士に出来て、自分達帝国の衛士に出来ない道理はないのだ。衛士としての本能を刺激される。

（そのためにも今日此処を生き抜かないと・・・！！）

カメラでデータは嫌という程取つてある。ならば、後は帰還してからそれを基にして基礎を築き上げるだけだ。

「クロウ1より各機、何を腑抜けているんだ！国連の衛士に手柄を全部横取りされる前にしっかりと責務を果たせっ！」

「了解！」「了解！」「了解！」

それからBETA殲滅が確認されたのは、ほどなくしてのことだった。

Episode?? (後書き)

えーこれからの投稿予定なんです、リアが少々忙しくなりそうなので間隔が空くようになると思われます。

勝手な都合なのですが、ご配慮をよろしくお願いしますm(_____)m

それから今後の内容についてなんですが、欧州勢西独逸ツエルベスを出したいな～と思ってます（あくまで予定の一つとしてなので変更される可能性があります）

そこでTHE EURO FRONTって2001年ではどうなってるんですかね？十周年記念のPVについても詳しく教えてくれる人がいたら幸いです？

あれってまだ八話までしか無かったよね？笑

Episode??

BETA迎撃戦を終えた翌日、帝都では沢山の人だかりが出来ていた。多くは難民として生まれた土地を追われこの帝都に逃れてきた者達だが、そこらかしこに軍服を着た若者も紛れていた。

「我が親愛なる日本国民の皆様。長きに渡る戦乱により多大な苦難を強いていること・・・誠に申し訳なく思います。」

帝都城より彼らの視界に姿を現したのは悠陽。誰もがその姿を息を呑んでじっと見守っている。

「未だにこの戦乱の終わりは見えず、皆様の心には大きな不安が波となって押し寄せてることでしょう。ですが、だからこそわたくしたちは今という時代を強靱な精神をもって生き抜かなければ、乗り越えなければなりません。」

カリスマ・・・悠陽の態度はまさにその現れだろう。話を聞く全ての人を圧倒する高貴なる者の風格。生まれながらにして持った才覚であり、また長年に及ぶ将軍として在るべきための教育の成果でもある。

「今わたくしたちがこうして在るのは、ひとえに我らが怨敵との戦いにおいて散っていった多くの先達があるからなのです。その志を軽んずることはありません。あつてはならないのです。」

宣う悠陽の脳裏に描かれるのは光州作戦の悲劇、前の世界でのクーデターだ。どちらも後世で良くは語り継がれない、むしろ悪く言われるものだろう。けれども、自らを鬼にして事を為した彼らの志だけは心に刻みつける。それが散るべくして逝った者への手向け。

「今こそ日本は一丸となり勝利と平和を勝ち取るため、共に苦難を乗り越えてゆきましょう。わたくしは数多の英霊の意志を背負い歩み続けましょう・・・未だ我が身は至らないことも多々ありますが、どうか皆様のお力を今しばらくお貸してください。」

言葉と共に悠陽がその頭を垂れて演説を終えたのだった。

帝都守備連隊詰め所

「これでこの国は在るべき姿へと戻るのだろうか・・・」

「何を言っかつ！まだ横浜が残っているのだぞっ！あの女狐めが何かしら企んでいるのは明白ではないかつ！」

「うむ、先の迎撃戦においても国連と斯衛が共に戦場にあったとの報告も来ている。まず間違いないであろうな。」

「それに榊のこともある。まだ油断は出来んぞ・・・」

日本の未来を憂いていた彼ら独自の会合は紛糾の最中であつた。その原因は先に行われた征威大將軍の復権であり、またそれに伴い裏で暗躍していた者達であつた。

彼らが売国奴としてマークしていた連中の大半は、復権と同時に何らかの処分を受けた。しかし、国賊の筆頭と思われていた現首相榊はお咎め無しで今も職についている。

加えて横浜絡みの噂もあつて、殿下がお飾りの状況は変わっていないのではないか？というのが今日研究会に集まつた者達の共通の見解だ。

「沙霧大尉はどう考えてるんだ？是非ともあんたの意見を聞かせて欲しい。」

会合の場が荒れてきたのを危ぶんで、一人の青年將校が今日これまでに沈黙を保つてきた彼に意見を求める。するとあれだけ紛糾していたにも関わらず、全員が一斉に主格たる沙霧に黙つて目を向けるのだった。

「……… 同士諸君、我々の目的は殿下が蔑ろにされていた状況を打破することであつた。そういった意味では殿下が復権なされた現状を喜ぶべきだろう。」

瞠目して静かに語り始める沙霧。内容が現在を許容するような事なのですかさず反論の声が上がるうとするけれど、片手を挙げてそれを抑えさせる。

「同士諸君が思つのももつともだろう。しかし、まずは思い出してみて欲しい。復権以来これまで殿下がなされてきた事の数々を。」

言われてみれば、と隣の人物と目線を合わせて不思議に思う一同。激務に追われながらも悠陽は自ら行動するようになった。そして、行動の目的として民に主点が置かれていたのだ。無論政に関わることなので、あくまでも以前の政治に比べればの話だ。

「諸君、我々には決起する大義名分が存在しないというのが分かったかどうか。故に私は見極めるためにも暫く様子見るべきだと提案する。」

彼らが夕呼や榊を糾弾すれば、世論はある程度の納得はするだろう。しかし実際に將軍が率先して国を治めている今、国民の大半は謀反を起こす彼らを將軍に弓引いた者達と見なしうる。

憂国の烈士である彼らだからこそ、その様な不名誉を受ける訳にはいかない。決起するには国のため、ひいては將軍のためでなければならぬのだ。

（やはり・・・一筋縄ではいかないか・・・）

十人十色、様々な感情が折り混じる会合を一人冷静な目付きで見つめる沙霧。悠陽本人より直接裏事情を少し知らされた分だけ、周りより余裕が持てているのだった。

「皆さん、少しばかりよろしいですか？」

物思いに耽り込む手前であつた沙霧を現に戻したのは、横に控えていた己の副官であつた。

「昨日、私の知人はBETA迎撃のため出撃をしていた際に国連軍の救援を受けたそうなのです。その一部始終を無理難題を押しつけて入手してもらいましたので皆さんにも見ていただきたいと思います。」

会合に参加していた全員にどよめきが起こる。それは沙霧も例外ではなかった。彼もまたそのような話を駒木から聞いていなかったのだ。

（駒木中尉、君は一体どうやって手に入れたというのだ？）

通常戦闘時の記録等は機密の部類に入る代物だ。故に沙霧は駒木が危ない橋を渡つたのでは？との危惧を抱いた。先の一斉検挙が取りなされて不安定な今、少しでも不審な動きを見せることで注意が向くのを嫌うのは当然であろう。

（ご安心を、どうやら裏で何かしらの取り決めがあつたようで、実際にはあの男経由で回ってきた物です。）

（そうか。ならばとりあえずは安心できるな・・・）

あの男、帝国城内省の鎧衣課長経由ということは、恐らくは殿下や

横浜の手回しがあつたのだと推測する。

悠陽が意図するのは十中八九横浜への嫌悪感の改善、それと日本でクーデターが起きる確率を減らそうということだろう。

（一見すると横浜に利が無いように思えるが、実際は事前に米国からの干渉を防ぐ予防線のためだろう。

国連の極秘計画、是非とも日本の手で成し遂げて欲しいものだ。）

胸中で一通りの納得を終えたところで、駒木が準備を終えた。一体どのような事になるのだろうかと期待していると、それは良い意味で裏切られたのだった。

「なんとっ！あのような動きが戦術機に出来たというのかっ！？」

「光線級の・・・あの正確無比なレーザーを・・・かわしただと・・・？」

「駒木中尉！これらは全て本当であるのかっ！？捏造された物だと思えないぞっ！？」

「残念ながら全て本当にあつた出来事です。」

「我には信じられないな・・・」

がたん、と机を鳴らしながら勢いよく立ち上がって質問をぶつけたのだが、駒木の冷静な対応で熱が冷めたかのように脱力して座り直

す。

帝都の守護を司る彼らは日本屈指の精鋭達であり、その乗機は帝国が誇る第三世代機の不知火である。

自らの腕に驕りがある訳ではないが、自分達は不知火を手足のよう
に扱えるとの自負を持っている。いや、持っていたと言っべきだろ
う。なぜ過去形なのか、それは国連の不知火の奇抜でありながらも
斬新な機動を見てしまったためである。

不知火に、いや戦術機という物に並々ならぬ程の訓練を行ってきた
からこそ分かる。映像にあつた機動は今までの概念を覆すもので、
彼らでは一生たどり着けないであろう領域だ。これまでの積み重ね
に満足して、上限を決めつけてしまったからなのだ。

故に彼らは今までの嫌悪の感情から憤る、誰もが成し遂げられなか
った事を成し遂げたことに悔しがる、そしてより一層の目指すべき
高みを示してくれたことに感謝する。

「詳細は不明ですが、恐らくは帝国にも利があるかと思われます。
なので、此処は座して待つべきかと。」

静まり返った場に通る駒木の声に対し、反論出来る者はこの中に居
なかった。

誰ともなく立ち上がり会合の場から出ていく中、沙霧は一人未だ座って難しい表情で考え事をしていた。

（・・・感情に振り回されて危ういな。私が言えた義理ではないが）
会合に出席していた連中を頭の中で思い浮かべる。思いがけない形で將軍が復権し、やり場を失った激情を発散することが出来ないために、少々冷静さを欠如している。そのような状態では誰その都合良く踊らされてしまうだろう。誰といえば、クーデターの影にあった者達のような。

沙霧自身、クーデターを起こそうとしていた時にも自身が何者かの意思によって動かされているのでは？と若干感じてはいた。それは自身の手腕によるものもあるけれど、クーデターの計画が上手く行き過ぎていたためだ。

（今は考えても仕方ないだろう。私に出来ることといえば日々精進することであり、彼らが暴挙に逸らないよう抑制することだな。）

そう考えて自らも退出しようとしたのだが、沙霧が行動に移す前に彼へと近づく人影があった。

「沙霧君、ちよつと時間を取らせてもいいかしら？」

「これは・・・九能少佐。別段構いませんが、どういったご用件でしょうか？」

沙霧が声をかけられたのは妙齡の女性。自身や沙霧の年齢を上回るはずなのに相変わらずそうとは思えない若々しい、と傍らに居た駒木は軽く嫉妬にも似た感情を覚えてしまふのだった。

九能楓、元々は武家の出身らしいが何事かあつて斯衛ではなく帝国軍に籍を置いている。少佐という階級にあることから分かるように本人は衛士としても指揮官としても十二分な能力を持っており、その麗美な容姿も相まって帝国軍内でも高い人気を誇っている。

「ねえ沙霧君、個人的に貴方は現在の状況をどう見てるの？」

「私個人としてですか？私としては今は動くべきでないと考えてます。」

「その理由を聞いてもいいかしら？」

「理由としては我らの大義名分が殆ど意味が無いということですね。」

「あら、さっきの過激な連中じゃないけど彼らが言つてたことは案外的外れでは無いと思うのだけど？」

意外だと言わんばかりに驚いた様子を見せるのだった。

「確かにそうでしょう。ですが、我らの同士の中にも少なくない数の売国奴がおり実際に拘束されました。国土を護るべき帝国の衛士に売国奴が居たという事実は、世論をより一層不安にさせています。」

それでも今のところなんとかなっているのは殿下が自ら立ち上がったとされているからでしょう。そのような状況で我らが謀叛等を起こせば、民の心の拠り所が失われる恐れがあるので現状維持をすべきかと思うのです。」

「・・・以前の沙霧君はどこか危ういところがあつたけれど、今は冷静に物事を捉えようとしているわね。」

目を細めてこちらを見透かすように見られることで試されていたかと感じた。恐らく彼女はここまで予想していたのだらう、だからこそ人が居なくなった状況で個人的に話しかけてきた。それはもしこの話、これからの話を第三者が聞いてしまえば暴走の恐れがあるからだ。

「正直に言つと私も沙霧君と同じ意見。付け加えるなら今の彼らは危ないわ。今まで溜め込んでいた怒りの感情の矛先を失って冷静さに欠けている。そんな状態でクーデターなんて、ただの暴徒に過ぎないわ。」

国を想うがため立ち上がろうとしていたのに、これでは本末転倒だろうと楓は冷たく切つて捨てる。

「・・・私などよりもやはり少佐が指揮を執るべきだったのではないかと思いますよ。」

もし自分が裏事情を知らなければ、ここまで冷静に物事を見極めようとしたであらうか？答えは、否だ。恐らく自分では流されてしまふだろうと思う。それなのに楓は物事を見極めて核心に近づいた。正直、自分の未熟さに自信が失くなる思いだ。

「またその話ね・・・以前にも言ったけど沙霧君がクーデター軍の頭となったからここまで来れたと私は思うわ。私じゃ無理だったはずよ。」

沙霧と楓、この二人は最後までどちらが主格になるのか争われた。といっても本人自体はお互いに相手に譲ろうとしていただけで、騒がしかったのは外野なのだが。

「別に男女で差別する訳ではないけど、こういうことは男がどしりと構えていた方が周りについてくると思うの。そして女がそれを影で支える。」

「以前聞いた時もそうでしたが、武家に生まれた武人とは思えない台詞ですね。」

「私は武人でもあるけど、女であることを捨ててないの。寧ろ女であることに感謝するわ。」

なんともこちらが少し赤面してしまうような魅力的な表情で片目を閉じてウインクしてみせたのだった。それは同性ですらも惹き付ける程妖艶さに満ちた仕草だったと、後に駒木は語っている。

沙霧との確認を終えて、楓は一人部屋の中で佇んでいた。その様子

は先程までの大人の女性といった感じとはかけはなれており、打ち捨てられ寂しさに泣いている少女のようであった。

思い立って常日頃から胸元に飾られているペンダントを取り外し蓋を開ける。中には一枚の写真が切り抜かれて収められていた。

「影行さん・・・武・・・」

そこに映っている在りし日の姿を指でなぞり、自身にとって最愛の夫と息子の名を呟くのだった。

Episode?? (後書き)

はい、大分間が空いたのですが待つていた方(居ないとは思いますが?) お待たせしましたm(_____)m

やゝ色々ハマつていたもんでして?そのせいか三ページ程はすぐ出来たのに気づけばここまで引つ張つてしまいました

次も気長に待つていて欲しいです(あ

さて話はがらつと変わりますがクロニクルズ2発売されましたね。

金が無くて今のところは買おうすらしてないんですけど、THE DAY AFTERの方で何やら武ちゃん?が出るらしいと聞きました(公開されていたOPでもそれっぽいの最後にあつたし・・・)

ここでネタバレ?というか考えていたことが一つあるのですが、実はこの作品中でも武ちゃんと飛鳥だけをオルタネイティブ?が発動した世界に移動してもらつて無双してもおうかな?なんて考えていたんですがorz

ユーロフロントの方もどうしようかな?とスパロボしながら考えている今日この頃です……………

E p i s o d e ? ?

新潟でのBETA迎撃を誰一人欠けることなく終えた翌日、武は戦闘時におけるBETAの行動について感じたことをまとめた報告書を夕呼に提出すべく彼女の部屋へと足を運んでいた。部隊だけの報告ならみちるが出しているはずだが、事情を知る者とそうでない者では物事に対する見方が異なってくる。故に武は横浜基地に帰還して雑務を早々に部屋へと閉じこもり報告書を仕上げていた。

机に向かって慣れない作業の途中、武が構ってくれないことに対して純夏達が文句を言うべく部屋に押し掛けて来た。彼女達には帰還後無事な顔を見せてはいたのだが、どうやらそれだけでは物足りなかつたらしい。かといって、むやみやたらに騒ぎに来た訳でも無かつた。はしゃぐ中、時折武のことを気遣わしげに見つめる視線があった。

記憶を継承しているとはいえ、初の実戦で武も知らず知らずの内に心労が蓄積されていた。その事に気づいていた彼女達は一致団結、武の気を紛らわそうとしていたのだ。武も何処と無く彼女達の様子から察し、また感謝して報告書を片手にしつつも彼女達との一時は、生きているということを改めて実感させられたのだった。

そうして精神的にリフレッシュした武は、戦闘してその後徹夜にも関わらず足軽に訪れていた。

「夕呼先生、入りますよー」

声をかけると同時に部屋の扉を開けるが、予想に反して中からの反応はない。

「参ったな・・・夕呼先生何処行っただろ」

「博士なら司令室に行かれましたよ」

入れ違いになったのか？と思い一度出直そうとすると、明かりが点いていないために真っ暗な部屋の奥から声をかけられ武はぎよっとする。

（このおっさん、鎧衣課長！？って、オレはこの人にまた気づかなかったのかよ！）

「初めまして、シロガネタケル君。私は微妙に怪しい者だ」

暗闇に浮かび上がったのは前の世界でも見たように帽子にトレンチコート姿の鎧衣。相も変わらず喰えない狸似であり、自己紹介の言葉も以前聞いたのと同じようなものだった。

「ああ、初めまして鎧衣課長。それより貴方がどうして此処に？」

「ふむ・・・感心しないな、シロガネタケル君。お前は何者だ！？とか、何故オレの名前を知っている！？をここで口にするのがお約束ではないかね？」

「言われてみればそっちを聞くのが先でしたね。気がつきませんでしたよ。それで、もう一度聞きますけどどのようなご用件で此処に？」

惚けて聞き返す武はこの後鎧衣がどんな行動をするか分かっていたため、油断することなくさりげなく身構えていたにも関わらず、気

がついたら間合いの内側に入り込まれていた。

「むがつ！いででででででで」

「ふむ・・・偽物にしては精巧に出来てるな」

鎧衣は武の頬つぺを摘み、力を入れて引っ張る。案外痛さを伴うそれを武は強引に振りほどき、赤くなった頬をさすりながら鎧衣との距離を取った。

「はっはっはっ・・・面白い男だな」

「面白いのはあんだだ！」

またやられてしまったことを嘆くも、目の前で笑う男にそう突っ込みを入れずにはいらなかった。残念ながら恨みを込めたジト目も何処吹く風のようにあしらわれたが。

（あー痛え。このおっさん絶対わざとだろ。そうとしか考えられない）

「はあ・・・それで帝国情報省の課長ともあろう方が一体どのようなご用件ですか？」

鎧衣はもうどうしようも無い、これは遺伝子レベルにまで達した病気みたいなものだと言明し武は改めて向き合ったのだが、その瞬間背筋が凍る思いをした。

「シロガネタケル・・・本物か？」

こちらの奥底まで見透かされそうな瞳。普段は流れに身を任せる柳のような男だが、こういった時折見せる表情は怖いと感じさせる。幾多の記憶やその実感を持つ今だからこそ、鎧衣の重圧というものを鮮明に感じ取ってしまうのだった。

実際には数秒単位の、だが武にはもつと長い時間にも思えるにらみ合いは第三者によって打ち切られる。

「勝手に人の部屋に入り込んだ挙げ句騒がしいことね。一体何の用があつて此処に居るのかしら？ 私は貴方が来るなんて一言も聞いてないわよ」

「これはこれは・・・香月博士。相変わらずお美しいお姿で何より。」

「聞き飽きた世辞なんかどうでもいいわよ。それより早く用件を言いなさい。でないと此処から追い出すわよ？」

「ハハハ・・・なに、最近あちこちでよく名前を聞く白銀武という人物に挨拶がてら自己紹介を」

その応えに目をキツくする夕呼に対し、変わらず飄々としている鎧衣。そんな女狐と狸の無言の睨み合いを傍らで見ている武に背後から抱きつくように霞が服を掴む。

「霞？」

「・・・・・・」

「やれやれ・・・随分嫌われたものだな。そんなに心配しなくても

大丈夫だよ、社霞ちゃん？」

（そういえば霞のリーディングで課長の思考は読めないんだっとな。確か関連性の無いことを意識の表層に浮かべることで肝心な考えを読めなくするだったか。だから霞にとって課長は怖い存在なのか・・・）

武の考えを肯定するよう、霞の手にさらに力が込められる。武はそんな霞を安心させるために手を握ってやると、ほっとしたのだろう背後で暖かい息が漏れる感じがした。

「・・・白銀。一応今すつごい緊迫した場面なんだけど。そんな状態でよくいちやついた雰囲気を作り出せるわね？」

（ヤバイ！夕呼先生マジでキレかかってる！それにあの手に持つてゐるの何処かで見た記憶があるぞ・・・）

ただでさえ鎧衣と対面して機嫌が悪くなっていた所へ、武は火に油を注いでしまった訳だ。夕呼が手に持っている物に関しては不確かな部分が大半なのだが、関連する記憶があまり良い物でないのは直感的に分かる。

「いやはや羨ましい限りだよ、シロガネタケル君。私はこうして社霞ちゃんと今まで何度も会っている訳だが、一向になついてくれないか？ どうすれば仲良くなれるか教えてくれないか？」

「・・・まずはそのフルネームで呼ぶ癖をなんとかするべきだと思いますよ」

空気を読まない二人に夕呼は呆れ、頭を抱えて重い溜め息を吐く。

鎧衣のおかげで怒りの矛先が逸れたのは良かったが、冗談でやっているのか本気なのか判断がつかない武はどうしても面と向かって感謝する気にはなれないのだった。

「・・・それで早く話に移ってくれないかしら？わざわざ出向いてまで話さなければならぬことがあるのでしょうか？」

「これは失礼。人類のため日夜研究に勤しむ博士の大切なお時間を割く訳にはいきませんな。なにせ・・・」

「私はさっさと本題に入れって言ってるのよ！」

バン、と机を叩きつけて再び怒りを露にする夕呼。その様子を見てた武は少し違和感を感じた。

（夕呼先生があそこまでキレるのも珍しいな。何か上手くいったないことでもあるんだろうか？）

そんな武の心配を他所に、ようやく鎧衣は本題に入るのであった。

「国連のユーコン基地で行われているプロミネンス計画はご存知でしょうか？今あそこでは各国の戦術機が集まって互いに競い合っており、そしてどうやらソ連の戦術機が高評価を出しているそうですよ。なんでも複座型の機体に乗る二人の衛士 능력のおかげとか。」

「次、興味無いわ。」

（確かプロミネンス計画には日本も参加するはずだったな。篁中尉も本来ならあっちに行く予定だったらしいけど・・・でも何でソ連の話が出てきたんだ？）

クーデターにしるXGの話にしる関わってくるのは米国のはずだ。事実前の世界ではその話が上がっていた。武は訳も分からないまま話の続きを黙って聞くのだった。

「一斉検挙と同時に殿下の復権が成されましたが、どうやら帝国軍の一部ではこれも博士の暗躍だと考えているようですね。中には不穏な動きを見せる者も居ます」

「そこまで分かっておきながら対処出来ないなんて諜報員としての面目丸潰れね」

「これは手厳しい。ですが中々難しいものでしてな、博士にプライドをへし折られた彼らもまた躍起になっているようでして。唯一の救いは中心的人物である沙霧大尉と九能少佐が抑えてくれていることでしょうか」

（そうか、沙霧大尉は上手くやってくれているんだな。それにしても九能少佐ってのは誰なんだ？ここでその名前が出てくるってことはクーデター側の人間だろうけど）

武はちらつと夕呼を覗き見た。鎧衣の話を聞きながらも難しい表情で考えを纏めているようだった。恐らくその脳裏では目まぐるしい程高速で情報を精査、統合していることだろう。

「・・・それで、本題は何なの？」

「おや、言いませんでしたかな？私はシロガネタケル君に挨拶しに来たのだと。おお、忘れてたよシロガネタケル君。お母君には無事であることを知らせていないのだろう？いかな、親の立場から言

わせてもらうつと、君のそれは実に悲しいことだよ」

「なっ・・・!？」

「ちよつと待ちなさい！今こいつの母がどうか言つたわよね！？以前頼んだ時白銀の家族は死亡を確認済みだったはずじゃなかったの!？」

唐突に話に出てきた内容を見過ごせず夕呼が待ったをかける。一方肝心の武はというと思いがけない報せに茫然自失の状態であった。為した張本人は珍しく申し訳なさそうに次の言葉を述べていく。

「ええ、これに関しては謝罪をするべきなのでしょうな。どうやら私の先代に当たる方が情報を隠蔽したらしく、今回の一連で先代に会う機会がありましてその際偶然にも発覚したのですよ。」

「あんたの先代云々はどうでもいいとして・・・成る程、さっき話に出てきた九能少佐つてのがそうなのね？」

ええ、と肯定する鎧衣を武は信じられない気持ちで見ていた。

（母さんが・・・生きてる。もうこの世界には純夏やこの世界のオレの事を知っている人は居ないと思ってたけど、知代姉以外にもまだ居たんだ）

実際に会つてもどうしようもない、今此処に存在する「白銀武」という人物は彼女らが知る「白銀武」とは違うというのに、武は嬉しくて涙が出てきそうだった。

「では、私はこれにて失礼するとしましょう。また会おうシロガネ

タケル君。・・・期待しているよ救世主」

最後は聞き取れなかったが、そう言って鎧衣は部屋を後にしたのだった。

「少しは落ち着いたかしら？」

「すみません・・・いきなりだったものですから」

鎧衣が退出してから数分、武は先の衝撃的な話を頭の中で整理するのに時間が掛かっていた。その間の時間を夕呼は考えをまとめあげるのに使い、霞は武にずっと寄り添っていた。

「分かっているとは思っけど・・・」

「はい・・・記憶はあっても所詮は姿形が似た別人。それでも嬉しかったんです。あいつを、この世界の昔の純夏を覚えている人が居たというのが」

「あっそ・・・」

（白銀さん・・・）

自分の事をそっちのけで喜びを表す武。極限まで突き詰めていくと自分は居なくてもいいという単なる自傷に近い独白。そんな武に夕

呼は気に喰わないからこそそっけなく返し、霞は心情を慮り辛そうに見ていた。

無論武自身も消えたいと考えている訳ではない・・・ないのだけれど、やっぱり自分は純夏や知代、楓にとっては別人になってしまいう。純夏は受け入れてくれたがその事で拒絶されるのが怖いのだ。だから、最初から期待なんかしない方がいい。そう決め込んで少しでも傷つかないようにしている。

「白銀・・・恐らくだけどあんたは近い内に母親と出逢うことになると思うわ。その時、秘密を打ち明けるかどうかはあんたの判断に任せる。」

「ちょっと待ってください。そんなことをしたら・・・」

「別に今更でしょう？勿論誰彼構わない訳ではないわよ。あんたとの関わりが深いこと、なおかつこの世界のあんたを知っていることこの二つが条件」

そう言われても尻込みしている武。以前の世界では絶対に話すなど言われていたことを、今度は話してもいいと言われ戸惑っているのだ。それに自分が本当はどうしたいのかも分からない。話して理解して欲しいのか、それとも今のまま続けたいのか。

苦悩する武。そんな姿は見たくなくて、またかつて自分に手を差し伸べられ救ってくれたように彼を助けたくて霞は自分の想いを告げる。

「白銀さん・・・」

「・・・霞？」

「信じられませんか？」

「・・・霞は変な所でキツイなあ」

「ごめんなさい・・・でも、白銀さんは私に思い出をくれました。」

「それとこれとは話が違うだろ？」

「同じです・・・私の能力を知っても白銀さんは変わらずに接してくれました。だから・・・」

「・・・そうかもな。きつと・・・霞の言う通りなんだろ。ありがとうな、霞」

ぼふっ、と感謝を込めて頭を撫でてやり、今は自分の気持ちを誤魔化す。霞も武の中でわだかまりが残っていることに気がつかないはずが無いけれど、それでも今は大きくて暖かな手に身を委ねるのであった。

一人きりとなった部屋で夕呼は武の報告書を読んでいた。みちるの報告と大した変わりが無いことにひと安心すると、姿勢を崩し椅子にもたれ掛かってまた別の資料を手にする。それには知代や佐奈の名前が記されていた。そしてもう一枚、夕呼の手書きと思われる資

料。見つめる夕呼の視線は厳しい。

「居るべき存在が居なくて、本来なら居ない存在が此処には確かに存在する。恐らく白銀の母、九能についても同じ・・・これは何を示しているの？」

普段人には見せないような弱々しい表情と口調。そんな独り言に応える者などなかった。

Episode?? (後書き)

一つ訂正というか、修正というか、謝罪というか・・・

最初の方の設定で武の右目が銀色になっていましたが、変化しているのは飛鳥搭乗時とその後数分だけ、ということは今更ながら付け加えさせてくださいm(____)m

普段は元の色に戻ってます

さて次回の投稿についてです。読んでくださる方には申し訳ありませんが、また時間がかなり空くことになると思います。さらに次回は本編と何ら関係の無い内容となりそうですorz

ちょっと息抜きで書いてみたものなのですが、本来ならそちらも書いてみたかったのでご了承をm(____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0823r/>

Muv-Luvもう一度この手に

2011年9月18日08時43分発行